

令和7年度

なんじょう歴史文化
保存継承事業 年報

南城市教育委員会 文化課



00. 目次

なんじょう歴史文化保存継承事業について

01. 沖縄戦体験の証言

沖縄戦体験の証言について	2
凡例	3
証言	
知念 正孝（佐敷・外間／村内避難）	4
中山 きく（佐敷・新里／学徒隊）	7
永山 盛勇（佐敷・兼久／玉城村・知念村へ避難）	30
平田 ミヨ（佐敷・手登根／一般疎開）	38
宮城 初枝（佐敷・津波古／南部避難）	40
匿名（非公開／農兵隊）	51
証言に出てくる主な用語（五十音順）	55

02. 戦後史（産業）調査

(1) 戦後史（産業）調査について	66
(2) 戦後史（産業）聞き取り調査記録	67
(3) 2025年度 沖縄国際大学経済学部経済学科 専門演習 ～南城市の戦後産業調査～	74

03. 普及・継承事業

(1) 令和7年度 平和教育担当者連絡会	86
(2) 南城市の沖縄戦学習教材開発ワークショップ	91
(3) 令和7年度 親子向け歴史講座「南城市の戦争遺跡」	100

編集後記	104
------------	-----

なんじょう歴史文化保存継承事業について

本事業は、南城市の歴史・文化について調査研究を行い、冊子の刊行や、調査成果・資料を活用した学習会等を通して普及・継承を図ることを目的としている。本『年報』では、令和7年度(2025)に実施した事業の成果について掲載、報告する。

また、本市教育委員会が運営しているウェブサイト「なんじょうデジタルアーカイブ(略称:なんデジ)」(<https://nanjo-archive.jp/>)においては、南城市地域の古写真や映像、デジタル化した市町村史等を公開しているほか、本事業の調査成果も順次公開している。このように、紙媒体で調査成果を普及するほか、ウェブ上で調査成果の公開を即時に行うことで、南城市の歴史・文化情報の発信の拡大・充実化に努めている。

■令和7年度(2025)実施事業

令和7年度に実施した事業の概要は以下のとおり。

1. 調査研究に関すること

(1) 沖縄戦体験の証言の原稿化作業

『南城市の沖縄戦 資料編』の調査過程で聞き取りを行ったが、未発表である沖縄戦体験の証言について原稿化し、本書に掲載した。

(2) 南城市の戦後史(産業)調査

令和5年度(2023)より調査を開始した戦後史(産業)について引き続き、市民への聞き取り調査、資料収集を行った。また、調査成果のレポートを「なんデジ」において公開した。

2. 普及継承に関すること

(1) 令和7年度 平和教育担当者連絡会

学校現場における平和学習の課題に対し、これまで文化課が蓄積してきた資料や取り組み事例等を紹介・周知し、改善の一助となることを目的として開催した。対象は市内小中学校の教員。令和7年4月30日実施。

(2) 平和学習実施、見学

南城市立知念小学校にて、平和学習を実施。対象は4,5,6年生。令和7年6月18日実施。また、外部講師による平和学習の特設授業を見学、記録を行った。令和7年6月各日実施。

(3) 移動展「戦後80年 沖縄戦×琉球大学」

戦後80年の節目に、琉球大学の沖縄戦研究・教育活動の取組みの紹介、同附属図書館が所蔵する沖縄戦関連資料の企画展を南城市で開催。併せて南城市の沖縄戦に関する資料、1945年米軍撮影による空中写真の展示を実施。令和7年7月26日～8月7日まで実施。

(4) 南城市の沖縄戦学習教材開発ワークショップ

市や旧町村の調査によって聞き取った戦争体験の証言を学校現場の平和学習で活かすノウハ

ウを共有することを目的として開催した。対象は市内小中学校の教員。令和7年8月1日実施。
※令和6年度までは「戦争体験証言を用いた教材開発ワークショップ」と題していたが、今年度より題名を変更した。

(5) 親子向け歴史講座「南城市の戦争遺跡」

戦後80年の節目にあたり、親子向けの歴史講座を開催。外部講師を招き、南城市内の戦争遺跡について座学と現地での解説を行った。対象は小中高生とその保護者。令和8年1月31日実施。

3. 『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』刊行

01. 沖縄戦体験の証言



1. 沖縄戦体験の証言について

2006年（平成18）に南城市が誕生して以降、南城市教育委員会文化課においては、沖縄戦体験に関する多くの聞き取り調査を行った。その成果の一部を『南城市の沖縄戦 資料編』（2020年）、『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』（2021年）に掲載した。しかし、新型コロナウイルス感染症による作業の遅滞や、紙幅の都合等により計画変更を余儀なくされ、現在も多くの証言が未発表のまま残っている。

沖縄にとって最も重要な歴史的事象のひとつである沖縄戦。これらの貴重な証言を次世代へ継承していくために、過去の聞き取り調査の内容をまとめ、掲載許可を得たものから順次発表することとした。本紙では、掲載許可をいただいた6人の証言を掲載している。

体験を語っていただいた話者の皆さま、そのご家族の皆さまに対し、この場をお借りして感謝申し上げたい。

証言掲載一覧※敬称略、五十音順。

	氏名	出身字名 ※現在の名称
1	知念 正孝	佐敷・外間
2	中山 きく	佐敷・新里
3	永山 盛勇	佐敷・兼久
4	平田 ミヨ	佐敷・手登根
5	宮城 初枝	佐敷・津波古
6	匿名	非公開
証言に出てくる主な用語集（五十音順）		

協力者・協力機関※敬称略、順不同

山内優希（北中城村教育委員会生涯学習課）

川満 彰（沖縄大学非常勤講師）

山城彰子（琉球大学国際地域創造学部講師）

若梅会

ひめゆり平和祈念資料館

凡 例

- 1 本紙に掲載している証言は、事務局が話者または話者のご家族から許可を得たものに限る。
- 2 証言は、事務局及び調査協力者が採録した音声を起こした原稿のほか、聞き書きで作成した原稿もある。
- 3 証言は、話者の語りを翻字した原稿をもとに、事務局並びに原稿作成者が資料としての読みやすさを考慮し、語句や文法、表現、時系列を整えたり、脚注を加えたりしている。また、必要に応じて本文中に〔 〕で括って当時の状況等を補足している。
- 4 引用した書籍、論文などは原則として脚注に次の順序で表記した。
 - (1) 書籍
著編者名『書籍名』出版者名 刊行年 頁
 - (2) 論文
著者名「論文名」編著者名『集録書名』出版者名 刊行年 頁
- 5 人物名については敬称を略した。
- 6 人物の生年は原則として和暦で表記した。
- 7 本文中において固有名詞、専門用語、読み方が難しいと思われるものなどにはよみがなを振った。原則として平仮名で振り、方言音についてはカタカナで振った。ただし、引用文や資料などに関してはその限りではない。
- 8 地名・行政区名は原則として当時の地名を記載し、() 内に現在の地名を記載した。
例：知念村（現 南城市）
- 9 本文中の年号は基本的に西暦で表記し、() 内に和暦を表記した。
例：1945 年（昭和 20）
- 10 しまくとうばの語りは() で現代語訳を補った。
- 11 屋号は〈 〉で括って表記した。
- 12 話者の語りの中で、現代において差別的と受け取られかねない表現（部落など）は、他の語句に置き換えた。
- 13 沖縄戦体験者たちは、しばしばアメリカ軍に収容されることを「捕虜になる」と表現している。軍事用語としては「捕虜」とは相手側に捕らえられた兵士を指す言葉だが、本書ではそのまま掲載した。

外間にいた日本軍

沖縄戦が始まる前、外間の殿¹の隣には日本軍が造った防空壕があり、日本軍のある部隊がそこに陣地を構えていた。私はまだ幼かったので、部隊名はわからない。この壕には大砲があった。馬天の海に敵の船が入って来たときに撃つという想定で設置されていたそうだ。

外間には標準語が達者なおばさんが1、2人ほどいて、彼女たちがその壕にいた日本兵たちの話し相手になったり、部隊と地元の人たちとの間の通訳をしたりして、部隊にいろいろな手助けをしていた。当時はウチナーグチ（沖縄方言）しか話せない人（お年寄りなど）もいて、壕にいた日本兵たちと話がうまくできなかったのである。

この部隊には、水や芋、クルザーター（黒砂糖）、イモクジ（芋くず）などの食料を地元の人々の家から運んでいた。これらは外間の女性たち（婦人会のような感じだった）が中心になって持って行っていた。芋は民家で炊いたものを丸パーキに入れて届けており、日本兵が芋を皮ごと食べていたのを覚えている。彼らはとても腹を空かせていたのだろう。クルザーターとイモクジは貴重で、自分たちにも必要なものだったので、多くの量を部隊に持っていくことはなかった。

防空壕と先祖代々の墓に避難

アメリカ軍の攻撃が始まってからは、家族（父方の祖父母、両親、自分）で防空壕に避難した。この防空壕は、私たち家族の土地に父が地元の友人たち2、3人と一緒に掘ったものだった。現在（2016年）そこは空き地になっている。当時、そこには大きなガジュマルの木が何本も生い茂っていた。壕は木と木の間であって、木の根の下に横穴が掘られていた。壕の中で立つことはできなかったので、高さは1メートル30センチぐらいだったのではないかと思う。壕内には、出入口のほかに空気穴も造られていた。

昼間は壕に避難し、アメリカ軍の攻撃がやむ夜間に家に戻って食料の調達などをしていた。水は夜のうちに井戸で汲んで一升瓶に詰め、それを壕内に5、6本は置いていた。壕内では時間があつたので、籾殻のついた米が入った一升瓶を両足ではさみ、音を立てないようにしながら竹でつついて精米した（籾殻を取り除いた）。当時は精米所がなかったので、そうやって精米していた。

壕では火が使えなかったため、私はクルザーターとイモクジを井戸から汲んできた水で溶かしたものを、親に飲まされたことがある。火を通していないので衛生的にも良くなかったと思うが、当時はそんなことはお構いなしだった。今の子どもたちは見向きもしないだろうが、当時のことを考えると今でも贅沢は言えない。

また、戦前から戦時中にかけて、夜間には若い人やお年寄りが交代しながら集落内の夜回りを

¹ 国道331号沿いの外間毛にある殿。外間ムラの創設者、外間子の屋敷跡といわれている。（南城市教育委員会編『南城市の御嶽』南城市教育委員会 2018 45頁）

して、煙や明かりが外に漏れていないかを確認していた。

この防空壕に避難した後、父は一度防衛隊にとられて弾運びをしたらしい。その後、自分の判断で防衛隊を抜け、家族のいる防空壕に戻って来た。

父が戻ってきてから、アメリカ軍が集落に近づいて来たため、私たちはだんだんと山の方に追い詰められ、現在のゴルフ場（守礼カントリークラブ）の下にある自分たちの門中墓（知念門中の墓）に避難するようになった。

屋比久と大川での収容所生活

墓に避難していたとき、5、6人ほどのアメリカ兵が「沖縄の皆さん、戦争は終わりました。心配しないで出てきてください。飲み物も食料もあります。心配いりませんから出てきてください」と呼びかけていた。彼らは戦前にハワイへ移民した県出身者の子（二世）で、投降の呼びかけはウチナーグチだった。彼らは英語、日本語、ウチナーグチを話せる人たちだった。

呼びかけを受けて、まずは子どもたち、次にお年寄りが墓を出た。それで安全だと分かり、両親も墓を出た。私たちは墓の前に並ばされ、アメリカ兵から水や食べ物をもらった。親たちは「（その食べ物は）危ないからカム（食べる）なよ」と言っていたが、二世が食べて見せ、大丈夫だと示してくれた。それからは、お腹も空いていたのでがむしゃらに食べた。

それから私たちは屋比久の集落に下りてきて、上ヌ毛（現在の屋比久児童公園）のすぐ後ろの平地に張られていたアメリカ軍のテントに収容された（詳細な場所は不明）。はっきりとは覚えていないが、けっこう大きなテントが3つぐらいあったように思う。私たちのように山から下りて来た人たちは、テントや屋比久集落に残っていた家に収容されていた。また、上ヌ毛の前方にはコンセット²が2つぐらい設置されており、それらはアメリカ軍が使っていた。

その後、私たちはアメリカ軍のトラックに乗って中城まで行き、その後アメリカ軍の船に乗ってヤンバルの大川（現名護市）の収容所に移動させられた。そこで家族全員がマラリアに罹った。上からかぶれるものを全てかぶっても震えが止まらなくて大変だった。幸い、家族で亡くなる人はいなかった。

大川に長く滞在したのち、自分たちの村に帰れることになった。大川からはアメリカ軍のトラックに乗って帰ってきた。トラックが外間に着くと、外間の人たちは現在の国道331号のところで降ろされた。

戦後の生活

子どもたちは、二世から「（お菓子をもらいたいときには）『ください』ではわからないから『ギブミー』と言いなさい」と習い、アメリカ兵を見つけると手を出して「チューインガムギブミー、チョコレートギブミー」と言うようになった。また、のちに青年たちがふざけて「ありがとうテンキューノーサーベイ（ノーサーベイは「余計なことをするな」という意味で使っていた）」と、

² アメリカ軍の組み立て式かまぼこ型兵舎のことで、その形からマルヤーとも呼ばれた。戦後の沖縄では、アメリカ軍部隊の移動に伴い民間に払い下げられ、学校、病院、役所などに利用された。

ヤマトグチ（日本語）と英語をマンチャーヒンチャー（まぜこぜ）にした言葉をつくり、子ども達に教えていた。子どもたちはそれを家やいろいろな場面で使っていた。

上ヌ毛の前方にあったコンセットは、アメリカ軍が引き揚げたあとに、大人たちが現在の佐敷さしき小学校があるところまで運んだ。長い道のりを何度も休みながら運んだ。道中の何ヶ所かで、おばさんたちが一斗缶に入れて汲んできた飲み水を用意していた。そうやって運んだコンセットを、しばらく学校で利用した³。

ものがない時代だったので、学校では、セメントが入っていたアメリカ軍の袋を先生たちが切り分け、私たちはそれをノート代わりにして使っていた。鉛筆えんぴつはアメリカ軍からの配給はいきゅうがあったが、本数が足りないので、1本を半分に折ったものが先生から配られた（1本を2人で分けた）。また、ハワイにいた沖縄出身者たちから鉛筆や食料なども送られてきた⁴。彼らにはお世話になった。

大人たちは、ヤンバルから運んできた木材を使って茅葺かやぶきの掘っ立ほ た小屋こやを造っていた。しかし、それらは台風が来るたびに吹き飛ばされてしまった。家や学校を建て直すために茅はあちこちで頻繁ひんぱんに刈られたので、伸びる暇ひまがなく不足していた。そのため、アメリカ軍がヤンバルから運んできた竹を茅の代わりに使っていた。ヤンバルの農家とアメリカ軍の協力のおかげで、家を建てることができた。それから少しすると、グシチャー（ススキ）やマカヤー（チガヤ）が伸びてきたので、それらを山に取りに行き、屋根たきぎや薪として使っていた。私も、友達5、6人で「リッカ、リッカ（行こう、行こう）」と鎌かまを持って取りに行くのを日課としていた。

また、親慶原おや け ぼるにあったアメリカ軍施設では地元の若い人たち（男性も女性もいた）が働いていた。夕方には、彼らが茅葺かやぶきの公民館で「私は今日何々を盗んできたよ」と、自分の「戦果せんか」の自慢話をしていた。当時は「戦果」をあげるのが当たり前になっていた。今でも忘れられないのは、親慶原のアメリカ軍施設に放置されていた開封済みのドラム缶を大人たちが家まで転がってきて、それを粉殻入れもみがらに使ったり、茅葺かやぶきをするときの台として使ったりしていたことだ。ドラム缶を見ると、今でもそのことを思い出す。当時のドラム缶は、現在のものよりも厚くて丈夫あつだった。

（2016年 井口学による聞き取り 構成：山内優希）

³ 1948年（昭和23）8月20日に屋比久分教場にあった丸型コンセット6棟を、村民総出で佐敷小学校に移築し、18教室を造成した（佐敷小学校創立百周年記念事業期成会 記念誌編集委員会『佐敷小学校百周年記念誌』佐敷小学校創立百周年記念事業期成会 1983 121頁参照）。

⁴ 例えば、1949年には戦前ハワイに移民していた屋比久孟吉（佐敷村仲伊保出身）らによって、乳用山羊が届けられた。1949年6月、屋比久氏は佐敷村を訪れている（佐敷村『佐敷村誌』佐敷村 1964 27頁）。

中山 きく (旧姓津波 昭和3年生まれ 佐敷・新里)

がくとたい
〈学徒隊〉

二高女への入学

私は生まれも育ちも佐敷村の新里(現 南城市佐敷)で、二高女(沖縄県立第二高等女学校)¹に入学する前の小学校6年生まで、ずっと新里で暮らしていた。戦前、私の家族は大阪で小さな商売をしていた。そのため、私は父のきょうだいであるおばと沖縄で2人暮らしをしていた。

父は毎年沖縄に帰ってきて、「大阪に一緒に行こう。美味しいものが食べられるし、きれいな服も着られる。いい学校にも入れる」と私を誘った。しかし、私は8歳のときから優しいおばに育てられていたので、おば1人を置いて大阪に行く気にならなかった。なので「私は沖縄でいい」と言って行かなかった。

女学校への進学について、小学校の先生には「一高女(沖縄県立第一高等女学校)²に行きなさい」と言われたが、父は「二高女がいい」と言って聞かなかった。父には新しい学校ほどいいという考えがあった。また、当時の二高女は音楽と美術で有名で、今でいう全国大会に出るくらいの実力があった。その上、沖縄県内の体育大会でも二高女の成績はよかった。そういうこともあり、父が私に二高女への進学を勧めてくれた。

受験会場は二高女の校舎で行われた。試験の内容は学校からの内申書と口頭試問だった。軍国主義教育の時代なので、国に対する気持ちなどを尋ねられた。私は軍国主義少女らしく、「お国のために何でも頑張る」と答えた。筆記試験はなかった。

佐敷からは5人が受験して、6年生の私ともう1人の子³だけが合格した。他の3人は私より1期上の高等科生で、のちに首里高女(沖縄県立首里高等女学校)⁴に合格した。



沖縄県立第二高等女学校 本館及北校舎
撮影年：1940年2月11日
(那覇市歴史博物館所蔵)

¹ 現在の那覇市松山(現 松山公園付近)にあった。同校から動員された生徒たちのことを戦後「白梅学徒隊」と呼んでいる(公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和記念財団立 ひめゆり平和祈念資料館編集・発行『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』2011[第2版] 144,145頁 参考)。

² 現在の那覇市安里にあった。同じ敷地内に沖縄県女子師範学校があり、両校合わせた通称は「女師・一高女」である。この2校から動員された生徒たちのことを戦後「ひめゆり学徒隊」と呼んでいる(前掲『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』132,133頁 参考)。

³ 『佐敷町史 戦争』では「小学校からの同級生の嶺井千代さん」と証言している(佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 戦争』(佐敷町役場 1999 260頁)。

⁴ 現在の那覇市首里桃原町にあった。同校から動員された生徒たちのことを戦後「瑞泉学徒隊」と呼んでいる。なお、この学校名は1943年に改称されたもので、それ以前は「沖縄県立女子工芸学校」という名称だった。そのため、当時の中等学校生には「工芸学校」という名称の方がなじみ深い(前掲『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』158頁 参考)。

受験時にとっても感激した思い出がある。私たちは旭町（現 那覇市）の馬車宿小⁵に宿泊していたのだが、そこに私の字（新里）出身の男子師範学校（沖縄師範学校男子部）⁶の生徒が訪ねてきて、二高女まで連れて行ってくれたのだ。しかし、この方はのちに戦死した。

佐敷から二高女に行く際は、与那原まではバス、たまに客馬車に乗り、与那原からは軽便鉄道に乗った。軽便鉄道の与那原線にはお世話になった。

着ることができなかった憧れの制服

佐敷から二高女へは遠くて通学できないので、私は通堂町（現 那覇市）で1人暮らしをしていたおばさんのところに下宿した。このおばさんは親同士が知り合いだった。最初の3ヶ月くらいは千代ちゃん⁷も一緒だったが、のちに千代ちゃんは自分の親戚の家に下宿するようになった。

女学校の制服には憧れていた。当時、ほとんどの女学校はセーラー服で、（襟の）線の本数や太さで区別していた。しかし、二高女だけはスリーピースだった。ひだがたっぷりあるジャンパースカートで、裾にはゴムが入っており、上に上げて締めればブルマになった。ブラウスは白で、ベストとブレザーコートもあった。

この制服に憧れていたが、着ることができなかった。というのも、1941年（昭和16）入学の私たちの学年からは全国統一の女学生服に変わったからだ。当時は、（1937年に始まった）日中戦争の影響で、着るものや食べるもの、学用品・日用品など全てが困窮していた。そのため、ひらひらした華やかな制服は布地をたくさん使うということで、ヘチマ襟（の上着）とタイトスカートの制服に変わった。先輩たちの制服は変更なしだった。4月いっぱい私服で、5月1日に変更された制服を渡されたときは本当にショックだった。みんな壁にくっついて（うなだれて）、「なんでこんなおばあさんみたいな制服を着るのか」とがっかりした。しかし、すぐに思い直して、戦争を勝ち抜くまでは我慢しようと思った。戦争はすぐに勝つと思っていた。

ヘチマ襟の制服は校章と名札が違うだけで、あとは色も形も他の学校とまったく一緒だった。当時は私用で出かけるときも必ず制服を着ていた。夜間には「教護連盟」といって、男子の学校と女子の学校の両方が交代だったと思うが、毎日何人かの大人が見回りをしていた。学生が夜間に歩いていると、そのことを学校にすぐに伝えられた。私は真面目だったので夜は外出しなかったが、（暗いので）近づかないと（学生かどうか）わからなかった。

女生徒の髪型は学年ごとに決まっていて、1年生はおかっぱ、2年生は分けるだけ、3年生は後ろで結ぶ、4年生は三つ編みだった。これはほとんどの女学校がそうだった。自分より先輩かどうかかわかるので、先輩だったら会釈した。

⁵ 馬車ムッチャー（馬車持ち）が那覇への往復途中で休憩した宿のこと。

⁶ 現在的那覇市首里当蔵町（現 沖縄県立芸術大学）にあった。同校から動員された生徒たちのことを戦後「師範鉄血勤皇隊」と呼んでいる（前掲『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』36頁 参考）。

⁷ 同じ佐敷村出身の本永（旧姓嶺井）千代氏のことだと思われる（白梅同窓会編集・発行『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』1995 304頁）。

当時の暮らし（1～3年生のころ）

1年生のころは通常通り各教科の授業が行われていたが、1941年（昭和16）12月8日（アジア・太平洋戦争の開戦）以降は学校の内情がどんどん変わっていった。

2年生にあがってすぐ、英語が廃止になった（2年生の2学期に廃止になったという人もいる）。私は（この対応に対して）逆だと思って不満だった。敵を知るには敵の言葉を学ぶことが必要だと思ったからだ。その後、英語を学ぶ機会はなかった。教科としてなくなったのは英語だけだが、戦時訓練というものが新しく入ってきて、藁人形を竹やりで突く練習もした。

3年生にあがると、状況はもっとひどくなった。当時は徴兵令があったので、ほとんどの男の人は戦地に行っていた。女の人でも、健康で子育てから手が離れた人は軍に関わる作業に動員された。一番困ったのは食料だった。体の不自由な人や子持ちの女性たちは、農業を細々としかすることができない。食料は配給制のため買いたいものを買えず、あるものをみんなで分け合わなければならず、量は絶対に足りない。米や醤油、味噌や油もみんな、家族の人数に応じた量が配給された。どうやって家族の胃袋を満たすか、当時の女性は大変だったと思う。

私の家には父が仕送りをしてくれていた。お米は買えなかったが、おばは小さな畑で野菜を作っていた。昔は野菜を人からいただいたり、あげたりしていた。飼っていた豚にはあまり良くない芋を与えていた。（普段の食事は）たいていはジューシーメー（沖縄の炊き込みご飯）だったが、おばは、私だけにたまに白いご飯を食べさせてくれた。

下宿先では、麦やさつまいもなどが入った混ぜご飯に、おかずとして佃煮や漬物が少し添えられていた。タンパク質が足りないが、それでも食べることができたらいいほうだった。弁当は芋を2個ぐらい、ハンカチに包んで持っていった。

授業の代わりに増産活動（3年生）

ある日、校長先生に「兵隊さんは戦地で命をかけて戦っているというのに、君らは学校で勉強ばかりしていていいのか。食糧難だから増産活動に携わりなさい」と言われた。これは命令というよりはお願いのようなものだったと思う。私たちはすぐに「はい」と言って、（増産活動への参加を）嫌がらなかった。本当に食べ物がなかったからだ。

この増産活動は休日ではなく、平日に授業の代わりに行っていた。（活動場所は）南風原（現南風原町）や西原（現西原町）まで行ったかもしれない。移動は徒歩だった。

二高女の生徒は90パーセントが那覇出身だった。那覇は当時から県庁所在地で家が密集していた。そのため、那覇出身の同級生は農業なんて見たことがなかった。増産活動では畑で雑草取りをしたが、間違えて人参の芽も取ってしまった。私は田舎の出身なので「それは人参だよ」と教えたら、（間違えて人参の芽を取った子は）驚いて土に戻っていた。気持ちは一生懸命でも、経験がないのでそのような間違いをしていた。たまにウージ畑（さとうきび畑）の下草取りもした。ひよろひよろした草なので楽しく取っていた。

ニュース映画を観て看護婦に憧れる

当時は私のような田舎出身の学生が実家に帰るときには汽車に乗ることが許されたが、女学生や（男子）中学生が汽車に乗ることは禁止されていた。映画館やレストランもぜいたくだとして禁止だった。（外出は）制服を着ているのですぐばれるし、ばれたら学校に連絡がいくので大変だった。ただ、レストランは家族と一緒に入ることができた。

映画館も禁止されていたが、年に何回かは団体見学があり、1年生から4年生まで一緒に映画を観に行った。ただ、映画といってもドラマのような内容は一切なく、ニュース映画⁸だけだった。

唯一、2年生のときにニュース映画以外の映画を観た。『小島の春』⁹という、ハンセン病の人たちの物語で、非常に心に残っている。

ニュース映画の内容は、日中戦争で勝ち戦^{いくさ}をしている場面や、中国大陸にある野戦病院などだった。映画の中のけが人は清潔な白衣を着ていた。看護婦さんも白衣を着て赤十字のマークを付けて、帽子をかぶっていた。私はその姿に憧れ、赤十字の看護婦さんになりたいと思った。それが、のちに沖縄戦で学徒隊に進んだ理由の1つでもあった。

沖縄戦はちょうど梅雨^{つゆ}の時期だった。私が勤務していた野戦病院の重傷者は何日間も放って置かれ、大小便も処理されずそのまま、しかも（傷口には）ウジが湧いている、そんなものすごい格好^{かっこう}で運ばれてきていた。私は患者が野戦病院に運ばれてきたときの様子を見たことがないが、見たことがある人の話によると、トラックが入れるところまではトラックで運び、その後は女子青年団¹⁰などが担架に乗せて連れてきたそうだ。（ニュース映画のなかの）日中戦争ではそのようなことはなく、患者は清潔な白衣を着ていた。

戦後は、戦争で傷を負った人でなくても、白衣を着て物乞い^{ものご}をする人がいた。現在の国際通りの、かつて三越^{みつこし}があった辺りなどで、お金を入れる容器を置いて座っていた。最初のころは傷病兵^{しょうびやう}であったと信じ、かわいそうだと思ってお金を入れていたが、なかには傷病兵ではない人もいたということだった。

夏休みの作業（3年生）

3年生の時から食糧増産活動に携わるようになったが、夏休みには田舎に帰り、毎日ムラヤー（現在の公民館）で小さな子どもたちを集めて遊ばせていた。これは大人たちに農作業に専念してもらうため、同じ字出身の女学生たちによって行われた。

⁸ 戦前から戦後にかけて映画館で上映されていた、時事的な話題を扱った短編の記録映画のこと。テレビの普及に伴い衰退した。（国立国会図書館リサーチ・ナビ「ニュース映画」参考 https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/avmaterials/post_602011）。

⁹ 1940年公開の日本映画。瀬戸内海・長島の国立らい病療養所における患者救済の記録を女医・小川正子が綴った体験記をもとに、八木保太郎が脚色、豊田四郎が監督で映画化した。（映画ナタリー 作品情報「小島の春」<https://natalie.mu/eiga/film/137140> 参考）

¹⁰ ここで言う「女子青年団」は、沖縄戦で救護班や炊事班などの要員として日本軍に動員された女性たちのことを指していると思われる。

また、佐敷出身の男女で上の学校¹¹に通学している人たちの会があった。佐敷村学生会という感じの名前だったかもしれない。その人たちと一緒にイーバル（上原）¹²などの陣地構築作業^{じんちこうちく}に行った¹³。私が二高女で本格的に陣地構築作業に行くようになるのは、もう少し後のことだった。

飛行場造りや陣地構築（4年生）

1944年（昭和19）からは陣地構築や竹やり訓練などが多くなり、正規の授業はほとんどできなくなった。このころは小祿飛行場（現 那覇空港）の整地作業にも行った。日本軍には大型機械がなかったので、^{くわ}鋤やツルハシなどの農機具で固い土を砕き、ショベルでザルに入れて運んだ。全て人力だったので、いくらでも人手が必要だった。女学生、中学生、周りの住民など、動ける人たちはみんな動員された。飛行場のほかにも、丘の上に^{たいほう}大砲を置く^{ほうだい}砲台や^{ぼうくうこう}防空壕も造りに行った。

陣地構築への参加は、年齢的にできない人たちや、小さな子どもがいて参加できない人たちもいた。当時は食べるものがなかったため栄養状態が悪く、今（話者への聞き取り時は88歳）の私より若い50歳くらいの人たちでも老けていた。そういう人たちは（作業への参加などの）軍への協力ができなかったため、1944年（昭和19）の夏ごろから^{そかい}県外疎開が始まった。「なんで自分の生まれ島から（離れるのか）、どこに行くのか。行かない」と年寄りたちは怒っていた。しかし、国策だから反対できなかった。一方で、私たち（学生）は軍に協力できるから疎開は許されなかった。

私の両親とおば（私を育てたおばとは別のおば）、きょうだいたち（弟4人と妹1人）は大阪にいたが、情報をどう見間違ったのか、沖縄に帰ってきていた。大阪にいればもっといい暮らしができていたと思う。彼らは、食べるものがなくて大変苦勞していた。

私は（陣地構築作業などを）一生懸命にやり、10年近く「戦争中の子ども」だったが、砲弾1発も機関銃弾1発も降らなかった。戦場は中国大陸などで、大変な目にあっているのは^{じゅう}現地の^{じゅう}住民たちだった。初めて戦争の姿を見せつけられたのは、1944年（昭和19）10月10日の^{じゅうじゅう}十・十空襲^{くうしゅう}だった。

十・十空襲で豊見城まで避難

十・十空襲があった日、私は那覇の下宿先にいた。仲間たちによると朝の7時ごろだったとい

¹¹ ここで言う「上の学校」とは、旧制中等学校（中学校、高等女学校、実業学校）や師範学校のことだと考えられる。

¹² 「上原（イーバル）」という地名が市内に複数あるため場所は明確ではない。ただし、1944年（昭和19）7月から12月まで知念村内で第九師団歩兵第十九連隊第一大隊（通称 武部隊）が陣地構築を行っており、その内の1カ所が知念村久手堅の上原である。久手堅の上原では戦車障害物の壕が構築された（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』534頁 参考）。

¹³ 陣地構築作業への学徒の動員については、中山さんが二高女4年生だった1944年（昭和19）から本格的に始まったと語られることが多い。しかし、その前年にも陣地構築への学徒の動員が行われていた可能性は否定できないため、ここでは中山さんの語りをそのまま記載した。

うが、ものすごい（飛行機の）爆音が聞こえてきた。（その爆音を聞いて）本当に喜んだ。というのも、この空襲前に何回か訓練をしていて、この日も訓練だと思ったから。

訓練の際は、警防団^{けいぼうだん}の人たちがメガホンを持って「訓練、警戒警報」と周りに触れ回り、しばらくすると日本軍の飛行機が7、8機ほど飛んでいった。（日頃から、）爆音が聞こえたら警防団の人が「訓練、空襲警報」と言い、それを聞いたら壕に隠れるという訓練をしていた。壕は畳1枚くらいのスペースで、しゃがんで座れるくらいの深さだった。入口には蓋^{ふた}をするように畳を置いて、その上に土を盛ってあった。飛行機の爆音が聞こえなくなると、（警防団の人が）「訓練、空襲警報解除」と言っていた。そうした訓練が3回くらいはあったと思う。だからみんな、10月10日も訓練だと思っていた。

しかし、この日は爆音の音が違った。戦後の記録を読むと、空襲は5回にわたってあり、延べ1,000機（1,396機）が飛んできたと書かれていた。単純に割ると（1回の空襲で）200機の飛行機が、沖縄にも宮古・八重山などの離島にも飛んできたことになる。200機の飛行機というのは信じられないが、記録上はそう書かれている¹⁴。

私は今日の訓練はすごいと思っていたが、警防団のお触れがなかった。午前中、私は隣近所の人たちと一緒に上之蔵^{うえのくら}（現 那覇市）にあった知念病院の大きな壕に入れてもらった。何年生のときだったか覚えていないが、私は通堂町の下宿先を出て、知念病院の近くに引っ越していた。壕には14、5人くらい入っていて、ぶるぶる震えていたが、爆弾はいっこうに落ちてこなかった。のちに聞いたことだが、アメリカ軍は、午前中は軍事施設を中心に狙^{ねら}っていたそうだ。私は敵ながらあっぱれだと思った。軍事基地を潰^{つぶ}せば兵隊がいくらいても動けないし、飛行機も大砲も使えないからだ。

午後から那覇に砲弾の雨が降った。当時、コンクリートでできた建物はデパートや大きな商社など数えるくらいしかなかった。そのほかの建物はほとんどが木造で、きれいな赤瓦^{あかがわら}の平屋^{ひらや}だった。高層建築はなかった。アメリカ軍はそこに焼夷弾^{しょういだん}を雨あられと降らせた。

どこからか、「辻町^{つじまち}（現 那覇市）が燃え始めた」という知らせが入ってきた。私の下宿先のおばさんが、「危ないから豊見城^{とみぐすく}に逃げよう」と言った。豊見城（現 豊見城市）にはそのおばさんの親戚がいたからだ。私はおばさんと2人で、飛行機から見られないようにしながら壕を飛び出した。本物の空襲のときには（食べ物などは）何も持っていなかった。救急袋だけはいつでも肌身離さず持っていたが、救急袋を食べることはできない。

国場川^{こくば}の近くまで来ると、隠れるところがなくてアメリカ軍の飛行機に狙われた。私たちだけでなく大勢の避難民が右往左往していたが、運良く誰も弾に当たらなかった。私たちは真玉橋^{まだんぼし}（那覇市と豊見城市を結ぶ橋）を越えて豊見城に行った。

¹⁴ 飛来したアメリカ軍機の数には次の通り。第1次空襲は午前7時から午前8時20分にかけて約240機、第2次空襲は午前9時20分頃から10時15分頃にかけて約210機、第3次空襲は午前11時45分頃から午後0時30分にかけて約120機、第4次空襲は午後0時40分頃から午後1時40分頃にかけて約110機、第5次空襲は午後2時45分から午後3時45分にかけて約160機（沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会 2017 173,174頁 参考）。

夜になって高台に上がってみると、那覇の街が火の海だった。私はその光景を見て、自分の下宿先も学校も燃えてなくなっているだろうと思ったが、その通りだった。

沖縄に戻ってきていた私の家族は、十・十空襲前に大阪に戻るつもりで、荷物だけ先に港に運んでいた。十・十空襲で、家族の荷物も（乗る予定だった）疎開船もやられてしまったが、幸いに家族は佐敷にいたので助かった。（同年の8月22日に疎開船の）対馬丸がアメリカ軍に撃沈されて^{つしまる}いたが、そのことは口止めされていた（^{げきちん}箆口令が敷かれていた）ため、私たちは知らなかった^{かんこうれい}15。

佐敷に帰る

十・十空襲の翌日は、豊見城のおばさんの親戚の家でお世話になった。ただ、いつまでもお世話になるわけにはいかないのだから、歩いて田舎（佐敷）に帰った。私には帰る家があったからよかった。（佐敷に帰ることを）学校には何も言わなかった。

家に帰ると、おばや母は私の姿を見て泣いて、「生きていたか」と私を抱きしめた。私はこんなにも家族に大事にされていたのだとつくづく思った。

1年生のときは学校に慣れていないし、友達とも深い付き合いがなかったので、土曜日に田舎に帰り、日曜の夕方に那覇に戻ってきていた。しかし、2年生からは帰宅は月に2回ほどになり、3年生になるとほとんど帰らなくなっていた。というよりも、私はずっと友達や軍のことだけを考えていて家のことを考える余裕がなく、帰れなくなっていた。（おばや母が泣いて私を抱きしめる様子を見て、）家のことを忘れていたことを本当に反省した。

田舎では芋は自分たちで作っていたが、食べ物はなかった。私は（田舎に帰って）すぐに仲間たちのことを考えた。誰が元気で、誰が犠牲になったかわからなかった。これはその後何年も、長いことわからなかった。二高女の校舎は1937年（昭和12）に放火で焼失し、1940年（昭和15）に新しく建て直された。立派で新しい校舎だったが、それも十・十空襲で焼かれてしまった。とはいえ、4年生に進級してからは、校舎は日本軍の兵舎として利用されるようになっていたので、学校にはほとんど行っていなかった。

[十・十空襲から間もなく、二高女では県知事官舎で授業が再開され、中山さんは新里から歩いて通学した¹⁶。しかし、週の半分は陣地構築に動員され、授業らしい授業を受けることはなかったという¹⁷。]

¹⁵ 1944年（昭和19）8月23日、那覇港から長崎へ航海中にアメリカ潜水艦の攻撃を受け撃沈した貨物船。県外へ疎開するために乗船していた784人の学童を含む1,484人（氏名判別者数）が犠牲となった（公益財団法人対馬丸記念会 ホームページ「対馬丸事件について」参考 <https://www.tsushimamaru.or.jp/tsushimamaru.php>）。なお、南城市出身の遭難者は12人いることが確認された（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』201頁 参考）。

¹⁶ 佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 戦争』（佐敷町役場 1999）掲載の中山きく「白梅学徒看護隊から無事生還して」（258～261頁）より補足。

¹⁷ 若梅会による中山さんへの聞き取り

家族の反対を押し切って看護教育へ

[1945年（昭和20）2月、二高女の稲福全栄校長は第三十二軍司令部から「生徒に看護教育を受けさせるように」という要請を受け、学校（県知事官舎のことだと思われる）で4年生70人を対象とした看護教育が始められた。これは従軍補助看護婦の養成を目的としたもので、^{たま}球部隊の衛生下士官^{かしかん}を教官とし、主として外傷の救急処置法や、伝染性疾患とその看護法が教えられた¹⁸。]

1945年（昭和20）の2月ごろ、佐敷村の役場を通して学校から連絡が来た。私の家には電話がなかったので、役場吏員^{りいん}（役場職員）の人が伝えてくれたと思う。学校も焼けて、先生方もどこにいるかわからなかったが、現在の西原町に一間だけ借りて、校長先生と4、5人の先生方が事務作業をしていたそうだ。

連絡の内容は、家の人が許可をしてくれたら、（山部隊¹⁹ 野戦病院看護教育隊へ補助看護婦要員として入隊し看護教育を受けるために²⁰）3月6日に国場駅に集まりなさいというものだった。これは命令ではなかった。この連絡の内容を家族に伝えたと、家族からは「行くな」と言われた。しかし、私は沖縄が戦場になると思っていたので、「なんで、大丈夫よ」と答えた。家族も沖縄が戦場になるとは思っていなかったが、（従軍補助）看護婦になったら必ず戦地に送られるのではないかと察していたようだ。私は「赤十字の看護婦さんになりたい」と親には言っていたと思うが、十・十空襲の後ただただに猛反対された。

私は反対する家族をほとんど押し切って家を出た。国場駅までは歩いていったと思う。千代ちゃんも来ていたが、違う字^{あざ}（字佐敷）なので一緒には行かなかった。千代ちゃんは「あなたのお母さんがよく許してくれたね」と言ったが、私は「母もおばも反対していたけど、私は『看護婦さんになって、傷ついた兵隊さんを看護するのが使命というか、当たり前でしょ』と言って来たのよ」と答えた。そして「千代ちゃんのお母さんはどうだったの」と聞いた。千代ちゃんは一人っ子だったからだ。千代ちゃんは、「初めは反対されたけど、『お国のためだから仕方ない』と許してくれた」と言っていた。

佐敷出身ではないが、（国場駅には）ゆりちゃん²¹も来た。ゆりちゃんは「お母さんにすまないことをした」と言っていた。ゆりちゃんのお母さんは、「お前（ゆりちゃん）までもし戦争で死んだら、私も自殺するよ」と言っていたそうだ。ゆりちゃんのお兄さんの戦死公報が2月に届いており、お母さんが悲しい思いをしているときに「看護教育を受けたい」と言ったから、（ゆりちゃんのお母さんは看護教育を受けに行く娘を）止めようとしたのだろう。子ども2人まで戦争で殺されたら生きていてもしょうがない、と（思ったのだろう）。国場駅には何人くらいいたのか、記録もないのでわからない。実際に看護教育を受けた人数は56人だったが、国場駅にはそれだ

¹⁸ 前掲「白梅学徒看護隊から無事生還して」より補足

¹⁹ 山部隊とは、日本軍の第二十四師団とその隷下にある部隊を示す呼称。

²⁰ 前掲「白梅学徒看護隊から無事生還して」より補足

²¹ 「ゆりちゃん」は平良百合子氏のことだと考えられる。同様のエピソードが前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』（59頁）に掲載されている。

けの人数はいなかった。何人かは、仲間たちが看護教育に行ったのを知ってから、後から加わった。

国場から東風平^{こちんだ}²²（現 八重瀬町^{やえせ}）までは先生と一緒にいった²³。道中でははじめに校歌を歌い、その次から軍歌を歌った。歌い終わると誰かが別の軍歌を歌った。気分は高揚^{こうよう}し、「これから看護教育を受けて看護婦さんになるんだぞ」という気持ちだった。その場面は記憶に残っている。ありったけの軍歌を歌ったと思う。

国場駅を出発したその日のうちに東風平の学校に着いた。（二高女の先生が）2人で東風平の学校まで送って下さったが、「軍が預かった以上、先生はいらない」と言われて先生たちだけ追い返された。そのため、私たちの看護教育に先生の付き添いはなかった。

山三四八六看護教育隊へ入隊

山三四八六看護教育隊では、積徳女学校（沖縄積徳高等女学校）²⁴も一緒だった。東風平国民学校に行ってはじめて、積徳高女の人たちも一緒だということを知った。人数は積徳の方が多かったと思う。その理由は、（山三四八六看護教育隊では）6つの班が編成されており、1～3班が積徳、4～5班が二高女、6班が沖縄出身の初年兵だったからだ。

〔中山さんは、山三四八六看護教育隊に「入隊」したという表現を用いる。〕「学生であって兵隊ではないのに、なぜ『動員』ではなく『入隊』なのか」と言われることがあるが、私は入隊という言葉を使う。なぜなら、私たちは「山三四八六看護教育隊内務班」だからだ。内務班^{ないむはん}という言葉で辞書で引くと、軍人が（兵営²⁵内）で起居する最小単位だと書いてある。最初のころは、大学の先生たちも『『動員』であって『入隊』ではない』と言っていたが、私が「内務班で生活しましたよ」と言うと「軍隊だ」と言っていた。だから、二高女と積徳高女は看護教育のときから軍隊に入っていた（と言える）。

私は第五内務班の所属だった。第六内務班は沖縄出身の初年兵で、衛生兵になる教育を受けていたのだと思う。各班の班長は兵隊で、（6人の班長のうち）5人が伍長、1人は1つ位が上の軍曹^{ぐんそう}だった。

厳しい「軍隊生活」

私たちは、「軍隊に入ったからには女性であると思うな」と言われた。寝起きする教室と看護教育を受ける教室は違っていた。

²² 看護教育の場所は東風平国民学校で、現在は八重瀬町立東風平中学校が建つ。

²³ 国場駅には、引率の金城宏吉先生と與那覇政男先生が待っていた（前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』58頁）。

²⁴ 現在的那覇市久茂地にあった。同校から動員された生徒たちのことを戦後「積徳学徒隊」と呼んでいる。なお、この学校名は1943年に改称されたもので、それ以前は「沖縄家政高等女学校」という名称だった。そのため、当時の中等学校生には「家政女学校」という名称の方がなじみ深い（前掲『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』166頁 参考）。

²⁵ 軍人が集団で居住する場所や、兵士が駐屯する仮舎を指す。

1日の暮らしはラッパ（が合図）だった。起床、消灯、昼食や集合もラッパで、（私たちは）日本軍隊とまったく同じ生活をしていた。

寝具は毛布を2枚ずつ渡された。もちろん日本軍の毛布だった。3月とはいえ、毛布2枚では寒くて大変だった。2人組になり、2枚の毛布を敷き、もう2枚の毛布をかぶって寝ていた。（この毛布の使い方について）だめだとは言われなかった。私物はわずかで、着替えが1, 2組くらいあればよかった。教室の周りにそれぞれの私物を置いていたが、「毛布をきちんと畳め」と言われたので、毛布も私物もきれいに畳んだ。

ある日、午前の看護実習を終えて帰ってきたら、教室内が毛布の山になって散らかっていてびっくりした。悪い人が入ってきてやったのか、軍隊にも悪い人が入ってくるのかと思っていたら、「畳み方がなっていないから畳み直せ」と言われた。（私たちは）きれいに畳んだはずなのにと思いながら畳み直したが、同様のことを3回くらいやられた。（後々、）これは気合を入れるために兵隊がやったのだなと思った。

2回目にびっくりしたのは、ご飯を食べるときだった。これについては、4班の仲間が書いた記録がある。私のいた班の班長は本当に優しい人で、一緒に教室でご飯を食べてくれた²⁶。ただ、4班の班長は階級が軍曹では他の班長よりも偉かった^{えら}ので、班長室まで食事を持っていかなければならなかった。4班の子が食事を持っていったら、「(食事を持ってくるのが) 遅いから食わん」と言って突っ返されたそうだ。班の子たちは、その後もう一度持っていけばいいのに持って行かず、「班長が来ないうちに食べておこう」と先に食事をとったらしい。するとこの軍曹が回ってきて、「貴様らはそういう魂胆^{こんたん}か。僕はこの部隊で一番偉いんだぞ。だから一番真っ先に飯は持ってくるべきだ」と、ものすごく怒られたそうだ。それからは、軍曹の食事をすぐに持っていった²⁷。

点呼は毎朝あり、時間は5時だったと思う。私がいた教室には2つの班が入っていたので、おそらく28人くらいが1つの教室にいたと思う。例えば私が当番だったら「第五内務班、総勢28名、現在28名、異常ありません」と報告した。すると下士官が「よし」と言って「番号」と号令をかける。1, 2, 3……28まで淀み^{よど}なくできないと「もとい」（もう一度）だった。点呼は廊下に並んで行われた。

班長に用事があるときに、「あの一、班長さんいらっしゃいますか」と言ったら怒られる。「ここには女性はいない。もう一度やり直せ」と言われた。「第五内務班、津波きく、班長殿に用事で参りました」と軍隊口調で言わないといけない。そのように言うと「よし、入れ」と言われて、自分が用事のある班長と話をする。帰るときも「第何班、誰々、帰ります」と言った。

看護教育隊では不寝番勤務^{ふしんぼん}もあった。不寝番は2時間で、2人1組でランプを持って建物を回った。みんなの寝ている場所や他の校舎、トイレを回るのだが、夜のトイレは気味が悪くて怖かった。週番下士官も毎日ではないが見回りをしていた。週番下士官に会うと、軍隊のようにお

²⁶ 中山さんによる班長（笠島由次郎衛生伍長）のエピソードは、前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』（73頁）に掲載されている。

²⁷ 同様のエピソードが前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』（68,69頁）に掲載されている。

辞儀をして名乗る。すると「不寝番の任務を言え」と言われる。これを答えられないと大変だった。

看護教育隊での生活はとても厳しかったが、大変だとは思わなかった。私にとってやらないといけないこと、やるべきことだと思っていた。やる気満々だったし、へこたれなかった。

他の女学校が受けていた看護教育は軍隊式ではなく、自分の学校の寄宿舎や近くの病院などで看護教育を受けていたようだ。

当時の情勢

看護教育は1945年（昭和20）3月6日から23日までの18日間だった。看護教育期間が1ヶ月の予定だったという人もいるが、そういう期限があったのかどうかはわからない。

日中戦争のときは華々しい戦果を伝えるニュースが流れていたが、1941年（昭和16）12月8日に始まった日米戦争（アジア・太平洋戦争）のニュースはまったく流れてこなかった。情勢が悪化してそれどころではなかったのかもしれないが、私としては、日本は強い国だからアメリカをやっつけていると思っていた。しかし、のちに記録を読むと自分の考えとは逆で、最初から歯が立たなかったのだとわかった。日本軍は（アメリカ軍に）東南アジアあたりから南洋群島、フィリピン、台湾と追い詰められていた。その証拠がアメリカ軍による対馬丸の撃沈で、沖縄のすぐそこまでアメリカ軍の潜水艦^{せんすいかん}が迫^{せま}ってきていた。日本側は戦況が良くなかったから、一般の人たちにニュースを聞かせなかったのだろう。今ならばアメリカの国力がわかるが、なぜ当時はわからなかったのか不思議だ。

しかし、当時の私たちはそこまで考える余裕もなく、とにかく看護婦さんになることだけを夢見ていた。

許可が下りなかった卒業式

二高女の先生は時々、東風平に回ってきていた。特に金城宏吉先生^{きんじょうこうきち}が私たちのことを一番身近で心配してくださっていた。あとから聞いた話だが、先生が「卒業式をさせてくれ」と軍に頼んだものの、許可が下りなかったようだ。しかし、看護教育が終わった翌日からアメリカ軍の攻撃が始まっているから、卒業式はできなかったと思う。私たちは学校を卒業するという意識もなかった。看護教育を受けて、看護婦さんになることしか考えていなかった。

東風平国民学校から山第一野戦病院壕へ

艦砲射撃が始まったのは3月23日だった。この日から、壕の中に入っていないと生きていけなくなった。

すぐに看護実習は打ち切られ、東風平国民学校の裏の方にあった軍の壕で一晩過ごした。翌日、薄暗くなってから、二高女は山第一野戦病院（八重瀬岳^{やえせだけ}）、積徳は山第二野戦病院（豊見城）へ歩いて移動した²⁸。

²⁸ 前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』（81頁）には、3月24日に第二十四師団第一野戦病院への正式入隊の手続きが取られたと記されている。

3月6日に国場駅から東風平国民学校に行くときには、^{きせい}氣勢を上げてありっただけの軍歌を歌ったが、3月24日に八重瀬岳に向かうときには誰も口を^き利かなかった。というのも、夜間の移動だったので艦砲弾が花火のように飛んで行くのが見えたからだ。これからどうなるのかという気持ちが強くて誰もが無口だった。この様子を戦後、「お葬式のようなだった」と表現するが、心配で心配で話をするどころではなかった。誰も話さないまま、山第一野戦病院に向かった。

しかし、到着したものの、その日は壕に入れなかった。なぜなら壕が出来上がっていなかったからだ。一応、病院の中を見学するという感じで壕の中に入ると、^{せきり}赤痢を患った内科患者がいた。赤痢は伝染病なので、今だったら^{かくり}隔離される（しかし、このときは隔離されていなかった）。私たちが到着して3日目くらいから負傷兵が運ばれてきたが、そのときまでは、壕の中に入って様子を見るくらいだった。

最初の一週間くらいは私たち学徒の寝る場所がなかったので、昼は壕の中に入り、夜は三角兵舎で寝ていた。直撃弾を受けなかったからよかった。八重瀬岳まで艦砲弾が飛んでくることはなかったが、艦砲射撃が始まったから危ないということで、壕の中に入っていた。

今、(病院壕の)入り口は全て塞がれていて、中に入れなくなっている。

10人が除隊

看護教育隊は命令によるものではなく、家の人から(女子学徒を)預かっている(という認識だった)。だから、家族から「(娘を)帰してくれ」と言われた人と、体調を崩してこれ以上勤務ができないという人は自宅に帰った。野戦病院に到着した後に、家から「帰してくれ」と言われて帰ったのは1, 2人くらいだと思う。その他の人たちは体調が悪くなって帰っていった。

戦後、このことに関して、先に帰った人は白梅学徒隊ではないという^{とら}捉え方をされることがある。別の学徒隊の記念誌には、白梅学徒は56人なのに、帰った10人を除いて46人と書いてあった。この10人は帰ったけれども、戦争はすでに始まっていたし、10人のうち5人は(家に帰る)途中で亡くなっている。私は「1日でも何日でも、病院(壕)まで来て勤務をしたら白梅学徒だ」と言っている。一番早く帰った人が八重瀬岳の病院壕にいたのは2日くらいだったと思う。八重瀬岳に到着して、だいたい一週間以内に10人が帰っている。また、本²⁹に10人「除隊」と書いたのは、(看護教育隊に入ったことを)「入隊」だと捉えているからだ。(除隊の)書類はなく、口頭のみだった³⁰。

私は、帰っていった人の1人が非常に印象に残っている。^{かかずさちこ}嘉数幸子という、小柄で生まれチヂラー^{グー}小(天然パーマのような縮れ毛)で、かわいい子だった。何度か振り返って泣きながら「(私たちと)別れるのが辛い」と言っていた。でもこの子は家に帰る途中で死んでしまった。亡くなった場所もわからない³¹。他の9人も帰った時期はバラバラで、一緒ではないと思う。家族が引き取

²⁹ 白梅同窓会編『白梅 沖縄県立第二高等女学校看護隊の記録』クリエイティブ21 2000

³⁰ 前掲『白梅 沖縄県立第二高等女学校看護隊の記録』によると、除隊者の人数は入隊翌日の3月25日に3人、3月27日に7人となっている(前掲『白梅 沖縄県立第二高等女学校看護隊の記録』89頁,90頁)。

³¹ 前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』(82頁,235頁)

りに来た人もいるかもしれないが、それもわからない。

手術場壕へ

(看護教育を受けた) 18日間では何もできないと思ったが、現場では本当に役に立った。私たち学徒がいなかったら、野戦病院は成り立たなかった。というのも、私たちがやったのは汚物を片付けることで、知識のいらぬ業務だったからだ。私は、傷ついた兵隊さんの傷を消毒し、薬を塗ってガーゼを当て、包帯で巻くというのが看護だと思っていた。しかし、これらは看護婦さんと衛生兵がやった。医療行為だから素人ができるわけがなかった。

病院壕に到着して一週間後くらいに、壕の第一坑口の一番端に私たち学徒用の場所ができた。だが、そこは荷物を置いておくだけの場所で、寝る暇はなかった。ほとんどの人が壁によりかかって、まどろむ程度だった。

負傷兵がどんどん増えて、2段ベッドに寝かされた。現代の救急体制のように、けがをしたらすぐに救助されるわけではなく何日間も放って置かれた。しかも山野だから、銀蠅がたかって傷はどんどん悪化していく。負傷兵は1人残らずウジに蝕まれていた。

私はすぐに手術場壕³²に配置換えになった。一番長く勤務したのが手術場壕だった。手術場壕は、戦前にセメントのようなものを取るために掘ったところを、さらに掘り進んで反対側からも出入りができるようにした、自然洞窟に似た人工壕だった。

手術場壕に運ばれてくる人たちの手術は、普通の手術ではなかった。傷がものすごく悪化して、傷の周りが髪の毛ぐらいに真っ黒になっていた。看護婦さんが「壊死している。ここは早く切り捨てないと毒が回って死んでしまう」と言っていた。ほとんどが手脚の切断をする手術だった。また、盲管銃創(体の中に弾が残っている状態)の切開手術もあった。そういうことをするのが手術場壕だった。

薬はほとんどなかった。せっきく手術して病院壕に収容しているのだから、本当は包帯の交換もしないといけないが、包帯もないから交換しなかった。また、傷が悪化して高熱を出すと脳症を発症した。脳症は、自分が何をしているかわからない状態になるので大変なことをする。自力で動けないのにベッドから降りようとして落ちたり、衣類を脱ぎ捨てたり、訳がわからないことを言ったりした。これは病院とは言えなかった。

他にも、「水がほしい」とか「包帯交換してくれ」とか、いろんなことを言われた。私たちは、お国のために戦った兵隊さんのためにこの場所に来ているという気持ちがあるから、「ハイ、ハイ」と言って対応する。すると1日中、座る暇もなかった。

1日2回の食事

食事は、軍の病院だったからか、最初のころは1日2回もらえていた。ピンポン玉よりは大きいくらいのおにぎりや、白い米ではなく、玄米と何かが混ざって入っていた。食事はこれだけだっ

³² この手術場壕は「上の壕」とも呼ばれた(前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』110,111頁)。

たが、重傷の兵隊さんたちも同じものだった。ある人が「軍隊の記念日のようなときにはお汁が出た」と言っていたが、ほとんどの人は覚えていない。おにぎり以外で付くとしたら、佃煮とか福神漬けくらいだった。

私たちは炊事を一切していない。炊事をしていたのは兵隊だと思うが、作っているところは見えない。炊事場のあたりに樽^{たる}が出されていて、それを取りに行くだけだった。炊事場周辺では学徒の出入りはなかった。近くに将校室もあったので、学徒は自由には歩けなかった。

私は手術場勤務なので、そこまで樽^{たる}を担いで持つて行くのが大変だった。灌木^{かんぼく}（背の低い木）が残っていて、木の間をぬって移動していたが、爆音が聞こえたら運んでいる途中でも樽^{たる}を置いてじっとしていた。

手術場壕での勤務

私が手術場壕で最初にした仕事は照明係だった。軍の病院の手術場なのに電灯はなかった。他のところはランプを使っていたが、手術のときにランプは危ないとのことで、2人でろうソクを2本ずつ持ち、計4本のろうソクの明かりで軍医さんが手術をした。ろうソクは紙みたいなもので包んで持っていたと思う。

指を切るだけでも痛いので、手や脚を切断するのに麻酔^{ますい}は絶対に必要だった。脚を切断するときには、体を直角に曲げて、背中の脊椎^{せきつい}のところに麻酔をした。手の切断をする人たちには、肩のあたりに麻酔をしていた。麻酔をしたのに、メスを入れた途端、1人残らず「やめてくれ、切らないでくれ」と叫んだ。麻酔の量が足りなかったのだと思う。ほとんどの物資が不足しているときだったし、手術に時間もかけなかった。戦後、私は家族の手術に立ち会ったことがあるが、医者が患者に数を数えさせて数えるのが止まったら麻酔が効いていると判断していた。しかし、手術場壕では麻酔をしたかと思ったら、時間をかけないですぐやる（メスを入れる）から、「やめてくれ、切らないでくれ」となる。この言葉は忘れられない。患者が叫んだ途端に、軍医が「貴様、それでも軍人か」と怒鳴る。軍医も痛いのはわかっているが、そんなことは言えなかったと思う。軍医さんは上官で偉いので、患者は言われた通り、叫び声はあげないが、口を結んで唸^{うな}って苦しんでいた。

私も最初のころは患者と一緒に泣いて、手術も見えていられなかった。本当は軍医さんの手元にろうソクの光を当てないといけないのに、怖くて顔をそむけていた。すると「明かりをしっかりと照らせ」と足を蹴^け飛ばされた。何回も蹴飛ばされ、兵隊さんの看護にきているのにこのザマは何だと、自分で反省した。ちゃんと軍医さんの手元を照らそうと何日もやっていると、怖くても顔をそらさないようになっていった。

手術中に気絶してしまう人はいいのだが、そうでない人たちは動いたりする。そんなときは「早く済みますよ、ちょっと我慢してください」と声をかけられるようになったし、手術中の様子も見るができるようになった。軍医は患部を切り捨てた後、血管をくびり、最後に皮膚^{ひふ}と皮膚を縫い合わせていた。そのときに、患者さんに「今は血管を結んでいますよ」と状況を伝えたり、「すぐ終わりますよ」と励^{はげ}ましたりすることができるようになった。

軽傷の人たちが入る場所と、切断または切開手術が必要な人たちが入る場所は別だった。切断や手術が必要な人は多いときには4, 5人運ばれてきたが、ほとんどは待たされている間にそこで亡くなってしまった³³。この人なら連れて行ってもいいと思われる人たちが(病院壕に)運ばれてきて、どの人を手術するかは軍医さんが選んでいた。最初のころは1日に5人も手術をしていた。昼は(病院壕に)収容していた人たちの世話をやって、夕方から翌朝まで毎日手術がされていた³⁴。私たち学徒は2人ずつ交代した。

切断した手足は、毎日砲弾穴に投げ捨てていた。場所は今の八重瀬公園の駐車場になっているところで、当時は畑だった。梅雨どきだったので、砲弾穴には水が溜まっていた。また、手術場壕に勤務していた5人の学徒のうち1人だけが戦争で亡くなったが、私以外で生き延びた3人の誰に聞いても、(手術場壕勤務のときに)死体の処理や埋葬をさせられた人はいなかった。

5月半ばごろからは、薬も包帯もなくなってしまった。患者が4, 5人運ばれてきても、1人ぐらいいしか手術をされなかった。これは軍医さんが決めていた。手術するかしないかは傷の良し悪しの程度を見て判断していたと思うが、どういう風に選んだのかはわからない。「(階級の)高い人から手術をやっていた」という人もいる。1回の手当も受けなくて亡くなった人もいた。

排泄の世話

手術場以外の係のときには、患者さん達のいろんな世話をした。患者さんたちからは、「傷が痛い」「いつ包帯交換するの」「おしっこ」「便」など言われた。おしっこと便の対応は、できないと思いつつもやった。看護婦さんがガーゼと尿器、または便器を持ってくるので、患者自身で用足しができたらいいが、重傷なのでできない。ガーゼも何もかも不足している時代だったが、(用足しの補助の際には)看護婦さんが「ガーゼを使いなさい」と言った。結局、(患者の局部を)つかんで尿器に入れてあげないといけなかった。便も、患者がしてしまったものの拭き取りもした。相手が重傷患者だからできたかもしれない。知識はいらず、片付けるのが私たちの仕事だった。包帯の交換などは全然できなかった。傷の手当てが看護の仕事だと思っていたが、今考えたら、これ(排泄の世話)も看護である。

解散命令

6月4日に「本部壕に集まりなさい」と言われた。そして、軍医さんたちから「君たちも知っている通り、薬も包帯もなくなった。病院の機能はなくなったから、この病院を閉める。君たちはよくやってくれた。君らは大勢で固まらないで、2, 3人ずつ南部の方へ逃げてくれ」と言われた。言い換えれば、これは解散命令だった。

³³ 前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』(122頁)には、手術場壕の入口には擬装小屋が設置されており、生存の見込みのない負傷者は、軍医の指示でそこに放置されたと記されている。

³⁴ 前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』(120～123頁)によると、日中はアメリカ軍の爆撃や艦砲射撃が激しかったため負傷者の搬入が難しく、砲撃が止む午後6～7時の時間帯に重傷者が運ばれてきて、夕方から夜中にかけて手術が行われた。手術のない日中は「患者の食事の世話、大・小便の始末、包帯交換の手伝いがあり、他に、タンポン綿作り、ガーゼたたみ、包帯巻きなどと休む間もなかった」という。

その言葉を聞いて、私たちは艦砲射撃が始まったからここ（八重瀬岳）に来たのに、南部も艦砲射撃を受けているじゃないかと思った。すると続けて、「実は2ヶ月前の4月1日に沖縄本島中部の西海岸にアメリカ軍が上陸して、首里まで来ている」と聞いて、そこで初めて敵が上陸していたことを知った。そのときまでは敵の上陸を知らなかったのでショックだった。（アメリカ軍が首里から）八重瀬岳までは3、4日では来るということが私たちでもわかった。

そのころの私たちは、薬も包帯も不足していたから日本軍が助けに来てくれると思っていた。これはほとんどの仲間たちがそう思っていた。でも来たのはアメリカ軍だった。当時はアメリカ軍の戦力はわからなかったが、沖縄本島に上陸したということであれば、戦争は負けかなという気持ちもあった。

それで私は、南部に逃げるしかないと思った。（言われた通り）2、3人で逃げるならと、千代ちゃんと一緒に壕を出た。傷病兵は残っていたが、その後どうなったかわからない。「処置³⁵」をしたのかどうか、私は見ていない。手術場はみんな重傷の患者だから、生き延びることはできなかったと思う。

南部を逃げまどう

南部は行ったことがなかったから、道を全く知らなかった。八重瀬岳を上がって見たら大勢の避難民が、小さい道ではあるものの道幅^{みちはば}いっぱいになって歩いていた。数百人ぐらいの人がいたと思うが、5、6列になって疲れたように歩いていた。それを見てホッとした。行き先は考えずに、彼らの後に付いて行った。

新垣十字路（現 糸満市新垣）に出るところで2回、砲弾が落ちた。たくさんの即死した人、大けがをして叫んでいる人がいたが、誰も構う人はいなかった。自分たちもいずれこうなるのだと思っていた。私も千代ちゃんも運良くやられなかった（けがをしなかった）。

新垣十字路からまっすぐ糸満方面に行けば、今の白梅の塔のところ（現 糸満市真栄里^{まへささと}）に着く。だけど私たちは左に曲がって、米須^{こめす}方面へ行った。

たくさんの避難民がいたので2人きりになったことはない。隠れているときは2人だけだが、移動するときは避難民の後に付いて行くだけで、目的地はなかった。どこが安全かもわからなかったからだ。戦後に3回くらい当時の足跡^{たど}を辿ったが、どの道を歩いたかはまったくわからなかった。でも方向はわかった。

（避難した場所の中でも）大度^{おおど}（現 糸満市大度）がとても印象に残っている。大度まで行って浜辺まで降りた。あのあたりにはアダンの木が広く植わっていて、海からは見えなかった。あのときには艦砲射撃もなく、爆弾も落とされなかった。なぜなら、あの一帯にアメリカ兵、日本兵、住民が混在していたからだ。もしアメリカ兵に見つかったら機関銃で撃たれていた。

³⁵ 山第一野戦病院の新城分院では、1945年6月3日に病院を閉鎖する際に、動けない負傷兵約500人に対し青酸カリを与え、青酸カリで死にきれない患者には注射もしくは銃で撃つという「処置」が行われた。新城分院で「処置」された負傷兵の人数は500人とも言われている。東風平分院でも、重症患者への青酸カリの注射が行われた（前掲『平和への道しるべ 白梅学徒看護隊の記録』129頁、138頁）。

その大度の浜で、ものすごく怖い死体を見た。おそらく日本兵だったと思うが、皮膚が真っ黒になって、パンパンに腫れあがっている死体をすぐ近くで2体見た。あれは怖かったし、あの場面はまったく忘れられない。

浜辺を通るのも危ないと思い、少し引き返して、陸地を通りながら摩文仁の方まで行った。それから、今の沖繩師範健児の塔（現 平和祈念公園内）あたりかと思うが、そこから海岸まで降りた。海岸に降りると疲れ果てて動けなくなった。そこに一週間くらいいたと思う。日付はわからないが、とにかく長い時間いた。

そのとき、「敵陣突破」(アメリカ軍の陣地を突破して国頭方面へ行くこと)という言葉が聞こえた。千代ちゃんと相談して、その声がしたところに行ったら、兵隊さんだけではなく大人の住民もいた。(彼らに合流したいと伝えると、「女・子どもはダメだ」と言われた。それで「私たちは山部隊の学徒看護婦でした」と言うと、軍属と解釈したのか、「そうか。固まって歩くと危ないから、一列縦隊で逃げるができるか」と聞かれた。私たちは「できます」と答え、15人くらいの集団の一番後ろに加わった。

昼は山の中に隠れ、暗くなってから移動した。見晴らしが良い場所ではなく林の中やサトウキビ畑の端の方を歩いたが、アメリカ軍は探知機でわかっているのか、暗いところをめがけて機関銃を撃ってきた。それで何人かやられた。

私たちは摩文仁の海岸から港川(現 八重瀬町)あたりまで来ていた。一緒にいた人たちの名前もわからず、日に日に人数が減っていた。(アメリカ軍に)やられたのかどうかわからないが、はぐれていっていた。私と千代ちゃんも後ろを付いていったが、陸に上がったあとにこの集団とはぐれてしまった。

戦後に考えたところ、おそらくガラビ(八重瀬町新城にあるガラビガマ)だろうと思うが、(立ち寄った壕の)中は避難民がいっぱいで入れなかった。岩山なので周囲よりも高くなっていて、そこ(ガラビガマの入口付近³⁶)にだけ爆弾が落とされた。弾の破片もあるが、岩のかけらや木の枝など、いろいろなものが降ってきて、そこにいた人たちが大けがをした。口をやられた人や、片手がブラブラした人もいて、たくさんの人がやられた。幸い、私と千代ちゃんはけがをしなかった。

そこから2人とも夢遊病のように、どこに行くともなく、ただ北へ北へとふらふら歩いた。ガラビガマの南側で(爆弾が落とされて)怖い目に遭ったので、それからはずっと北の方向へ歩いた。

次に怖い思いをしたのは、広っぱで四方八方から機関銃弾を浴びたときだ。場所は大里村の西原(現 南城市大里)だったか、どこだったかわからない。おそらくアメリカ軍が、このあたりを通る人をいっぺんにやっつけようとしていたのかもしれない。ここでもたくさんの人がやられた。しかし、運良く私も千代ちゃんも弾に当たらなかった。

ちなみに、私はここではなく、もっと南にいるときに軽いけがをしたが、自分の持っていた薬

³⁶ 若梅会による中山さんへの聞き取り

で手当てをした³⁷。

大里村の西原にたどり着く

その後、私たちはまた誰かの後ろにふらふらとついて行った。気がつくやうに、大里村の西原まで来ていた。私たちが小さいころ、そこをニシバルグラー西原小³⁸と呼んでいた。自分たちがそこまで来ていると思わなかった。西原はいなか田舎だから緑のトンネルのようになっていて、長い道に避難民がぎっしりと座っていたが、誰もが疲れ果てていて動かなかった。

すると、私たちの近くに知らない日本兵が2人ぐらいいて、「この村はほりよしゅうようじょ捕虜収容所になっている」と言った。「この村」と言われても、(収容所が開設されている様子が)見えなかった。千代ちゃんも私も同じ思いだったと思うが、日本人が捕虜になるの?と思った。当時は、「捕虜になるくらいなら舌を噛み切って死ぬ」と言われていたので全然信じられなかった。「日本兵もたくさん捕虜になっている」と言われ、私は我慢できなくなって「本当ですか?」と聞いたら、「本当だよ」と言われた。「(その村は)どこですか?」と聞いたら「佐敷という村だ」と言われた。「私はその出身です。まさか」と言うと、「君らは兵隊ではないから死ぬ必要はない。明日、自分の村へ降りていけ」と言われた。ちなみに、そのとき自分たちが西原にいることはこの兵隊さんたちから聞いて知った。

アメリカ兵に捕らえられる

翌日、兵隊さんに「今みたいに夜間行動をしたらかえってやられるから、昼に堂々と入っていきなさい」と言われた。捕虜がいっぱいいるから、そこにまぎ紛れ込みなさいという意味だと思う。そのようにしたら、すぐにアメリカ軍に捕まった。西原からみねづた峰伝いにおこく小谷(現 南城市佐敷)へ降りていき、今の(のちに嫁ぐことになった)中山家のもんちゅうばか門中墓の裏あたり³⁹で捕まった。

角々に銃を持ったアメリカ兵(アメリカ兵)がいた。だけど、ひどいことはされなかった。アメリカ兵たちはちゃんと教育されていたのだと思う。私が彼らに捕らえられたときの様子を(仲間たちに)話したら、「私たちも(同じ)よ」と言われた。アメリカ兵は銃をすぐに下ろして手招きした。私は殺されると思いつつも、逃げたら撃たれるし、どうしようもなかった。

私たちはすぐに大きなテントに連れて行かれた。そのテーブルには山ほどの食べ物が置いてあった。すぐにアメリカ兵が水を入れたコップとチョコレートを持ってきて、「飲みなさい、食べなさい」と渡された。私たちは怖くもあるし、敵のものを食べるものかと思って「いりません」と頭を振った。するとアメリカ兵は水を飲み、チョコレートを食べて見せた。それでも私たちは

³⁷ 前掲「白梅学徒看護隊から無事生還して」では、けがの状態について、「険しい崖をよじ登った時、私はひざ頭を岩にぶっつけてけがをした」、「私は傷めた傷が悪化して歩行困難になっていた」と語られている。

³⁸ 前掲「白梅学徒看護隊から無事生還して」では、「大里村大里(通称西原小・佐敷町の一望できる小高い所)」とある。

³⁹ 前掲「白梅学徒看護隊から無事生還して」では、米軍に捕らえられた場所について、「新里(現 南城市佐敷新里)の一步手前の真謝原(俗称アカバタキー)に近づいた時、米兵と遭遇し捕虜となった」と語られている。

出された食べ物に触らなかった⁴⁰。

その後、ジープに乗せられて、新里ビラ（坂）を登ったところにできていた軍政府のところに連れて行かれた。軍政府は大きなテントを張って設置されていた。アメリカ軍からの尋問^{じんもん}はとても簡単なもので、「どこから来たか」「そのあたりはどういう状態だったか」などと聞かれた。私は殺されてもいいと思って、「野戦病院の看護婦をしていた」と言った。すると、「軍医は何人いたか」「衛生兵は（何人か）」と聞かれた。私がいたところは軍医さん1人、看護婦さん3人、衛生兵3人だったので、それを答えた。他にもいろんなことを聞かれたが、全然わからない内容だった。私に尋問をしていたのはアメリカ兵の通訳で日本語ができる人だったが、その人からは全然答^とめられず、すぐに釈放^{しやくほう}された。尋問は30分もかからなかったと思う。

二世（日系二世のアメリカ兵）の人で名前を忘れられない人たちがいる。比嘉さんという人と大久保さんという人だった。大久保さんは「見よ東海の空あけて〜」（から歌い出す）と、「愛国行進曲」という軍歌を歌っていた。怖くもあるし嫌だなと思ったけど、「私たちはこの村の出身なんです」と言うと、比嘉さんが「そうか、じゃあ家族がいるかどうか探してみよう」と言って、親切に村に入っていった。私たちは、本当は捕虜収容所に連れて行かれる予定だったかもしれない。しかし、私と千代ちゃんは収容所に入ることはなく、その日のうちに家族に引き取られた。

新里での生活

今考えると奇遇^{きぐう}だと思うのだが、新里に行くとアメリカ軍の憲兵隊^{けんべいたい}⁴¹がいた。彼らは、炊事や洗濯ができる若い女の人がいる世帯を10軒ぐらい残し、他の人たちはみんなヤンバルの収容所に送っていた。残された10軒ぐらいの人々の中には新里以外の字の人たちも含まれていて、みんな川沿いで暮らしていた。その中に私の家族もいた。時期は6月の下旬か7月の頭あたりだと思う⁴²。

若い女性が私しかいない私の家族がなぜ新里に残ることができたかという、当時、私の父方のおじ（父の姉の夫）は山城といい、（新里の）区長をしていた⁴³。私の家族は、病弱の父と身重の母、高齢のおば2人だった。（おじは）そんな家族が（ヤンバルに行ったら）危ないと思ったのか、みんな山城家の家族であると偽った。それで私の家族も新里に残ることができた。もし私

⁴⁰ 中山家の門中墓や墓庭は広く、そこにアメリカ軍の物資が置かれていた。ここで語られている水やチョコレートのやり取りはこの墓庭で行われた。（若梅会による中山さんへの聞き取り）

⁴¹ MP（Military Police）のこと。アメリカ軍の警察組織で、日本軍の憲兵に相当する。軍隊内の秩序の維持や収容所の管理などを行ったが、必ずしも沖縄住民の味方であったわけではなかった。

⁴² 1945年7月9日付のアメリカ軍の資料“Resettlement: Chinen evacuation.” Watkins staff meeting notes 9 July（ワトキンス文書刊行委員会編『沖縄戦後初期占領資料 第82巻 — PAPERS OF JAMES T. WATKINS IV』緑林堂書店 1994 132頁）には、知念半島の収容所（佐敷村内の収容所を含む）からヤンバルへの民間人の立ち退きは7月12日に始まる見込みだと記されている。

⁴³ 『字誌新里』に掲載されている中山さんの証言には「山城太郎さん（東新屋敷）」や「勢理客十助さん（新仲勢理客）」たちの計らいで新里に居残ったとある（佐敷町字新里字誌・編集委員会編『字誌新里』佐敷町字新里区2000 689頁）。同書90頁の「歴代区長略歴表」によると山城太郎さんが区長に在任したのは1939年4月から1941年3月であり、「1945年6月から1946年6月までの間は戦争のため空白」とされている。

の家族がヤンバルに送られていたら、あそこでみんな亡くなっていたかもしれない。私はこのおじさんが亡くなるまで、ずっと感謝の気持ちでいっぱいだった。

当時は1軒の家に3, 4世帯が入って生活していた。千代ちゃんの家族も、字佐敷の人たちだけれど新里にいた。千代ちゃんのお父さんは村の議員だったのだが、それが理由で新里に残れたのかどうかはわからない。

一週間は家にいたが、衛生兵と比嘉さんたちが来て「診療所で働きなさい」と言われた。理由は野戦病院にいたからではないかと思う。診療所は新里に開設されていた。衛生兵はみんなアメリカ兵だった。診療所は、戦争で受けた傷の手当てではなく、戦争中の不潔や栄養失調、おできを治す場所だった。今はおできがある子はいないと思うが、当時は大人も子どももニーブッター（おでき）がいっぱいあった。

診療所での仕事はかさぶたを消毒して薬を塗るだけだったので、これなら私にもできると思った。アメリカの薬は素晴らしくて、薬を塗って2, 3日もしたらすぐに治った。あんなにいい薬があるんだと思ってびっくりした。

私が診療所に来るまでは、私より年上の大里村出身の女性2人が手伝っていたそうだ。衛生兵たちからは、「前のお姉さんたちよりあなたたちがいい」と言われた。前のお姉さんたちにはそういう（手当ての）経験がまったくなかったようだ。私はそこで3ヶ月くらい働いた。給料は現物給付で、お金はもらえなかったが、アメリカ製の毛布やアメリカ軍の敷布団をもらった。

今では住宅が建っているが、新里には小さなウマイー（馬場）があった。そこには金網が張られて大勢の日本兵が収容されていた。（私たちに佐敷に行くように勧めた）知らない兵隊さんが言った通りだった。この人たちは、後に屋嘉収容所⁴⁴に連れて行かれたのではないか。

アメリカ軍に対する気持ちの変化

アメリカ軍に対する気持ちは、捕虜になったときをきっかけにだいぶ変わった。誰に聞いてもそうだったが、アメリカ軍が沖縄の人たちを捕虜にするときの態度はとても親切だった。夜に（収容所まで）女性を漁りに来るアメリカ兵もいたが、捕虜にするときだけは（民間人を）虐待せず、食べ物をくれるなどしてみんな優しくかった。

診療所にはカーターさんとガンターさんという人、（もう1人を含めて）3人くらいの衛生兵がいたが、とてもいい兵隊さんたちだった。アメリカ（アメリカ軍）ってこんなにいい人ばかりいるね、と思った。それから、二世の大久保さんや比嘉さんとも、新里にいる間はいつも話をしていた。この人たちに対しての敵愾心は消えていた。ただ、なんでこういう国と戦争したのかな、と思った。

新里から百名へ移る

いつだったかはっきりと覚えていないが、新里に来て3ヶ月くらい経ったころ、憲兵隊が百名

⁴⁴ 現在の金武町屋嘉にアメリカ軍が設置し、日本兵を収容していた屋嘉捕虜収容所のこと。

(現 南城市玉城)に移ることになった。新里にいた民間人は憲兵隊の手伝いなどのために新里に残っていたので、同じように百名に移った。私も、自分の家族と山城家と一緒に移動した。百名では大きなテントの中にみんな一緒に住んでいたが、私たちだけは小さな掘っ立て小屋のようなところに住んだ。

新里で働いていた診療所がどこに移ってしまったのかわからないが、百名に行ってから診療所の仕事がなくなったため、家の中でミジクマー(水汲み)をした。ひめゆり学徒隊だった仲里^{なかざと}正子^{まさこ}さんと一緒に、仲村渠樋川^{なかんだかりヒージャー}⁴⁵から毎日、何十人分かの水をドラム缶に入れて運んだ。この水は百名に住んでいる人たちの生活用水だった。なぜかわからないがドラム缶風呂が流行って、みんなこれが楽しみだった。仲里正子さんとは、あの時代に何ヶ月か一緒に暮らした仲だから、今でもきょうだいのような付き合いがある。

志喜屋初等学校ができる

志喜屋^{しきや}(現 南城市知念)に小学校ができた(志喜屋初等学校)⁴⁶が、先生がいらない。男性の先生は戦地に行って戦死された方が多いし、女性の先生もそれぞれの出身地に帰っていたからだ。そのため、「女学校、中等学校を出た人はいませんか?」と、校長に任命された人が(先生になれる人を)あちこち探しまわっていた。

私のところにも誘いが来たが、最初は断った。私は女学生時代に全く勉強していなかったから、小学校の先生なんてとんでもないと思ったからだ。だから私は、「先生はできません」とお断りしたが、その後2回も誘いに来られた。

3回目に来た人は私の知り合いの校長先生で、佐久本嗣善先生^{さくもとしぜん}だった(ちなみに、これが縁だったのかわからないが、私が結婚したときにはこの先生が仲人^{なこうど}をしてくれた)。このとき、嗣善先生に「まずは学校を見に来てくれ」と言われた。見に行くぐらいならいいだろうと思い行ってみると、私と同じ女学生のような先生(私はもともと三つ編みにしていた髪の毛をシラミのせいで切っていたが、それと同じような髪型をしていた)が、木の下で15、16人の子どもと遊んでいた。校舎もない、教具もない、本もない、何もない。いるのは子どもだけだった。それが学校だった。

(この光景を見て)私は、これならできるとピンときた。当時は畑、山、道、すべてが工事現場のように掘り起こされている状態だった。戦争が終わり、村でも道でも、とにかくどこか手を付けないと復興できなかった。そのために大人たちが作業に参加していたが、子どもを家に残しておくのは心配だろう、だから子どもたちを預かる必要があると思った。何もなくても、かけ算九九はできる。これなら私にもできると思い、先生を引き受けることにした。

⁴⁵ 南城市玉城字仲村渠にある共同用水施設。大正年代に石造りの貯水槽、石畳道、赤瓦の共同風呂が整備された。1995年、国指定重要文化財。

⁴⁶ 『知念市誌』によると、志喜屋初等学校は1945年7月24日に授業開始。同年11月末時点の職員名簿には、中山さんのことだと思われる「津波きく子」という名前が確認できる(『知念市誌』は『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』[第二版 2021]に翻刻が収録されている)。

このころ、アメリカ軍から粉卵や粉ミルクの配給があって、それをお湯で溶かしたものがお昼ご飯だった。他に何も食べるものはなかったが、それでも子どもたちを預かって、「今日は2の段」、「明日は3の段」と、かけ算九九を教えた。子どもたちもこれを楽しみにしていた。また、「自分の名前の書き方を覚えよう」と、地べたに木の枝で字を書いたりもした。これが沖縄の学校の始まりだった。もちろん、これは正式な教育ではなかったと思う。あくまでも大人を働きやすくするために、子どもを預かっていたのだと思っている。

私自身、戦争が終わってからは、(先生を引き受けるまで)家で何もせず水汲みばかりしていた。戦争に負けた悔しさもあり、毎日ふさぎ込んでいた。これからどうなっていくのか、将来のことも心配ばかりしていたが、先生として3ヶ月くらい子どもと遊んで、とても楽しかった。

文教学校へ

その後、文教学校ができた⁴⁷。文教学校の一期生は師範学校の生徒のみで、学校を卒業していなかった人が入学した。二期生からは、残りの師範学校の生徒と各女学校からの生徒も入学することができた。

私は二期生として文教学校に入学した。志喜屋初等学校で子どもたちと遊んだ経験から、先生になろうと思った。あの経験がなかったら先生になっていなかったと思うので、やってよかったと思っている。

(文教学校の入学)試験場は百名で、筆記試験だった。なんとか私も合格することができた。文教学校は具志川(現 うるま市)にあったがバスがなかったため、向こう(具志川方向)に行く人の車に手を上げて乗せてもらう拾い乗りで通った。あのころは(知らない人の車に乗ることは)全然怖くなかったが、1人だと怖かった。そのため、同じ二期生でひめゆり⁴⁸出身のウエザト(ウエサト)トシコさん⁴⁹と、あと1人の子と3人くらいで一緒に行動していた。

私が通っていたころの文教学校の修学期間はたった4ヶ月だった。文教学校を修了してからは新里に戻った。このころには自分の村に帰ることができていた。

その後、首里城跡に琉球大学ができた。文教学校では正式な教師の資格が取れなかったので、琉大の「単位坂」をせっせと登って教員資格を取った⁵⁰。琉大には当時、文部省から毎年夏に指導教官が来て指導していた。

⁴⁷ 沖縄文教学校。1946年1月10日、沖縄本島中部の前原地区(旧・美里、具志川、勝連、与那城の各村を指す。現 うるま市)田場に教員養成機関として開校。1950年5月の琉球大学開校にともない吸収された(川平成雄、松田賀孝、新木順子『戦後沖縄生活史事典 1945-1972』吉川弘文館 2022 93～97頁参考)。

⁴⁸ 沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の2校の愛称

⁴⁹ 『沖縄文教学校関係資料[複製本]』(沖縄県立図書館所蔵 2012)の「第二期 卒業生 百九名」の名簿中に「上里俊子」という名前がある。この名簿中には「津波きく」の名前も確認できる。また、文教学校卒業時の中山さんへの寄せ書き(若梅会所蔵)の中に「TOSHIKO UESATO」というサインがある。

⁵⁰ 文教学校で取得した資格は補助教員のようなものだったため、琉球大学に通い正式な教員資格を取得したという(若梅会による中山さんへの聞き取り)。

伝えるために生かされている

その後、私は49歳のときに教員を辞めた。私の夫は師範学校の卒業生で教員をしていたが、なぜかわからないが県庁に入り、その後、入国管理局の国家公務員になった。当時の入国管理事務所長は、みんな東京から来た人だった。夫は年配だったからか次長をしていたが、沖縄の人は次長から上にはいけなかった。

沖縄が本土復帰した2年目に、夫に転勤命令が来た。夫は元々「沖縄も本土復帰したんだから、他の県みたいに転勤があるはずだ。僕は行くよ。自分のポスト（次長）は後輩に譲る」と言っていた。そのころ（夫が）体調を崩していたこともあり、私は49歳で教員を辞めて夫について行った。

最初の転勤先は奇しくも広島で、その次は長崎だった。どちらの県でも、原爆の被災者の人たちが原爆の恐ろしさを語り伝えていた。私は教員だったころ、自分が学徒隊であったことをまったく話してこなかった。（広島・長崎での体験から、）私たちも白梅学徒隊の記録を書くことにした。白梅は記録を書くのが一番遅かった。白梅学徒隊だったみんなも「思い出したくない」と言っていて初めは断っていたが、私は熱心にくどいた。その後、「私が原稿を書くから、みんなで間違いがないか（確認する形にしよう）」と呼びかけ、それに応じた7、8人くらいで編集委員会を置いた。私は毎晩、夜中までワープロを叩いて原稿を作った。その原稿をみんなで校正して、沖縄戦から戦後50年目にやっと本を出した。みんなで確認したという強みがあった。また、広島・長崎のように沖縄戦のことを伝えていかないと、若い人たちが「お国のため」と言われて戦争に応じるのではないか、絶対に若い人たちに私たちと同じような道を歩ませてはならないと思い、語り部の活動も始めた。

最近、マスコミで活動の様子が報じられるので、それを見た教え子たちから「(これまで) 学徒隊の話をして全然しなかったよね」と言われたが、50年間話すことができなかった。私は自分や白梅学徒隊の体験を伝えるために生かされていると思っている。



中山きくさん
(南城市による聞き取り調査時の様子。2017年)

(2017年 事務局による聞き取り 構成：山内優希、若梅会)

〈玉城村・知念村へ避難〉

沖縄戦前の佐敷の海

私の家族は父方の祖母、母、私（8歳）、弟（6歳くらい）、妹（4歳くらい）、弟（2歳くらい）の合計6人だった。父は同じ部落の人（親戚ではない）と南洋に出稼ぎに行っていて不在だった。

戦前、富祖崎（現南城市佐敷）に親戚がいて、干潮のときには兼久から富祖崎まで歩いて渡って行くことができた。当時は、現在の佐敷中学校裏手の海岸にある築島¹もなく、きれいな砂辺があった。

また、私が8歳ぐらゐのときだったと思うが、馬天港^{ぼてん}の海の方に日本軍の飛行機が降りたのを見た²。馬天には、終戦直後まで「カイゲンショウ（海軍省）」と呼ばれていた大きな建物があった³。

当時の遊び

私は佐敷国民学校（現在の佐敷小学校の前身）に通っていた。学年は2年生だったと思う。当時は鬼ごっこや陣取り、セミなどの虫取りのほか、亀の甲羅^{こうら}を足の甲に置いて甲羅が落ちないように進むといった遊びをしていた。また、集落のアジマー（十字路）で、私より年上の男の子たちが大きな石を持って力比べをしていた。

他にも、人の屋敷の裏にあったシークワサー^{シークワサー}がなっている木に登り、勝手に取って食べたりした。大人はシークワサーを盗んでいることに気づいていたと思うが、子どものすることだからと見逃してくれていたのだと思う。

佐敷国民学校にいた暁部隊

[1944年（昭和19）3月に第三十二軍が創設されたのち、同年夏ごろから日本軍の部隊が続々と沖縄入りし、沖縄県内各地で日本軍の駐屯が始まった。]

¹ 佐敷中学校の裏手にある人工の島。沖縄戦の折、アメリカ軍が兼久の海岸の干潟部分に南北の水路を構築した際、その底質の砂泥を水路の東側に集めた。以後、体積が進み、島になったとされる（『佐敷町史 3 自然』258頁参考）。

² 1929年（昭和4）の大村航空隊（海軍）の調査で、兼久の沖は干潮時に飛行機の不時着陸場として使用し得るとされた。（『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』〔第2版〕南城市教育委員会2021 513頁）

³ 1895年（明治28）、海軍の軍艦への水や物資の補給基地として中城湾需品支庫が津波古に建設された。艦船への石炭供給は9年ほどで終わったと考えられているが、その後も津波古と新里にあった約5,500坪の用地は海軍が所有し続けた。1933年（昭和8）の資料によると、用地内の329坪は「貯炭」に使用されたが、残りは畑地として民間に貸し付けられていた（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』第1章第1節「中城湾需品支庫」）。佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 4 戦争』（佐敷町役場 1999）469頁掲載の戦前の津波古の地図（図3-③ 字津波古被災地図）には、「海軍省」の敷地（中城湾需品支庫の敷地）に水タンク、燃料タンク、貯炭所が記されている。

佐敷国民学校には、^{あつふたい}暁部隊と呼ばれていた部隊が駐屯した。彼らは隊を組んで掛け声をかけ、学校から海岸の方に走って行き、そこで機関銃か何かの演習をしていたようだ。しかし、私は当時子どもだったので、詳しいことはよく知らない。

部隊が学校を使うようになったため、私たち生徒は一時的に新里のムラヤー（現在の公民館）に移動した。しかし、そこでは勉強ではなく、女性の先生に連れられて新里の丘の上に避難する訓練を毎日させられた。避難訓練の時間は11時くらいで、お昼時間の前だったと思う。お弁当はイモだった。

母が陣地構築中に弟を子守

これも私が8歳ぐらいのころで夏だったと思うが、馬天のあたりで行われていた、ため池か壕を造る工事⁴に母がかり出されていた。母が工事に行く日は、学校が休みのときだったので日曜日だったと思う。毎日ではなかった。私は工事の現場を見ていないので、詳しい場所や、何を造っていたのかは知らない。だが、行き帰りは歩いて移動していたので、そう遠くない場所だったのではないかと思う。

母が工事に行っている間、祖母が自宅で上の弟と妹をみていた。私は工事現場の近くにあった茅葺きの^{かやぶ}掘^ほっ立^たて^{こや}小屋で下の弟の子守をしていた。子どもの泣く声がしたので、私と同じように、きょうだいの子守をしながら親を待っている人が他にいたのかもしれないが、その姿は見えていない。母を待っている間は弟と2人きりで、芋を食べたり水を飲んだりしていた。この芋や水は母が準備して持ってきたと思う。水は^{きゅうす}急須から飲んだ覚えがある。工事は朝から16時から17時くらいまで作業していたと思う。

この工事には、女性たちや中学生たちが強制的に動員されていた。兼久だけでなく、ほかの^{あざ}字の人々も動員されていたと思う。

疎開のことは知らなかった

疎開^{そかい}は、お金持ちや優秀な子どもに関係する話だったと思う。学校で疎開に関係する呼びかけはなかったし、知らなかった⁵。疎開のことも、^{つしままる}対馬丸⁶の話も戦後に知った。

⁴ 前掲『佐敷町史 4 戦争』225頁に、津波古で軍のため池工事に参加したという女性の体験記録が掲載されている。

⁵ 疎開の対象は国民学校初等科3年から6年までの男子で疎開を希望者する者を原則とし、初等科1・2年生でも付添が必要ないと認められれば参加を許可された。しかし実際には、女子生徒や高等科の生徒たち、初等科3年生以上の兄や姉が疎開に参加している初等科1・2年生も多く参加した。なお、話者が通学していた佐敷国民学校では、学童と関係者を合わせて375人が宮崎県に学童疎開をしている（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』155～157頁 参考）。

⁶ 1944年（昭和19）8月23日、那覇港から長崎へ航海中にアメリカ潜水艦の攻撃を受け撃沈した貨物船。県外へ疎開するために乗船していた784人の学童を含む1,484人（氏名判別者数）が犠牲となった（公益財団法人対馬丸記念会 ホームページ「対馬丸事件について」参考 <https://www.tsushimamaru.or.jp/tsushimamaru.php>）。なお、南城市出身の遭難者は12人いることが確認された（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』201頁 参考）。

十・十空襲は大変だった

十・十空襲じゅうじゅうくうしゅうの日は親戚の墓に避難して助かったが、自宅や集落の家が燃えた。集落の大人たちが火消しをしていた。夕方になると海に向かって弾が一発飛んだ。すると、海から何百発と弾が飛んできた。その様子はまるで花火のようであった。

あまり語りたくないことだが、この空襲で同じ集落の人が、トイレ（フール）で流れ弾に当たって亡くなった。

家族、親戚と一緒に避難

私の父は、沖縄戦が始まる前に沖縄に帰ってきていた。しかし、すぐに防衛隊ぼうえいたいとして召集しょうしゅうされて南部に行った。

沖縄戦が始まると、私たちは家族6人と親戚家族6人の合計12人で避難した。祖母と母は4人の子どもを抱えて大変だったと思う。

私たちは初め、自宅から終戦直後に刑務所があった場所⁷の上の方にある親戚の墓に避難した。中城湾にはアメリカ軍の船がたくさん来ていた。その光景が珍しく、いとこと見ていたが、祖母に「危ないから墓に入りなさい」と怒られた。昼も夜も艦砲射撃かんぽうしゃげきが激しかった。夜には、海の方から艦砲の弾が花火のように打ち上げられる様子が見えた。

アメリカ軍の攻撃が激しくなってきたので、そこから親慶原おやけばる（現 南城市玉城）にあるアマチジョーガマ⁸に移動した。移動のときは、近道を知っている親戚の人についていった。ちなみに最初に避難した親戚の墓は私たちが移動した後、弾が当たったのか無くなってしまった。

到着したアマチジョーガマは避難している人が奥の方までいっぱいいて、私たちは入口近くにいた。そこで2、3日過ごしたが、ガマの中はジメジメしていて、水があちこちに溜まっていた。子どもたちが過ごすには大変な場所だったと思う。

生きることに必死だった避難中の生活

祖母や母は頭に荷物（食べ物だと思ふ）を持ち、私は雨避け用のゴザを持っていた。食事は母が乾パンかんぱんのような、お菓子のようなものを持っていたので、それを食べた。家から持ってきたのか、人からもらったものなのかはわからない。水は田んぼの水を飲んだ。

避難中、みんなは壕に入っていたが、子連れは壕に入れてもらえなかった。子どもたちが壕で泣いてしまうためだ。雨の日はゴザをかぶって、岩の下かススキの中で過ごした。ずっと緊張しているから雨が降っても寒いと感じなかった。

⁷ 1946年5月に佐敷村に設置された沖縄中央刑務所。佐敷村出身者が戦後帰村すると「佐敷国民学校の西側のターブッカー（田んぼ）は、埋め立てられて刑務所になっていました」（前掲『佐敷町史 4 戦争』296頁）という。刑務所の場所は書籍によって兼久もしくは新里の桃原屋取の、いずれかの地名で説明されているが、兼久と桃原屋取は隣接する集落であり、上記の証言が表す場所は両集落の中間付近であったと推察される。同刑務所は1950年8月に沖縄刑務所に改称し那覇市楚辺に移転した。

⁸ 村民が避難していた自然洞穴で、日本軍も占領していた。壕口はアメリカ軍によって爆破された。現在もガマ入口の見学が可能（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』581頁 参考）。

死んだ人を見ても、かわいそうだと思う感情が湧かなかった。母の必死な姿を見て、自分たちがどう生きのびていくか、ただそれしか考えることができなかつたと思う。

祖母が「自分の墓で死にたい」と言って自決を拒否

私たちは、アマチジョーガマから知念の方に移動した。このときに、親戚の1家族と別れた。移動は全て夜で、ススキの中を這いながら進んだ。移動先の場所のはっきりしないが、山里（現南城市知念）の上あたりだと思う⁹。そこで別の親戚1家族と合流し、私たち家族を含む2家族が集まった。

おじさん（祖父の弟）¹⁰が手りゅう弾^{しゅうだん}を使って自決しようとしたが、祖母が「どうせ死ぬなら自分の墓のところで死にたい」と言ったため、私たち6人は親戚と別れた。本当は語りたくないことだが、残った親戚家族の4人は知念で亡くなった。自決で亡くなったのか、原因はわからない。

私たちはそこから、手登根、伊原（どちらも現南城市佐敷）を経由して海岸伝いに兼久へ向かった。山手側は大変だからと海沿いに行ったら、アメリカ兵に見られたのか機銃掃射された。また、照明弾が上がると、そこが田んぼであってもみんなでぱっと伏せた。照明弾のあとは海の方から機銃の激しい攻撃があった。下の弟は母におんぶされていたが泣かなかった。移動は夜間にだけ行っていたので、兼久に着くまで3日くらいかかった。

そうやってようやく自分たちの墓に着いた。この墓は門中墓ではなく、家ごとに建てた個人墓だった。ただ、墓の蓋^{ふた}を開けることができなかつたので、そこからセーラモー（兼久にある山）に移動した。戦闘が終わったのも知らず、そこで一週間か10日ぐらい過ごしていた。

出会った兼久の人から終戦を知らされ、下山する

食料を探しに母が下山すると、そこで同じ兼久部落の人と会ったそうだ。その人から「戦は終わっているのに何をしているか」と言われ、そこで戦争が終わったことを知った。母が会った部落の人は山手の方に残っていた民家にて、3家族くらいが一緒に過ごしていた。この時期の日付は覚えていないが、梅雨は明けていた。

終戦を知った私たちは家族全員で下山した。下山途中に見えた兼久は何も残っておらず、敷きならされていた。そのため、祖母の出身地である伊原に移動した。伊原にあった祖母の実家（渡慶次家）は焼けずに残っていて、ヤンバルに行かされるまで過ごした。わりと長く過ごしていたと思う。

伊原に行くと、衛生班なのかDDTをまかれた。まいた人は日本人だったから日本兵だと思う。また、アメリカ軍が兼久の海を浚渫^{しゅんせつ}しているのを見た¹¹。収容所に入った記憶はなく、アメリカ兵

⁹ 永山さんによると「戦後に5歳上のいとこと場所を確認に行った。しかし当時は移動が夜間だったのでわからず、だいたいこの辺りだろうということになった」とのこと（2025年事務局聞き取り）。

¹⁰ 永山さんによると「おじは防衛隊だったかもしれない。だから手りゅう弾を持っていたのだろう。部隊から逃げてきたのか、解散になって家族の元に戻って来たのかはわからない」とのこと（2025年事務局聞き取り）。

¹¹ アメリカ軍は船の接岸や航路を確保するため馬天湾を浚渫した。兼久の浜には、浚渫による土砂堆積によって出来た人工島「築島」が現存する。

にも会わなかった¹²。

汀間の収容所に移動

ある日、母や親戚に「行くよ」と言われ、アメリカ軍の船に乗せられた。このとき、呼びに来た人がいたのかどうかはわからない。行き先は誰もわからなかったが、怖くはなかった。

下船した場所はクシグワー（久志小、現在の名護市）だった。そこで「あなたたちはティーマ（^{ていま}汀間、現在の名護市）だよ」と言われて、そこから歩いてティーマの部落に行った。歩いて歩いても着かなくて、2, 3日かかった。

弟と食べ物を探し回る

到着したティーマでは、祖母、いとこ、親戚の男性たち（覚えているのはシブンという人。当時20～30代くらい）が掘っ立て小屋を造ってくれた。食べ物の配給はあったが足りず、上の弟を連れて食べ物を探しまわった。山の方に行き、^{かいこ}蚕の葉っぱ（クワ）を取って、野菜代わりに食べた。

ティーマの浜はきれいで、小さな貝殻がたくさんあり、それを拾って食べた。魚は捕らなかったがワカメを取ったりもした。口に入るものは何でも取って食べたが、腹いっぱいになることはなかった。

楽しみだった粉ミルクの配給

ティーマには学校のようなものがあつた。小屋などはなく青空の下で、子どもたちを集めていた。黒板も何もなく、女性の先生が竹などで地面に1, 2, 3と字を書いていた。勉強が終わった後に粉ミルクの配給があり、それが楽しみで毎日行つた。粉ミルクは甘くはないが腹いっぱい飲めた。この粉ミルクはアメリカ軍からの配給だと思う。

学校の後にティーマの運動場跡のような広場でラッチョウ（島らっきょう）を取って、漬け物にして食べたりもした。

マラリアに罹る

マラリアには家族全員が^{かか}罹つたが、下の弟も罹つたかどうかはわからない。上の弟は2, 3回罹つたが、私はそれ以上だった。兼久に帰つても症状が出た。

マラリアの症状は、あくびから始まって、すぐ寒くなった。遊んでいても症状が出たら^{いちもくさん}一目散に家に帰つた。何をかぶつても、自分の弟が上に乗つても寒気で震えが止まらなかつた。

マラリアの薬は配給で手に入れたと思う。色は黄色で飲むと苦かつたし、目が黄色くなつた¹³。飲むのが嫌で飲んだふりをして捨てていたので、なかなか治らなかつたのだと思う。私の家族は

¹² 『南城市の沖縄戦 資料編』によると、6月中旬には伊原に収容所が開設されている。（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』640頁,652頁 参考）

¹³ マラリアの特効薬といわれる「キニーネ」のことか。

誰も亡くならなかったが、1日2、3人ぐらいはマラリアや栄養失調で亡くなったと思う。

汀間から伊原に帰る

ある日、母に「着替えなさい。準備しておきなさい」と言われ、家族全員でアメリカ軍のカーゴトラックに乗った。トラックには、板馬^{いたんま}（現 南城市知念知名）や伊原の人もいて、あふれるほど人が乗っていた。トラックでの移動中に東喜^{とうき}¹⁴を通ったが、崖っぶちを走っていたので怖かった。あちこちの部落の人を降ろしながら移動したので、何日もかかった。

最初に降りたのは字知念だと思う。そこに何日かいて、玉城村字中山（現 南城市玉城）に移動し、1、2ヵ月ほど暮らした。その後、伊原に移動した。祖母の実家が残っていたので、そこで生活した。帰ってきた時期は終戦の翌年だったと思う。寒さは特になかった。

食料は配給もあったが、親戚の男性（シブンという名前）が食事を考えてくれていた。そのため、ヤンバルにいたときより食事の心配はなかった。

兼久で初めてアメリカ兵を見る

字佐敷に住んでいた、いとことたまに兼久に戻り一緒に遊んだ。兼久の海岸にはテント小屋があり、そこにアメリカ兵やクロンボー（黒人のアメリカ兵）が住んでいた。寝台に寝そべっていて、トートーメー（沖縄の位牌）が珍しかったのか飾り^{かざ}として置いていた。私はこのときに初めてアメリカ兵を見たが、特に怖いとは感じなかった。

また、兼久の海には大きな港が造られていた。

伊原から兼久に戻る

伊原に住んで1年後に兼久に戻った。兼久は終戦後、アメリカ軍のブルドーザーで敷きならされて、まっすぐな道ができていた。そこに兼久の部落民総出で碁盤型^{ごばんがた}に茅葺き小屋を建てていた。また、親戚が集まり、それぞれの土地を思い出して小屋を造っていた。私の家は戦前にあった井戸と、門のところにあった大きなデイゴの木が残っていたので、それを目印に家を建ててもらった。井戸は土砂で埋まっていたが中の詰まりを取って使えるようにした。この井戸は今も使っている。

伊原にいたときは学校に通っていなかったが、兼久に戻ってからは学校に通った。

終戦後、父の戦死を知る

終戦後、親戚のおじ（父の姉の夫）が、私の父の安否をあちこち聞いてまわって、父の戦死を

¹⁴二見区はスギンダ（シジンダ）とスックの2小集落からなる区であった。両地域は民間人収容所として、スギンダ（シジンダ）は東喜市、スックは二見市となった。「東喜」の由来には諸説あるが、定かではない。現在は、二見集落内を流れる杉田川に掛けられた「東喜橋」が当時の名残を残しているのみである（名護市史編さん委員会、名護市史『戦争』専門部会編『名護市史本編・3 名護・やんばるの沖縄戦』名護市役所 2016 443頁、498頁参考）。



1946年2月22日、アメリカ軍撮影による馬天湾の写真。津波古や兼久の集落があった場所
 一帯や道路がアメリカ軍によって敷きならされ地表が白く目立っている。多くのアメリカ軍施
 設や、兼久の浜には浚渫された土砂が堆積してできた「築島」がみえる。¹⁵

知った。父は^{おおざと}大里の^{おおしろ}大城（現 南城市大里）の山で亡くなっただけ。一緒にいた人が埋めてく
 れたのか、目印になるものを持っていたのか、遺骨は回収されお墓に入れることができた。

祖母に言われた「イキガヤ イジリヤンドー（男は度胸）」

佐敷中学校卒業後、職場見学で行った与那原の木工所に就職し、3年ぐらい働いた。工場の中
 の3畳間で住み込みをしながら、工場の機械の使い方や大工道具の手入れの仕方などを学んだ。
 同じ工場に裕福な家庭の同級生がいて、この同級生には負けないという気持ちで働いた。

その後、馬天のバックナービル（アメリカ軍高官の住宅地）¹⁶で庭師、親慶原のCSG（アメ

¹⁵ 沖縄県公文書館所蔵。資料コード「KS00000013 16548 IRS M45 8AF VV A005」を事務局が加工。

¹⁶ アメリカ軍は終戦直後から津波古から新里、小谷の丘陵地に倉庫やモータープール、兵舎、家族住宅を建設し、
 一帯を「バックナービル」と名付けた。バックナーは、南部で戦死したアメリカ陸軍第10軍の総司令官の名前。
 1951年（昭和26）に開放された（津波古字誌編集委員会『津波古字誌』字津波古自治会 2012 153頁、前掲『南
 城市の沖縄戦 資料編』525頁 参考）。

リカ軍の知念補給基地)¹⁷でエンジニア、サトウキビ畑でキビづくりなどをして20年以上働いた。

祖母には、よく「イキガヤ イジリヤンドー（男は度胸）。引っ込み思案にならないで何でもやれ」と言われた。その言葉で頑張れたが、自分が苦勞したことはあまり話したくないし、子どもたちに話していない。

弟や自分の子どもたちには「部落のことは可能な範囲でいいから協力しなさい」と言っている。私も部落の役員や、スポーツを頑張ったと思う。

今言いたいことは、戦争は悪であり、絶対にやってはいけないということだ。

（2015年 井口学による聞き取り 2025年 事務局による聞き取り）
構成：山内優希、事務局

¹⁷ Composite Service Group= 混成サービスグループ / 知念混成サービス補給部隊基地のこと。もとは玉城一区と仲村渠二区の集落があった地域を米軍が接収し、基地を建設した。1946年（昭和21）から米軍政府（MG）が入り、1949年（昭和24）から1972年（昭和47）まではCSG基地となっていた。1974年（昭和49）に土地は返還されたが、琉球ゴルフ倶楽部となって現在に至っている（玉城村史編集委員会編『玉城村 第6巻 戦時記録編』玉城村役場 2004 295頁、407頁、前掲『南城市の沖縄戦 資料編』562頁 参考）。

家族で宮崎県に疎開

私は手登根出身である。父の宮城源太郎は、沖縄に母と子どもたちを残して満州¹に行っていたが、沖縄戦が始まる前に沖縄に帰ってきていた。父は家族を連れて再び満州に行く予定だったそうだが、戦争が始まったため、それは叶わなかった。

私が佐敷国民学校(現 佐敷小学校の前身)の初等科5年生だった1944年(昭和19)、私は家族と一緒に宮崎県の鞍岡(現 西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡)という田舎に疎開した。初めは、私と妹の2人で学童疎開²に行くよう親から言われたが、私が「絶対に行かない」と反対したため、家族で行くことになった。家族でとは言っても、疎開したのは母と兄(長男)、私、妹2人だけで、祖母と父、弟(次男)は沖縄に残った。弟を沖縄に残したのは、どこで戦争の犠牲になるかわからないから、疎開先と沖縄に男を1人ずつ分ける、と父が考えたためであった。位牌や家の貴重品などは、祖母と父が沖縄に残るため、疎開先に持っていくことはなかった。

当時、父は集落の警防団長をしていたが、そういった役員の家族は早い時期から疎開に行くように、役場から勧められていたように思う。そのため、私たちは早い時期に疎開先へ出発した。出発は1944年(昭和19)8月ごろだったように思う。十・十空襲があったことは疎開先で聞いた。

疎開先での生活

疎開先の鞍岡へは、まず一週間ほど船に乗って鹿児島へ移動した。鹿児島で一週間ほど滞在したのち、鞍岡に向かった。トラックに乗って、荷物も一緒に何時間かかけて行った。当時、1番下の妹が3歳ぐらいだったが、この子が移動の疲れのせいか痩せてしまい、現地の人たちからも「この子は大丈夫か」と心配されていた。しかし、鞍岡に着いてからは元気を取り戻した。

鞍岡では、兄が農家の手伝いに行っていた。私も学校には行かず、農家で子守りをした。そこで食べ物ももらっていたため、食べていくことへの心配はなかった³。

鞍岡には佐敷から疎開している人が多かった。一度、夜中に疎開先の人たちだけで集まって、みんなで鞍岡のどこかの神社までお宮参りに行ったことがある。私はついて行っただけなので、

¹ 満州国のこと。1931年(昭和6)の満州事変で関東軍(日本陸軍の満州駐留部隊)が主要都市を制圧し1932年(昭和7)3月に建国したもので、現在の中国東北地方に位置する。日本の敗戦とともに消滅した。

² 疎開の対象は国民学校初等科3年から6年までの男子で疎開を希望する者を原則とし、初等科1・2年生でも付添が必要ないと認められれば参加を許可された。しかし実際には、女子生徒や高等科の生徒たち、初等科3年生以上の兄や姉が疎開に参加している初等科1・2年生も多く参加した。なお、話者が通学していた佐敷国民学校では、学童と関係者を合わせて375人が宮崎県に学童疎開をしている(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』155～157頁 参考)。

³ 平田さんのお話によると「いとこが学童疎開の世話人だったので、宮水国民学校に何度か遊びに行ったことがある。その際、いとこにだけ食糧を渡した」とのこと(2025年事務局聞き取り)。

なぜ神社に行ったのか詳しいことは覚えていない。ただ、佐敷からの疎開者はほとんどみんないたので、おそらく、沖縄が玉砕したと聞いたことがきっかけで行ったのかもしれない。

沖縄に帰る

戦争が終わった後、ある時期から沖縄に帰る前まで、沖縄からの疎開者たちは川南（現 宮崎県川南町）にあった兵舎のような建物に収容されていた。その建物の中は疎開で宮崎に来ていた沖縄の人たちが大勢集まっていた。学童疎開の人たちはいなかったと思う。そこでは年が近い子もいて一緒に遊んだりした。食事は親が作ったご飯を食べた。そのため、お腹がすいていたという覚えはないが、親がどこで食事の準備をしていたのかわからない。その後、沖縄に帰る船に乗り、中城村の久場崎に上陸した⁴。

久場崎からは、現在の佐敷小学校の上の方にあった役場まで、アメリカ軍のトラックに乗って行った。移動中、新里の方で戦車が並び、その辺りも焼け野原のようになっていた。景色が様変わりしていたので自分がどこに来ているのかわからなかった。

役場で家族の安否確認をすると、祖母も父も弟も全員無事で元気で、手登根に簡易な家を造って暮らしていると聞いた。3人は、沖縄戦のときにはヤンバル（沖縄本島北部）にいて、食料に不自由したと話していた。

手登根に帰ってきてから、私はまた佐敷小学校⁵に通い始めた。当時の校舎はテント小屋で、机もなかった。そのころ、当時流行っていたマラリアに罹ってしまった。マラリアに罹ると熱と震えが出て大変だった。私は学校を休み、治ってから登校したが、またマラリアで休むことになった。そうしたことを繰り返し、結局学校に行かなくなってしまった。これも戦争のせいである。

父は戦後、コンセット（アメリカ軍の組み立て式かまぼこ型兵舎）でタンナファクルー（丸形の焼き菓子）を作って販売する菓子屋を始めた。また、法事のときに使う花ぼうる（花模様の切り込みを入れた焼き菓子）、クシチー（先端が波状になっている板状の落雁）、桃ガーシ（桃の形をした饅頭）などのお菓子も作っていた。当時は物が無い時代だったので、軍に勤めている人から白砂糖を買うなどして材料を手に入れていた。

（2016年 井口学による聞き取り 構成：山内優希）

⁴ 川南にいた佐敷村出身者らが沖縄に帰ったのは1946年（昭和21）9月から10月のようである（佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 4 戦争』佐敷町役場 1999 341、376頁）。

⁵ 平田さんが手登根に戻り学校に通い始めたのが1946年（昭和21）9月から10月頃だとすれば、当時の名称は佐敷初等学校となる。

小学校で飾られていた戦没兵士の写真

私は津波古の出身で、佐敷尋常高等小学校（現 佐敷小学校の前身）に入学した。小学校の校長室の前には、屋比久^{やびく}出身で、日露戦争で戦死した知花清一^{ちばなせいいち}さんと、津波古出身の（シベリア出兵で戦死した）山城光太郎^{やましろうたろう}さんの写真が飾られていた。山城光太郎さんは、私のお婆である山城カメの夫だった。光太郎さんは亡くなった後に金鷄勲章^{きんしやくんしょう}¹を与えられたので、村で大きなお祝いが行われたと聞いたことがある。

沖縄県立第一高等女学校に進学

当時の佐敷尋常高等小学校では、6年生を終えると、一クラスほどの生徒は高等科に進み、残りの生徒は紡績工場^{ぼうせき}などに（働きに）行くか、そのまま卒業していた。私は高等科には進まず、現在の那覇市安里にあった沖縄県立第一高等女学校（以下、一高女^{いちこうじょ}²）に入学した。小学校では女学校に入りたい人のための特別授業のようなものが行われており、私もそれを受けて一高女を受験した。佐敷尋常高等小学校の私の学年からは6人ぐらいが一高女を受験したが、合格したのは私1人だけだった。

一高女という学校は誇り高く、プールや図書館などの施設や、ミシン、家庭科で必要な炊事用具などの教材もみんな揃っていて、県で一番の女学校だった。ピアノもたくさんあり、オルガンも練習できて、学習環境はすごく整っていた。田舎から見たら別世界のようだった。一高女の友人の親は県庁職員や教員が多かった。田舎から一高女のような学校に入学するのは難しかった。

佐敷からの同級生が1人もいない中での入学だったので、何とも言えない気持ちだった。佐敷出身の先輩が1、2人はいたが、ほかはみんな知らない人だったし、まだ12、3歳だったので寂しくて、「何でこっちに入ったかねー」と思った。家から学校に行くときは、軽便鉄道^{ケービンてつどう}で与那原駅^{よなばる}から国場^{こくば}駅まで行き、国場^{かてな}駅で嘉手納線^{かてな}に乗り換えて安里^{あさと}駅で降りた。家から通学するには遠かったなので、学校の敷地内にあった寄宿舎に入った。学校に慣れるまでは、汽車の音が聞こえると家に帰りたくて涙が出た。

寄宿舎には、宮古^{みやこ}、八重山^{やえやま}、奄美大島^{あまみおおしま}、大東島^{だいとう}や津堅島^{つげん}（現 うるま市）などの遠方から来ている生徒もいて、人数はだいぶ多かった。

¹ 武功抜群の軍人および軍属に与えられた勲章で、功一級から功七級までの等級があった。1890年（明治23）に制定され、1947年（昭和22）に廃止された。

² 現在の那覇市安里にあった。同じ敷地内に沖縄県女子師範学校があり、両校合わせた通称は女師・一高女。沖縄戦時、この2校から動員された生徒たちのことを戦後「ひめゆり学徒隊」と呼んでいる（公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和記念財団立 ひめゆり平和祈念資料館編集・発行『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』2011〔第2版〕132,133頁 参考）。

一高女での学生生活と師範学校への進学

制服は紺色のセーラー服で、布地はサージ（織り）³というとても良い生地が指定されていた。当時は制服も靴もオーダーメイドだった。

一高女の前には長い相思樹並木^{そうしじゆなみき}があり、その向こうにしっかりとした門があった。学校の敷地は広く、1年生のときには、佐敷からの同級生もいなくて1人なので、教室がどこなのかわからず迷っていた。不思議なことだが、授業の開始・終了を告げる鐘はなかった。

授業では染物や織物も学んだ。家庭科では、何を作ったか覚えていないが、ヤマトンチュー（本土出身者）の先生から、自分の家で食べないような高級な和食を習った覚えがある。（当時の沖縄としては）上流社会の教育を受けていた。先生方も本土出身者がほとんどで、沖縄出身の先生はわずかしかなかった。生徒も3分の1ほどはヤマトンチューの子どもたちだった⁴ので、私たちも（本土の雰囲気）に感化されていた。

学校に慣れてくると、学校や寄宿舎の行事などでの楽しい思い出ができた。地久節^{ちきうせつ}⁵のときには、何をしたかは覚えていないが、全員で着物を着てお祝いした。部活動ではバレーボール部や陸上部などがあったが、私はバスケットボール部に入って楽しんだ。奥武山公園^{おうのやま}に一高女^{いちこうじょ}や二高女（沖縄県立第二高等女学校）⁶、三高女（沖縄県立第三高等女学校）⁷など県内のすべての女学校が集まって大会が開かれたこともあった。また、波上宮^{なみのうえぐう}のなんみん祭⁸はとても楽しみだった。寄宿舎には夕方6～7時ごろの門限があったが、なんみん祭のときには何時までも遊んで良いことになっていた。

ただ、私が女学校4年生ぐらいのときだったか、ミルクセーキ事件というものが起こり、私の友人が



1942年（昭和17）撮影、佐敷村出身の一高女、女子師範の学生。後方中央に立つのが宮城さん。

³綾織の洋服地のこと。

⁴当時、教員や生徒に県外出身者がいたことは確かであるが、ここでいう割合は宮城さんが抱いた印象であることに留意する必要がある。

⁵皇后誕生日の旧称。

⁶現在的那覇市松山（現 松山公園付近）にあった。沖縄戦時、同校から動員された生徒たちのことを戦後「白梅学徒隊」と呼んでいる（公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和記念財団立 ひめゆり平和祈念資料館編集・発行『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』2011〔第2版〕144,145頁 参考）。

⁷現在の名護市にあった。沖縄戦時、同校から動員された生徒たちのことを戦後「なごらん学徒隊」と呼んでいる（公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和記念財団立 ひめゆり平和祈念資料館編集・発行『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』2011〔第2版〕152頁 参考）。

⁸1890年（明治23）に波上宮が官幣小社に認定されたことから例祭が始まった。5月17日前後に開催。

亡くなった⁹。私はこの日、亡くなった友人から一緒に行こうと誘われていたが、後輩のセーラー服のジャバラ（プリーツ）のミシンをかけていたため、「これが終わってから行くから、先になつといて」と言い、一緒に行かなかった。

一高女に4年通ったのち、私は沖縄県女子師範学校^{しはん}の二部¹⁰に進学した。師範学校は官費^{かんび}だったので授業料がなく、むしろ給料までもらえた。しかし、当時は男性たちがみんな戦争に行っていて、男性の先生たちもいなかったのので、卒業後には教員として働かなければならなかった。

学校での軍国主義教育

一高女に入ってから、毎朝の朝礼のときには必ず、皇居に向かって最敬礼をしていた（宮城遥^{きゅうじょうよう}拝^{はい}）。

私が一高女に入ってから戦争¹¹が始まり、3、4年生ぐらいのときからは、出征する兵隊を励ますための見送りに行くようになったため、勉強する時間がだいぶ減った。兵隊の見送りでは軍歌を歌い、日の丸の小旗（学校から配布された旗）を振った。また、「南京が陥落した」「どこどこが陥落した」と、日本がどこかを陥落させたときには、学校のある安里から現在の国際通りの辺りを提灯行列^{ちようちん}で歩いた。当時はラジオや、親が県庁職員である友人などから、日本が戦争で勝っているというニュースを聞いていた。それを疑わずに信じていたし、中国の戦場での悲惨さは何も教えられていないので、「勝った、勝った」とばかり思っていた。出征する兵隊たちも苦しそうな様子はなく、晴れ晴れとした感じで旅立って行っていたように思う。

また、生徒たちは（敵国の言語である）英語や英語の先生をばかにするようになった。「英語なんか後ろと前を覚えればテスト通るさー」、「英語なんか習うもんか」と言ったり、扉を閉めるところの上の方に黒板拭きをはさみ、先生が扉を開けると黒板拭きが落ちる、という嫌がらせもしたりした。

一高女のころだったか師範学校のころだったかは覚えていないが、行軍^{こうぐん}や銃を撃つ訓練、なぎなたの訓練もさせられた。行軍の訓練では朝早くから夜遅くまで歩かされ、最後まで歩ける人は一級、途中でダウンしてしまった人は四級というように級がつけられた。途中で脱落した人は汽車に乗って帰されていた。私も最後まで歩くことはできなかつたし、翌日は歩くことができないくらい、とても苦しくて死ぬ思いだったことを覚えている。

銃の訓練は、腹ばいで進み、標的に向かって撃つというものだった。本物の銃だったのかどうかは覚えていないが、撃つたらの的に当たったのを覚えている。なぎなたは体育の授業中に先生が教えていたが、「突っ込め、突っ込め」、「敵の兵隊が目の前に来たら殺しなさい」というように指導された。当時はそれがおかしいというような意識はなく、正しいと思ってまじめに訓練を受

⁹ 1940年5月16日、波上宮参拝のために寄宿舎から外出し、那覇市内の百貨店食堂でミルクケーキを食べた一高女および沖縄県女子師範学校の学生6人が食中毒で重症となり、うち1人が亡くなった事件（1940年5月20日付『琉球新報』「お祭り参拝の女学生 ミルクケーキで落命 女師一高女寄宿生六名猛中毒」および同年5月21日付『琉球新報』「女学生食中毒事件 卵の腐敗菌か？ 招く悲劇 恐いゲルトネル氏菌」）。

¹⁰ 本科第二部。高等女学校4年を修業した者が対象となった。修業年限は2年。

¹¹ 1937年（昭和12）に始まった日中戦争。

けていた。

大里第二国民学校で勤務

師範学校に通ったのは2年間で、私は1943年（昭和18）に師範学校を卒業した。その後、教員として配属されたのは大里第二国民学校（現 大里南小学校の前身）だった。配属先は言われるがままだったので、当初は（大里の場所を知らず）「ハッサヨ、大里っていうところはどこかねー」と言っていた。

学校までは、津波古の実家から歩いて通勤した。^{おこく}小谷、^{まじきな}真境名を通って行ったが、山を越えていくので通勤は大変だった。帰宅するときには辺りが暗くて怖かったが、真境名の人たちが夕飯に誘ってくれたり、服を多く着ていった日には預かってくれたり、雨の日には途中まで送ってくれたりした。この真境名の人たちは生徒の家族というわけではなかったが、みんな親しくしてくれた。

当時の大里第二国民学校の辺りは農村で、^{のほがわ}饒波川にはすっぽんがいた。子どもたちもみんな素直で良い子だった。卒業式のときにはいくつかの教室の扉を開け放し、ひとつの大きな講堂のようにして使った。

私は5年生の担任になったが、戦争に関することは、自分自身にその知識がなかったこともあり、あまり教えた記憶はない。^{しゅうしん}修身の授業をした覚えはあるが、どのような内容だったかはもう忘れてしまった。

学校に軍隊が駐屯

[1944年（昭和19）の夏ごろから、沖縄県内各地での日本軍の^{ちゅうとん}駐屯が始まり、大里第二国民学校も軍隊の宿舎などに利用されるようになる。]

大里第二国民学校にも軍が駐屯することになり、校舎も軍に^{せつしゅう}接收された。部隊の^{ごちゆう}伍長だったか、部隊長ではない人が馬に乗っているのを見たことがある。

学校の敷地内には地域の人に利用されていた^{りんぼかん}隣保館¹²という建物があったが、そこも^{つじ}接收された。隣保館には^{つじ}辻のジュリ¹³がいると聞いたことがあるが、私はその姿を見たことはない。

当時の理科室と運動場の間には部隊の炊事用の

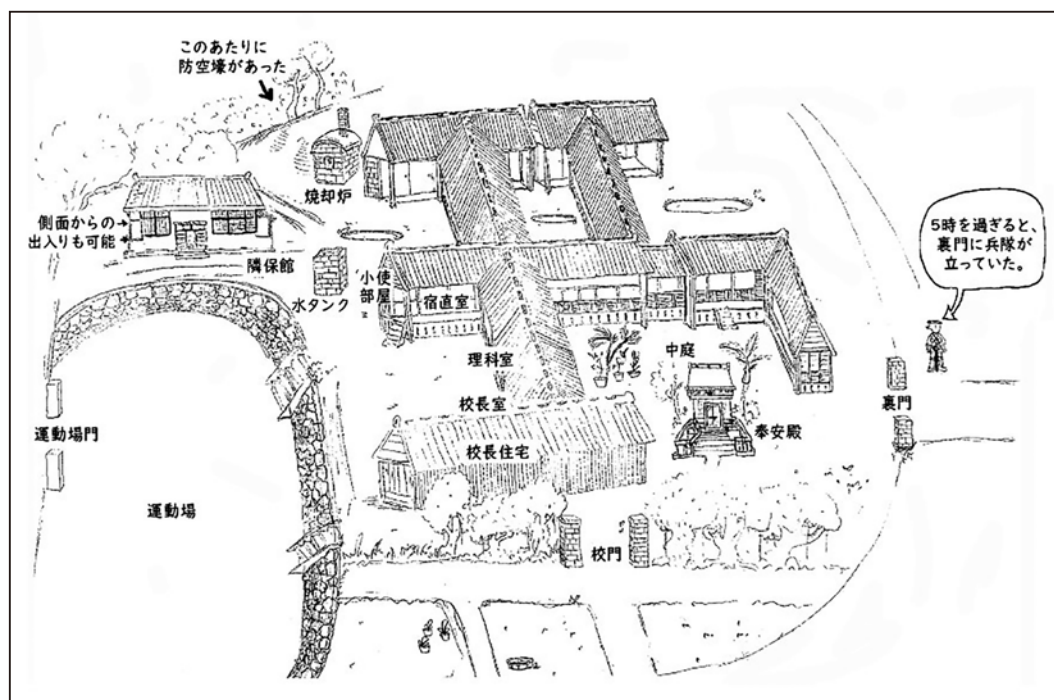


大里第二国民学校の隣保館
(大里南小学校所蔵)

¹² 当時の在校生や近隣住民の証言によると、隣保館では料理講習会や乳幼児審査、公衆衛生意識を高めるための講習会等が開催されていたほか、託児所としても利用されていた（『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』南城市教育委員会 2021〔第二版〕141～142頁）。

¹³ 戦前に那覇市にあった辻遊郭の遊女（ジュリ）で、大里第二国民学校には「慰安婦」として連れて来られていた可能性がある。

カマドが3つか4つほど設置され、私たち教員も炊を手伝わされていた。カマドは石積みで造られていたのではないかと思う。大きな鍋をいくつも置いて炊事をしていた。あるとき、二等兵だったか、1人の兵隊がカマドの側に自分のカップか服を置いて燃やしてしまい、上官にしたたか殴られているのを見た。殴られて転び、起き上がってもまた殴られて転び、を何度も繰り返して、大変な殴り方だった。このことは忘れようと思っても忘れられない。



1944年（昭和19）頃の大里第二国民学校
 （『南城市の沖縄戦 資料編』143頁）

校外での授業とヘンサ森での壕掘り

学校が軍に接収されて教室が使えなくなったため、授業は仲程なかほど（現 南城市大里）のムラヤー（公民館）などさまざまな場所に分かれて行われるようになった。

当時、6年生の担任だった私は学校に残ったが、勉強どころではなく、6年生たちと一緒に、学校の前にあったヘンサ森（現在の大里グリーンタウンにあった森）でたくさんの壕を掘った。この壕は軍のものだったと思うが、壕掘りの現場に軍の人がいた覚えはない。私のほかにも、長嶺さんという先生と一緒に壕掘りの引率をしていたのを覚えている。ヘンサ森では相当たくさんの壕を掘ったが、結局誰がそれらの壕を使ったのかはわからない。

壕掘りは朝から行われ、お昼ご飯には家から持参した芋などを食べていた。

学校から見た十・十空襲と、校長に止められた疎開

十・十空襲（1944年10月10日）の被害は大里の方にはなかったが、那覇が空襲を受けて空が赤くなっている様子を、私は学校の運動場から見ていた。このとき一緒に見ていたのは先生方

だけで、生徒がそこにいた覚えはない。

十・十空襲の後ぐらいだったと思うが、私は母（当時40歳ぐらいだった）と一緒に県外へ疎開に行くため、同僚の先生と一緒に郵便貯金を引き出しに行った。すると金城和信^{きんじょうわしん}¹⁴校長に校長室へ呼ばれ、「君たちが疎開に行ったら誰が沖縄を守るのか」ときつい口調で言われた。校長に相当怒られたので、私も「そうだね」と思い、疎開には行かないことにした。他の先生方も校長に疎開を止められているので、大里第二の先生方で疎開した人はほとんどいなかった。

校長はとても真面目ではっきりとした人柄で、怒る時にはしっかり怒る人だった。学校内には校長用の住宅が用意されていたが、そこには住まず、真和志（現那覇市）から軽便鉄道の稲嶺^{いなみね}駅まで汽車に乗って通勤していた。



軽便鉄道稲嶺駅（沖縄県公文書館所蔵）

母と二人で真境名へ避難

隣保館の後ろの方には先生たちが造った壕があり、アメリカ軍の上陸前、空襲が始まった昭和20年（1945）3月23日ごろは、先生たちはそこに避難していた。「教員はこの壕に入るように」という指示はなかったが、先生たちは那覇やさまざまな地域から来ていたので、避難する場所がなくてそこに集まったのだと思う。私もこの壕に行きたかったが、母が「先生たちに頭を下げて過ぎさないといけないので行かない」と反対した。私はそれでイライラしていたが、同僚の仲松先生が私たちのところに来て「いいよ初枝さん、お母さんの言うことを聞いた方が良いよ」と言ってくれたため、別の場所に避難することになった。

のちに、先生たちがいた壕は爆弾の直撃を受け、中にいた先生方はみんな亡くなった。その中には一組の夫婦も含まれていた。校長は戦争を生き延びていたため、校長はこの壕には入っていなかったのだと思う。

¹⁴ 金城和信（1898-1978）は教育者、社会奉仕活動家。戦前は小学校の教員、校長を歴任。戦後、摩文仁に設けられた真和志村の村長に任命され、野ざらしにされた遺骨収集を始め、魂魄の塔、ひめゆりの塔などを建立。1954年に沖縄戦没学徒援護会を設立、1961年には沖縄遺族連合会会長となる。（仲程昌徳「金城和信」沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 1983 919頁）

私と母は、真境名の人たちが造っていた壕に入れてもらった。真境名の生徒の保護者が「こっちが良いよ、入りなさい」と入れてくれたのだった。佐敷にいた祖母たちからは「佐敷においで」という伝令が来ていたが、私は「佐敷に行ったらデージドー（大変だ）、危ない」と思っていた。

真境名の壕は山手の高い場所にあった。ある日、そこから仲程の前の方を見下ろすと、そこにあった大きな壕の上空にアメリカ軍のトンボ（小型飛行機）が止まっていた。その後、艦砲射撃がポン、ポン、ポンと続けて撃たれ、3発目くらいで壕に直撃した。おそらく、トンボが壕の位置を海上の船に伝え、そこに合わせて艦砲が撃ち込まれたのだと思う。それを見たとき、アメリカ軍には絶対にはかなわないと思った。

夜空の星を友軍の飛行機だと思ひこむ

真境名にはしばらくいたが、周りの人たちもそこから逃げて行ってあまり人がいなくなっていたころ、私と母も真境名を出て親慶原（現 南城市玉城）にあった壕に入った。

親慶原にいたときには、そこにいた人たちみんなで夜空の星を友軍（日本軍）の飛行機だと思ひ、「あれは友軍が攻撃に行くんだよ」と話していた。「あれ、あまり動かないね」と私が言っても、「遠くにあるからそんなに動かないんだよ」と誰かが答えた。私もそれで納得し、「あんなにたくさんの飛行機が攻撃に行くんだね」とみんなで手を叩いて喜んでた。今考えると、戦前の教育でみんな「日本が勝つ」と洗脳されていたし、避難の疲れで頭がおかしくなっていたのだと思う。避難中の食事もどうしていたのか覚えていない。

具志頭で目の当たりにした戦争被害

その後、高嶺^{たかみね}で製糖工場の工場長をしていた母のいところを頼り、高嶺に行った¹⁵。そこに行けば助けてもらえるのではないかと思って行ったが、その人はいなかった。親慶原を出てからは壕に入ることもできず、南部を転々と逃げ回ることになった。

途中で親戚3人（両親と16,7歳ぐらいの娘）と合流し、具志頭のウマイー（馬場）¹⁶の近くにあった民家の山羊小屋に5人で入って休憩した。この家の人たちは別の場所へ逃げて行ったのか不在だった。

夕方、「もう出発しよう」と言って山羊小屋を出ることになった。しかし、私は若かったし教員だったので、荷物をうまく頭の上に乗せて持つことが出来ず、母と私で「もう死ぬんだからこんなもの捨てなさい」「いや、載せる！」と押し問答をした。それで親戚3人は先に出て行ったが、門を出ると同時にガジュマルの間から爆弾が飛んできて、親戚の母親に直撃してしまった。父親と娘が私たちの元に引き返してきたが、母親の体の脂や肉がついていて、それを払い落とした。その時は涙も出なかったし、何も考えられないという心境だった。

このほかにも、具志頭村辺りにいたときだったと思うが、大きな道をお祭りのときのように避難民たちが通っていた。私と母は丘の上に上がって座り、その大きな道を見ていたが、そこに艦

¹⁵ 宮城さんによると豊見城市高嶺なのか、糸満市高嶺なのかは覚えていない（2025年事務局聞き取り）。

¹⁶ 宮城さんによると当時の具志頭村なのか、字具志頭なのかは覚えていない（2025年事務局聞き取り）。

砲射撃が数メートルおきにポーン、ポーン、ポーンと落とされた。道にいた人たちは、アリのようになんないなくなっていた。

南部を逃げ回る

その後も、海からポンポンポン、雨のように艦砲射撃が落ちてくるなか、どこがどこかも分からずに逃げ回った。クニシ（国吉。現 糸満市）やアラカキ・メーデーラ（新垣・真栄平。現 糸満市）という場所を逃げ回ったのは覚えているが、地名をどうやって知ったのかはよく覚えていない。

アラカキ・メーデーラの辺りはとても激戦だった。アラカキ・メーデーラの裏の方にあった井戸には弾がポンポンと落ち、水汲みに行った人たちもみんなやられていた。また、メーデーラの近くには兵隊が入る壕があったが、避難中に出会った外間（現 南城市佐敷）の人が、「先生は中に入れ」と言って壕に入れてくれ、その人は入口の方に座った。するとそこに爆弾が落ちてこの人は亡くなってしまい、中に入れてもらった私は助かった。戦後、そこへこの人の遺骨を探しに行ったが、見つけれなかった。

クニシかメーデーラにいたときには、日本兵につかまって水汲みなどの看護婦のような手伝いをさせられたこともある。そのとき、私はいざとなったら自分で死ぬことができるよう、兵隊に頼んで青酸カリをもらった。あるとき、海の見える場所の民家に避難した際、けがをした妻を担いでいる男性に出会った。その人に自分が青酸カリを持っていると話したのかどうか覚えていないが、男性が泣きながら、妻に飲ませるために青酸カリを譲ってほしいと頼んだ。私は「自分のものだから絶対にあげない」と言ったが、泣いて頼むので、結局譲ってしまった。私には青酸カリを渡してしまった罪がある。その後、この男性が自分の妻に青酸カリを飲ませたかどうかは、見ていないのでわからない。

海岸でスパイだと疑われる

ある日、海岸の方に下りて行くと、アダンがいっぱい生えていたのでそこに隠れようとした。しかし、そこにはたくさんの死体があり、おっぱいを探している小さな女の子もいて、隠れることができなかった。夜には、波の音でアメリカ兵にはばれないだろうと思って海の方に行った。海にもたくさんの死体が浮いていて、そこを通りながら移動した。

昼には、海にたくさん浮かんでいた船から、アメリカ兵が「降伏しなさい」「捕虜になりなさい」と呼びかけていた。それで日本兵たちは追いつめられて、民間人に対して「私たちも死ぬからあんた達も死ね」というふうな怒りをぶつけていた。本当に地獄だった。

私も海岸にいたときに、話したこともない知らない日本兵から「この人はスパイだよ」と言われ、拳銃を突きつけられた。しかし、近くにいた民間人が「この人は先生だよ」と一言言ってくれたおかげで撃たれずに済んだ。この人は命の恩人だが、知らない人だったので、誰だったのだろうかといつも思っている。日本兵がなぜ私のことをスパイだと言ったのかもわからない。当時は（精神的に）異常になっていたもので、死んでも何とも思わないし、（拳銃を突きつけられても）

そんなに怖くなかった。

丘の上でアメリカ軍に捕らえられる

私たちは海岸から離れ、(夜間には)照明弾が上がったときにどこともなく走って畑の中の岩のそばに隠れるなどし、最終的には母と2人で東風平(現 八重瀬町)のエージ山(八重瀬岳)辺りまで行ったのではないかと思う。丘の上に登ると、若い日本兵2人が「一緒に行きましょう、一緒にいさせて下さい」と言うので、母と私が真ん中、彼らとその両端という形で、4人で座って過ごした。

私はその状態で眠っていたが、急に母が私の腕をつかんで上に挙げさせた。見ると、すぐそこにアメリカ兵が2人いて、私と母の両端にいた日本兵2人は銃で撃たれ殺されてしまった。殺された2人は、武器を持っていたかはわからないが軍服を着ていた。私と母はモンペ姿だったと思う。

そうして私と母はアメリカ兵に捕らえられたが、そのときは(捕らえられて)怖かったというよりは、意識が朦朧^{もうろう}としていたのではないかと思う。水が飲みたくても手に入らず、自分のつばを飲んでいる状態だったので、アメリカ兵から水をもらってたくさん飲んだ。

捕らわれた日付は覚えていないが、6月の終わりごろだったと思う。

収容所での生活

その後、私と母は畑にテントを張って設営した収容所に送られた。場所は稲嶺(現 南城市大里)だったと思う。しかし、そこに収容されていた人たちはみんな日本兵で、丸裸にされていた。ここに一晚でも泊まったら大変なことになると思い、通訳の人に「沖縄の人がいるところに連れて行ってほしい」と頼んだ。

そうして連れて行かれたのが屋比久^{やびく}(現 南城市佐敷)で、そこで富祖崎^{ふそざき}(現 南城市佐敷)に収容されていた祖母たちと再会できた。祖母たちは早い時期にアメリカ軍に捕らわれて富祖崎に来ていたので、私たちのようなひどい目には遭^あっていない。私は母に、「(真境名にいたとき)『おばあさんと一緒に佐敷にいたら死ぬから、佐敷には行かない』と言ったからこんなに苦労してるさ。あんたは親不孝だよ」と言われた。

屋比久には金網で囲われた捕虜収容所があり、戦後に知念高校の校長になった平田善吉先生(佐敷村屋比久出身)もそこに入れられていた。また、別の場所で朝鮮出身らしき女性が2、3人外に立っているのを見たこともある¹⁷。

それからしばらくしたのち、佐敷の収容所にいた人たちは新里のウマイー(馬場)に集められ、馬天港で大きな船に乗せられた。人々は「大海原に出たら船をひっくり返してみんな死なせるんだよ」と話していたが、アメリカ軍の命令で「乗れ」というので乗らないといけず、大きな船だったがみんな縮こまっていた。

¹⁷ 屋比久が収容所になっていたところに、朝鮮人と思われる女性を数人見たという体験談はほかにもある。(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』[第二版] 771頁)

船は瀬嵩（現 名護市）辺りに着き、私たちは大川（現 名護市）を経て瀬嵩で暮らすことになった。そこには佐敷の人が大勢いた。

瀬嵩での生活も大変だった。小屋を造って住んでいたが、地面には茅を敷いてその上で寝た。しかしダニがたくさんいて、ダニが自分についているのを感じないうちに血を吸われ、小さかったダニが丸く大きくなっていった。ついたダニはきれいに落とさないと、歯（口器）がそのまま皮ふに残っていた。

また、瀬嵩では私も母もマラリアに罹った。瀬嵩にあった病院でキニーネという薬をもらって治した。ただ、戦後、子どもを産むたびにマラリアに罹ったときのような症状が出た。私は子どもを5人産んだが、毎回症状が出ていた。

瀬嵩では「先生をして」と頼まれ、浜辺の青空教室で授業をした。どのようなことを教えていたのかは覚えていない。報酬としてお米などを少しもらっていた。

瀬嵩でしばらく暮らしたのち、次は大見武（現 与那原町）の収容所に移動することになった。そこではテントか何かで造られた家に4、5世帯が一緒になって暮らした。大見武には長くはいなかったと思う。その後、船越（現 南城市玉城）あたりの収容所に移動して、佐敷に帰ってきた。

戦後の暮らしと戦争がもたらした影響

伊原出身で、戦後に佐敷村長になった渡名喜元秀さんという方がいたが、この人は対馬丸の撃沈により妻と子ども4人を失っていた¹⁸。渡名喜さんは私の母のいとこの知人だったようで、ある日、母はいとこから「渡名喜さんがあまりにかわいそうだから結婚しなさい」と勧められた。母は「見たこともない人との結婚なんて絶対にできない」と断ったが、いとこから「この人（渡名喜さん）を助けないと、あなたを親戚から外すよ」と強く言われ、渡名喜さんと再婚した。

師範学校時代の同級生に糸数裕子さんという方がいるが、この人は対馬丸に引率教員として乗船し、生き延びたものの、引率していた子どもたち13人を失った。また、沖縄戦に動員されたひめゆり学徒たちも後輩にあたるので、（ひめゆりの塔やひめゆり平和祈念資料館を）見に行ったら涙が出てしまう。同級生や後輩たちもみんな戦争の被害に遭っている。

私の夫は戦時中、同級生たちが兵隊として外国に出征する中、背は高かったものの体重が足りなくて八重山に派遣された。夫はそこで、戦死した友人を薪の上に置いて火葬した際、友人のお腹が破裂したのを見たそうだ。その後、夫は戦争を生き延びることはできたが、戦後もその光景が忘れられず、亡くなるまでずっと夢に見てうなされていた。

私は戦後も教員を続け、戦後は佐敷小学校を皮切りに、大里北小学校や南風原小学校、与那原小学校などに勤務した。佐敷小学校にいたころは、校舎はまだ掘っ立て小屋だった。夫も教員だっ

¹⁸ 1944年（昭和19）8月23日、那覇港から長崎へ航海中にアメリカ潜水艦の攻撃を受け撃沈した貨物船。県外へ疎開するために乗船していた784人の学童を含む1,484人（氏名判別者数）が犠牲となった（公益財団法人対馬丸記念会 ホームページ「対馬丸事件について」参考 <https://www.tsushimamaru.or.jp/tsushimamaru.php>）。なお、南城市出身の遭難者は12人いることが確認された。また、『南城市の沖縄戦 資料編』には、渡名喜元秀氏の手記（対馬丸事件に関係する箇所のみ）を掲載している（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』201～210頁）。

たので、復帰運動にも夫と2人で参加した。しかし、子ども5人を育てながら仕事や復帰運動をして大変だったので、子どもたちは「絶対に先生にはならない」と言い、1人も教員にはなっていない。

教員時代の教え子たちとの交流は今でも続いていて、彼らが同窓会をするときには呼ばれて行くこともある。瑞慶覧長方^{ずけらんちやうほう}¹⁹さんなど、戦前に大里第二国民学校で受け持った教え子たちとも今でもつながっている。夫も、高校を受験する生徒達を家に呼んで勉強会を開くなどして子どもたちの世話を続け、成人した教え子たちと一緒に県外や海外へ旅行に行ったこともあった。

どんなことがあっても戦争だけはやってはいけない

私はこれまで、自分の戦争体験の話はしたくなくて、あまりしてこなかった。しかし今回は、孫に「おばあさんはこんなに長生きをしているんだから、みんなに話す義務がある」と説得されて話すことにした。

戦争を知らない、体験していない人たちに伝えたいことは、どんなことがあっても戦争だけはやってはいけない、ということだ。戦後はその気持ちで復帰運動にも参加した。沖縄戦で大変な目に遭ったので、ずっと戦争には反対しているし、戦争につながる基地にも反対している。戦争のない世の中にならないといけない、と心から思っている。

(2018年 比嘉良雄・赤嶺玲子・事務局による聞き取り 構成：山内優希)

¹⁹ 瑞慶覧長方(1932-2023)は旧大里村出身の政治家。元沖縄県議、元沖縄社会大衆党委員長。瑞慶覧氏の証言は『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』に掲載されている(南城市教育委員会文化課市史編さん係編『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』南城市教育委員会 2021 192～202頁)。

匿名（昭和5年生まれ）

のうへいたい
〈農兵隊〉

父が子どものころに移住

私の先祖は、廃藩¹をきっかけに東風平村（現 八重瀬町）に移住したと聞いている。東風平の家の屋号は〈ミチバタ〉で、私の高祖父（祖父の祖父）は〈ミチバタ〉から分かれて久原（現 南城市知念）に移住した。その後、私の父が7歳ぐらいのときに現在の場所に移住したそうだ。当時は、現在国道になっている道路（国道331号）は工事中だったらしい。子どもだった父は、その工事でできた穴の水溜まりで遊んだそうだ。

私が10歳ぐらいのころ、東風平の〈ミチバタ〉のおじいさんが家に遊びに来ていた。〈ミチバタ〉のおじいさんは草履^{ぞうり}を手で持って裸足^{はだし}で来て、わが家で足や顔を洗い、休憩しながら祖父たちと話をしていた。その後、久原の親戚の家に戻って行った。夏の時期には汗をかいていたので、着ていたバサージン^{ばさうじん}（芭蕉布の着物）もわが家で洗っていた。バサージンはすぐに乾くので、それをまた着て久原に行っていた。

職業軍人だった祖父のおじとトウナ大尉

私の祖父のおじにあたる人は職業軍人²で、特務曹長³だったと聞いた。しかし、県外で夫婦ともに亡くなったため、その息子を私の祖父が引き取って育てていた。

また、私が13歳か14歳ぐらいのときだったと思うが、中城湾沖に日本軍の船が何隻か来たことがあった。このとき、船に乗っていた海軍のトウナ大尉^{たいい}という人が妹を訪ねてきていたのを見た。トウナ大尉の屋号は〈カジョー東恩納^{ヒジョンナ}〉で、もとの姓は東恩納^{ひがおんな}だったが、トウナに変更したらしい。〈カジョー東恩納〉の人たちはみんなディキヤー（優等生）だった。トウナ大尉の弟は朝鮮で巡査をしていて、現地で亡くなったと聞いた。

大城グシクと与那原での壕掘り

私が（佐敷国民学校の）高等科1年ぐらいのころだったと思うが、大里村（現 南城市大里）の大城グシク⁴での壕掘りに4、5回ほど行った。これは学校から、「今日は何組」とクラスごとに動員されて行った。車がなかったので、小谷、稲福^{いなふく}を通して大城まで歩いて行った。

壕掘りの現場では、兵隊が壕の中をローソクで照らしながら、ツルハシで穴を掘っていた。私たち生徒は、男子生徒も女子生徒も並んで、兵隊がツルハシで掘った時に出た土砂の入ったニン

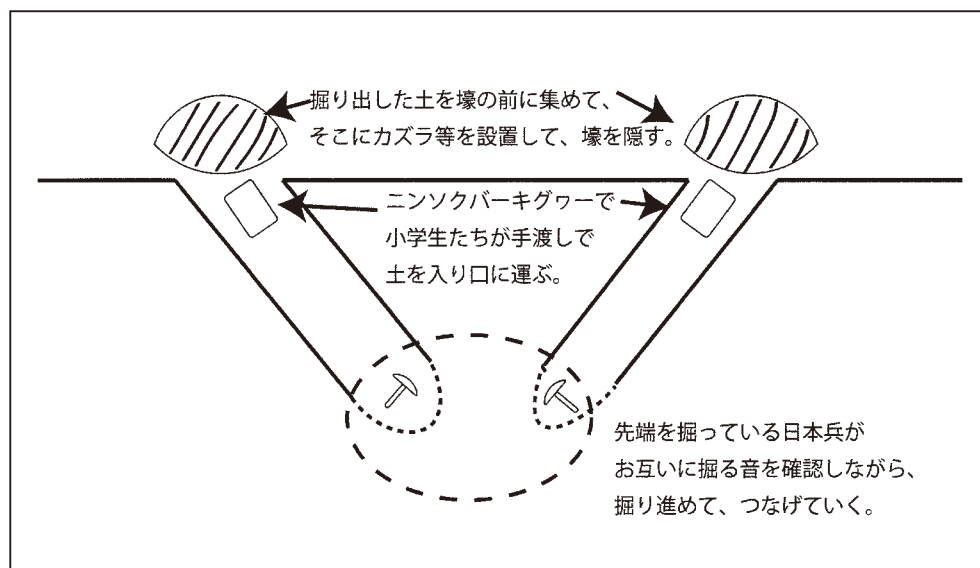
¹1879年（明治12）に日本政府が琉球藩を廃止し、沖縄県を設置したときのことか。

²軍隊における勤務を本職とする軍人のこと。

³日本陸軍の階級で、のちに准士官に改称。少尉と曹長の間に位する。

⁴大城城跡（南城市指定文化財（史跡））。南城市大里字大城に所在。グスクが立地する丘陵の南斜面から平坦地にかけて大城集落が広がる。

ソクパーキグラー（かご）を手渡しで壕の外に運んだ。運び出された土砂は壕の前に積み上げられ、そこにカズラのような植物も置いて壕を隠していた。壕は別の場所からも掘っていて、お互いに穴を掘り進める音を聞き合いながら掘り、最終的に1つの壕として繋げていたようだ。



話者からの聞き取りをもとに作成（2015年 作成：井口学）

また、与那原^{せんしゃこうほ}での戦車壕掘りにも2, 3回行った。そこでも、兵隊が掘った土砂が入ったザルを運ぶ仕事をさせられた。戦車壕は幅が2, 3メートルほどあり、現在の知念高校の向かい（国道331号をはさんだ向かい側）の山手の方に掘られていた。この壕を掘り進めていく途中、元からあったお墓に引っかかり、お墓の持ち主と兵隊が話し合っているのを見たことがある。話し合いの結果がどうなったのかはわからない。

マカーバルの川沿いの防空壕と日本軍

集落の山手側にあるマカーバルという一帯の川沿いには、壕が東西に1カ所ずつあった。これらは、学校で空襲があった際に避難するためのものだった。西側の壕は、戦後に子ども達が盗んだ物を入れたり、盗んだ缶詰を食べたりするのに用いていたので、先生方が入り口を埋めてしまった。東側の壕はまだ残っていると思う（現存しているか不明）。

沖縄戦のとき、このマカーバルの川沿い（山側）には日本軍の通信隊^{つうしんたい}がいたようだ。私は当時ヤンバルにいたのでよく知らないが、この通信隊がいたために艦砲^{かんぱう}か迫撃砲^{はくげきぱう}か、何かの砲弾が撃ち込まれたとお年寄りから聞いた。

新里の「カイゲンショウ」と水溜

戦前、新里には「カイゲンショウ（海軍省）」と呼ばれていた日本軍の施設があった。その施

設はカーラヤー（瓦葺きの建物）だった⁵。

また、日本軍の艦船に水を補給する水溜^{みずため}もあった⁶。

農兵隊として名護に行く

高等科2年生だったとき、私は農兵隊^{のうへいたい}⁷として名護に行った。これは命令ではなく、学校の先生から「どこに行きたいか」と聞かれて希望したものだった。当時、師範学校に合格していた人たちもいたが、私はそうでない人たちと4人で農兵隊に行った。

農兵隊では、名護^{アガリエバル}の東江原で2、3週間訓練した。そこは民家が4、5軒、遠くにも民家が1、2軒ある地域で、山を削って小さな家を建て、大根やイモの畑がこしらえられていた。私たちが訓練中に民家に入ることはなかった。

訓練中は、建物を建てる前の準備として土地を削って地均^{じなら}しをした。また、朝は起床後にヤンバルダキ（リュウキュウチク）を刈^かってから朝食をとった。

2、3週間の訓練が終わってからは、今帰仁村^{なきじんそん}や石川（現 うるま市）などに行って田んぼを耕した。石川に行くときには、金武村^{きんそん}（現 金武町・宜野座村）に疎開^{そかい}していた親を訪ねた。

空襲が始まり逃げまどう

石川にいたときにアメリカ軍からの空襲^あに遭ったため、夜に石川から避難した。避難した先は嘉陽^{かよう}（現 名護市）だったと思う。しかし、そこでも空襲を受けたため、親が疎開していた金武まで山道を歩いて行った。

だが、親は疎開先の家にはもういなかった。そこでは、日本兵が「敵（アメリカ軍）は石川まで上陸してきているから、命が欲しい人は逃げなさい」とメガホンで言っていた。金武には同じ集落のオジー（屋号はトゥンチグワー）がまだ残っていたので、その人の荷物も担いで一緒に久志小^{シグワー}（現 名護市）まで逃げた。久志小では、誰もいない民家に入って休んだ。

アメリカ軍に見つかる

その後、銃を持ったアメリカ人（アメリカ兵）がこっちに向かってきた。私たちは戸を閉めて

⁵ 1895年（明治28）佐敷村津波古の海岸沿いに海軍の補給基地「中城湾需品支庫」が建設され、住民には「カイグンショウ（海軍省）」と呼ばれた。新里の「カイグンショウ」と呼ばれた日本軍の施設は昭和期に入り新里の馬場付近に造られ、「海軍の兵舎・送信所」だったとされる（佐敷町史編集委員会編『佐敷町史 4 戦争』佐敷町役場 1999 489頁 参照）。

⁶ 南城市佐敷新里に現存している、旧海軍の給水タンク（水溜）のこと。

⁷ 農兵隊の原隊は、徴集・召集や勤労動員などによる農村の労働力不足の打開策として結成された食糧増産隊である。年齢が高等科卒予定者となった昭和20年度甲種食糧増産隊が農兵隊と呼ばれている。沖縄県は1944年11月に同隊を編成し、国民学校卒業前の高等科生や青年学校生が動員された。池間利秀隊長の報告によると、1945年2月15日、幹部36人を含む総計641人が名護町（現 名護市）東江原を本拠地に「決死生産隊」として出動し、「戦場ニナルマデハ耕スベク各地ニ進出」、「開墾」や「大豆播種、甘藷植付」などを行った。アメリカ軍の空襲や艦砲射撃が始まると、小隊ごとの解散や「脱走」する隊員もいて、農兵隊は自然解散のような形となった。（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会 2017 80頁 注83）

家の中にいたが、ふすまの間からアメリカカーがウロウロしているのが見えた。

アメリカカーが戸を開けると、私たちはクチャ（裏座）の方に逃げて絶対に動かなかった。アメリカカーが「カモン、カモン（Come on, Come on）」と言ったが、私たちが泣いて動かないので、アメリカカーはポケットから白い四角形の砂糖を取り出し、それを自分で食べて見せた。そして、私たちにも渡して食べるように促した。私は、「どうせ殺されるから」ということでその砂糖を食べた。

それから、4,5人いたアメリカカーは銃を角に置いて、「撃たない」「海岸の方には食事がある」と手振りで示して見せた。それで私たちは、もう殺されないから出ようということその民家を出た。しかし、アメリカカーが銃を持っていなかったのも、（撃たれる恐れがないので）またみんな山に逃げた。

山を下りてギンバルへ


山の中には避難民や日本兵がたくさんいた。しかし、後からひもじくなったので山を下りて集落の方に行くと、人々がイモを炊いておいしそうに食べていた。それで、「(アメリカカーは) クルサンドー（殺さないよ）、リッカ、リッカ（行こう、行こう）」とみんなで山を下りた。

それから金武の方に行こうとしたが行けず、ギンバル（現 金武町）に移動して民家にお世話になった。ギンバルで暮らしていたときには、毎日 GMC（アメリカ軍の大型トラック）に乗って金武に行き、ナタで木を伐採するなどの作業をした。作業をすると（アメリカ軍から）Cレーション⁸をもらえたので、それをもらって食べるために働いた。

（2015年 井口学による聞き取り 構成：山内優希）

⁸ アメリカの軍隊で支給される食糧。レーション（Ration）とは配給品を意味する。第二次世界大戦時の主なものは、A、B、C、D、Kの5種類であった。C - レーションは各個人に配給された調理済み食糧で、任務時に食べることが想定された。主要料理の缶詰「M」ユニット」、クラッカー・デザートなどの缶詰「B」ユニット」、蠟紙に包まれた「アクセサリーバック」で構成された。



証言に出てくる主な用語集（五十音順）


	用語	よみかた	解説
1	青空教室	あおぞらきょうしつ	戦争により校舎が消失した戦後、子ども達を対象に屋外で行われた授業のこと。青空学校とも呼ばれた。
2	暁部隊	あかつきぶたい	陸軍船舶部隊全体を指す。通常の陸軍部隊とは異なり、一地域ではなく各地に配置されていたため、「暁部隊＝沖縄のみに配備されていた」わけではない。輸送部隊のほか潜水艦や揚陸艦も有していた。海上挺進戦隊など一部の部隊は「暁」と「球」の両方の兵团文字符（所属兵团を示す漢字のこと）を持つ。
3	慰安所	いあんじょ	戦地や日本軍の駐屯地域に設けられ、女性たちに兵士との性行為を強制した施設。
4	「慰安婦」	いあんふ	慰安所で働かされた女性たちのこと。
5	一般疎開	いっぱんそかい	家族または個人単位で行われた疎開のこと。県外や台湾に住んでいた親戚を頼っていった「縁故疎開」と、頼れる縁故者がいない疎開者を沖縄県が調整して宮崎県・熊本県・大分県に割り振った「無縁故疎開」があった。
6	糸数アブチラ ガマ	いとかず あぶちら がま	<p>糸数集落東側に所在する全長約 270 メートルの自然洞穴で、沖縄戦中には軍の陣地壕、病院壕（沖縄陸軍病院糸数分室）、住民の避難壕として利用され、軍民混在の壕となった。1945 年（昭和 20）6 月には、アメリカ軍による攻撃を受けて避難民と重症患者に死傷者が出るが、その後も壕に残り続けた避難民と兵士たちが壕を出たのは8月中旬以降だった。壕内には井戸や遺物などが残っている。</p>  <p>『南城市の沖縄戦 資料編』583 頁</p>



	用語	よみかた	解説
7	慰霊塔／慰霊碑	いれいとう／いれいひ	<p>戦争や災害などで亡くなった人の霊を慰めるために建立されたもの。</p>  <p>慰霊之塔〈富祖崎〉『南城市の沖縄戦 資料編』730頁</p>
8	沖縄陸軍病院 南風原壕	おきなわりくぐん びょういん はえば るごう	<p>黄金森（現 南風原町喜屋武）と現在の南風原町役場近くの丘に掘られた人工壕で、約30の横穴壕が作られた。アメリカ軍の艦砲射撃が始まった1945年（昭和20）3月下旬から、本島南部への撤退命令が出された5月下旬まで沖縄陸軍病院の壕として使用された。壕に運ばれてきた負傷兵に対し、軍医、看護婦、衛生兵、女学生（ひめゆり学徒）らが医療活動を行った。</p>
9	学童疎開	がくどうそかい	<p>縁故疎開（一般疎開）ができない国民学校の児童を対象とし、主に学校単位で行われた疎開。</p>
10	学徒隊	がくとたい	<p>軍の補助要員として動員された旧制中等学校（中学校、高等女学校、実業学校）や師範学校の生徒たちのうち、学校ごとにまとまって動員された生徒たちのことを、戦後に「学徒隊」と総称している。男子学徒たちは「鉄血勤皇隊」と「通信隊」に編成されて各部隊に配属された。鉄血勤皇隊は主に陣地構築や糧秣運搬、立哨など軍の補助任務に、通信隊は主に電話線の架設や補修など通信部隊の補助任務に就いた。女子学徒たちは県内各地の陸軍病院、野戦病院に配属され、負傷兵の看護、手術の補助、排泄物の処理、死体埋葬などの任務を担った。</p>

	用語	よみかた	解説
11	ガマ	がま	琉球石灰岩が浸食されてできた自然の洞窟のこと。沖縄戦では住民たちの避難場所になったほか、日本軍の陣地や野戦病院としても利用された。
12	カンボウ	かんぼう	沖縄戦体験者が沖縄戦体験を語る中で、空襲による爆撃や艦砲射撃などのアメリカ軍の攻撃全を「カンボウ」と表現することがある。本書では、話者が「カンボウ」と話しているものの、その実態が艦砲射撃であると事務局がはっきり判断できなかった場合（実際には空襲だった可能性もある場合など）には、「艦砲」ではなく「カンボウ」と表記している。
13	艦砲射撃	かんぼうしゃげき	艦砲（艦艇に搭載された火砲の総称）による砲撃のこと。
14	宮城遙拝	きゅうじょうようはい	皇居（宮城）の方角に向かって最敬礼（手の先をひざまで下げて体を深く前方に曲げる、最も丁寧な敬礼）する行為のこと。
15	義勇隊	ぎゆうたい	アメリカ軍の上陸が間近に予想された1945年（昭和20）2月、翼賛会支部が主体となり、市町村ごとに市町村名を附した義勇隊と、その下部組織として町内会や字ごとの義勇隊が組織された。これは兵役法に基づくものではなかったが、沖縄戦では軍人でない一般の男女が半強制的に参加させられた。3月末にはアメリカ軍の攻撃が始まったため、ガマなどに避難している住民を直接動員する形もあった。義勇隊の主な任務は、アメリカ軍の上陸前は陣地構築などで、上陸後は戦場での弾薬・食料の運搬であったが、直接戦闘に参加させられた事例もあった。
16	斬り込み	きりこみ	敵陣を襲撃すること。刀を使用するとは限らず、手りゅう弾などの爆発物での攻撃も行われた。
17	久場崎	くばさき	1946年（昭和21）8月～12月に、県外・海外引き揚げ者の受け入れを行う港として利用された、現在の中城村久場集落北側の海岸付近のこと。アメリカ軍は「ブラウンビーチ」とも呼んでいた。引揚げ者は久場崎に上陸するとDDTによるシラミ駆除を受け、久場崎港に隣接する久場崎収容所か、沖縄市高原のインヌミ収容所（インヌミ、インヌミ屋取とも呼ばれる）に送られた。
18	軍属	ぐんぞく	軍隊に属し勤めていた軍人以外の人々。日本軍からの給与の有無に関わらず、民間人で軍に協力した人々はまとめてそう呼ばれることが多い。
19	軽便鉄道	けいびんてつどう	鉄道の建設費や維持費を抑制するため、通常の線路幅（軌道軌間）である1067mmよりも小さい線路幅で建設された鉄道のこと。本書では、線路幅が762mmであった沖縄県営鉄道（または沖縄県鉄道）のことを指す。沖縄県営鉄道は、人々からはケイビンまたはケイビンと呼ばれ、沖縄戦で破壊されるまで陸上の貨客輸送の要であった。


	用語	よみかた	解説
			 <p data-bbox="826 651 1222 678">軽便機関車（那覇市歴史博物館提供）</p>
20	高射砲	こうしゃほう	航空機を攻撃する火砲。
21	国民学校	こく민がっこう	1941年（昭和16）、国民学校令により、それまでの小学校が「国民学校」という名称に変わった。
22	コンセット	こんせっと	<p data-bbox="679 875 1370 1014">アメリカ軍の組み立て式かまぼこ型兵舎のことで、その形からマルヤーとも呼ばれた。戦後の沖縄では、アメリカ軍部隊の移動に伴い民間に払い下げられ、学校、病院、役所などに利用された。</p>  <p data-bbox="764 1408 1284 1435">米軍施設／コンセット（那覇市歴史博物館提供）</p>
23	CP (Civilian Police)	しーピー	<p data-bbox="679 1491 1370 1742">本来は「文民警察」を指すが、アメリカ軍占領下の沖縄においては沖縄の住民で組織された警邏（けいら）組織を意味する。MP（Military Police アメリカ軍の警察組織で日本軍の憲兵に相当する）と比較すると権限や装備はかなり限定的で、避難民収容所の治安維持の任務を担っていた。赤い帽子を被っていたので「赤帽（あかぼう）」とも呼ばれた。</p>

	用語	よみかた	解説
24	十・十空襲	じゅう・じゅうく うしゅう	<p>1944年（昭和19）10月10日にアメリカ軍の艦載機が沖縄を襲った大規模な空襲。</p>  <p>沖縄県公文書館</p> <p>炎上する那覇市の港湾施設。台湾・沖縄攻撃の際に、空母フランクリン（CV-13）の艦載機から撮影。（沖縄県公文書館所蔵）</p>
25	収容所	しゅうようじょ	<p>囚人、捕虜、難民などを収容する施設のこと。沖縄戦では民間人は民間人収容所、兵士は捕虜収容所に分けて収容された。民間人は焼け残った家屋やアメリカ軍が設置したテント小屋に収容されたが、なかには家畜小屋、木の下などで過ごさざるをえなかった人もいた。</p>  <p>監視塔からの島の捕虜収容所の光景。（沖縄県公文書館）</p>
26	シュガーローフ	しゅがーろーふ	<p>沖縄戦の激戦地で、現在の那覇市おもろまち一帯の丘陵地帯に築かれた日本軍陣地のひとつ。日本軍は「安里五二高地」や「すりばち丘」、アメリカ軍は「シュガーローフ」と呼んだ。別名「慶良間チーズ」。</p>
27	手りゅう弾	しゅりゅうだん／ てりゅうだん	<p>手で投げる小型爆弾のこと。沖縄戦ではその爆風や破片で多くの人が命を落とした。安全装置を解除し信管を作動させた後、4秒前後で起爆した。</p>

	用語	よみかた	解説
28	真珠湾攻撃	しんじゅわんこうげき	1941年（昭和16）12月8日、日本海軍がハワイ・オアフ島真珠湾のアメリカ軍基地および太平洋艦隊（アメリカ海軍）に対しておこなった奇襲攻撃のこと。
29	陣地構築	じんちこうちく	野外に一時的な陣地を構築すること。
30	青年団	せいねんだん	明治30年代後半頃から日本国内で政府の指導により各地域で編成された組織。主に義務教育終了後の地方在住の若者が結婚するまでの期間在籍した。
31	戦果	せんか	本来は戦争や戦闘によって得られた成果を意味するが、戦後の生活について沖縄の人が「戦果（センカ）」と語る時は、アメリカ軍物資をかすめ盗る行為やその時の盗品を指す。
32	宣伝ビラ	せんでんびら	<p>沖縄戦中にアメリカ軍の飛行機から撒かれた紙片のことで、日本軍や住民に投降を呼びかける内容が書かれていた。</p>  <p>降伏勧告ビラ（那覇市歴史博物館提供）</p>
33	武部隊	たけぶたい	第九師団とその隷下にある部隊を示す集団。1944年（昭和19）7月に沖縄へ配備されたが、12月に台湾へ移駐した。
34	球部隊	たまぶたい	第三十二軍と直轄部隊（第五砲兵、独立混成第四十四旅団など）を示す集団。
35	DDT	でいーでいーていー	有機塩素系の殺虫剤の1つ。シラミ駆除などの目的で、住民を収容する際などにアメリカ軍が住民の頭に振りかけた。
36	擲弾筒	てきだんとう	手りゅう弾や小型の専用弾を発射できる小型軽量の迫撃砲のこと。
37	飯盒	はんごう	主に屋外で使用する、食器を兼ねた調理器具。
38	PW (Prisoner of War)	ぴーだぶりゅー	捕虜のこと。アメリカ軍に投降し収容所に送られた日本兵や防衛隊員などには「PW」と書かれた衣服が支給された。一方で、民間人はシビリアン（Civilian）と称された。

	用語	よみかた	解説
			 <p>RG, Series Item: 127-GW-669-118238 <small>沖縄県公文書館</small></p> <p>沖縄の民間人と捕虜（沖縄県公文書館所蔵）</p>
39	奉安殿	ほうあんでん	<p>第二次世界大戦中まで、各学校で御真影（天皇・皇后の写真）や教育勅語（1890年に発布された、日本帝国の教育の基本理念を示した「教育に関する勅語」のこと）などを収めていた建物のこと。</p>  <p>大里村第二国民学校奉安殿</p> <p>大里第二国民学校の奉安殿 （『南城市の沖縄戦 資料編』151頁）</p>

	用語	よみかた	解説
40	防衛隊	ぼうえいたい	本書では主に、陸軍や海軍の防衛召集規則に基づいて召集され、日本軍の補助兵力として動員された、17歳から45歳の沖縄人男性を指す。なかには17歳未満や46歳以上の人も含まれていた。主な任務は弾薬運びや陣地構築などといった戦闘部隊の補助や飛行場造成であったが、沖縄戦では教練や武器の支給無しで戦闘に投入された例もあった。
41	防空壕	ぼうくうごう	空襲などの際に退避するために掘られた穴や構築物。沖縄ではガマ（自然洞穴）も防空壕として利用された。
42	捕虜	ほりよ	敵勢力に投降し、とらわれた戦闘員を指す。本来は民間人に対して使われることはないが、沖縄戦体験者（民間人）がアメリカ軍に投降し保護されたことを「捕虜になった」と表現することが多々ある。
43	マラリア	まらりあ	熱帯・亜熱帯地域に分布し、蚊（ハマダラカ属）が媒介するマラリア原虫によって発症する伝染病。高熱、頭痛、嘔吐などの症状を引き起こし、死に至ることもある。沖縄戦中から戦後にかけて沖縄島や宮古・八重山で蔓延し、多くの犠牲者を出した。
44	満州	まんしゅう	中国東北地方の旧称。1931年（昭和6）の満州事変では関東軍（日本陸軍の満州駐留部隊）が主要都市を制圧し、翌年3月に満州国を建国した。満州国は日本の敗戦とともに消滅した。
45	モービルオイル	もーびるおいる	自動車等の内燃機関のエンジンオイルのこと。アメリカ軍占領後の食料難の際、このモービルオイルで天ぷらを揚げるなどの利用がされた。
46	屋取	やーどーい	琉球王国時代、士族が首里・那覇から農村地域へ移り住む人口移動が行われた。当初それらの士族たちはいずれ首里・那覇に戻る予定であったが、時勢の流れにより、結局は移住先の地域に定着・同化するようになった。これらの士族たちが移動先の農村で形成した集落は、移動先の本村と区別して「屋取集落」「屋取」と呼ばれている。また、屋取集落はしばしば、「(本村の)屋取」と呼称される。
47	ヤンバルへの立ち退き	やんばるへのたちのき	アメリカ軍は沖縄島各地への基地建設のため、沖縄島の全住民を中南部（前原地区を除く）からヤンバルへ移動させることを計画し、実際に県内各地から約25万人がヤンバルへと移送された。知念半島でも1945年（昭和20）7月中旬から8月中旬にかけて、佐敷村、玉城村垣花一区（垣花）・二区（親慶原）、知念村知名二区（海野）・三区（久原）、知念村知名、安座真の収容所にいた人々がヤンバルへ送られた。その後、人々は同年10月から翌年1月頃にかけて知念半島へ帰郷したが、ヤンバルにいる間にマラリアに罹るなどして命を失った人も少なくなかった。

	用語	よみかた	解説
			 <p data-bbox="790 958 1348 1059">戦車揚陸艦 LST-1031 に向かって移動する沖縄本島の民間人。同艦によって沖縄本島北部に運ばれた (沖縄県公文書館所蔵)</p>
48	レーション	れーしょん	<p data-bbox="719 1093 1414 1196">アメリカの軍隊で支給される食糧。レーション (Ration) とは配給品を意味する。第二次世界大戦時の主なものは、A、B、C、D、K の5種類であった。</p>

02. 戦後史（産業）調査



戦後史（産業）調査について

現在、南城市教育委員会文化課市史編さん係では、「南城市史編集基本計画（令和5年2月9日変更）」の発刊計画に則り、戦後の産業史の編さん事業に取り組んでいる。2023（令和5）年度に専門部会を発足させ、2031（令和13）年度刊行予定の『戦後史 上巻 産業』（仮題）を目指して、専門部会及び事務局が南城市における戦後の産業に関する調査を進めている。

戦後産業分野の編さん事業を行うことになった理由は、次の通りである。

- 過去に刊行された南城市及び旧町村の市町村史・関連刊行物を精査した結果、戦後の産業に関する記述・情報がきわめて乏しいということが判明した。
- 産業は、すべての市民の生活に大きな影響を与える、きわめて重要な分野である。
- 自治体が刊行したもの以外に目を向けても、南城市域の産業に関するまとまった資料は、ほとんど存在しない。

以上の3点から、戦後史のなかでも、とくに産業史の調査・研究に優先的に取り組む必要があるとの結論に至った。そして、主要な調査方法として聞き取り調査を採用することとした。その理由は、次の通りである。

- 文献資料が少ない状況においては、聞き取り調査によって多くの情報を収集する必要がある。
- 戦後は、情報や・人・モノ・カネの移動が活発になった結果、産業の多様化が進み、事業者ごとの個性も際立つようになった。こうした産業の多様性を把握するためには、個人から直接話を聞くことが不可欠である。

なんじょう歴史文化保存継承事業では、2012（平成24）年度以降、その成果として6冊の書籍を刊行してきた。一方、戦後史調査事業がこれまでの事業と異なる点は、「書籍の発刊を待たず、聞き取り調査の完了後、速やかに原稿化してなんじょうデジタルアーカイブ¹で公開する」という方針をとっていることである。これは、鮮度の高い情報を可能な限り早くインターネットで公開することで、市民への歴史情報の提供を迅速化し、市民サービスの質を高めるとともに、情報公開を通じて新たな情報のフィードバックを得ることを意図している。

本年報では、本年度の聞き取り調査に基づいて作成された調査レポートを掲載する。なんじょうデジタルアーカイブ上では、他にも調査レポートを公開しているが、紙幅の制約から本書には収録していないものもある。ぜひ、なんじょうデジタルアーカイブにアクセスし、併せてご覧いただきたい。

¹ <https://nanjo-archive.jp/>

戦後史（産業）聞き取り調査記録

話 者：西銘 一彦（にしめ かずひこ）さん

生年月日：1953年（昭和28）9月28日生まれ

出身地：知念村^{ちねん}字^{くたか}久高

キーワード：漁業、久高島、八重山、カツオ漁、マグロ漁、イカ漁、漁業協同組合

生い立ち、家族

- ・私は1953年（昭和28）、知念村の久高島生まれです。父の西銘順昌^{にしめじゅんしょう}は1920年（大正9）生まれ、屋号は〈三男^{サンナン}ミー〉です。母の内間ムメ^{うちま}は1919年（大正8）生まれで、生家の屋号は〈前大里^{メーウプラト}〉です。両親ともに久高島出身です。
- ・私は6人きょうだいの4番目で次男として生まれました。

父・西銘順昌

- ・父の順昌は漁師でした。戦争中はニューギニア辺りに出征していたようですが、戦時中のことはほとんど聞いたことはありません。
- ・父は戦後、久高島に戻るとすぐに八重山へカツオ漁に行きました。戦前、戦後すぐまでは久高島の男性の多くが中学校を卒業すると、カツオ漁をするため八重山に渡ったようです。女性たちもカツオ節の工場に勤めるために八重山に行ったようです。
- ・父は私が小さい頃は年に一回くらいしか島に帰ってくるのができなかったので、祖父の西銘^{にしめ}亀^{かめ}のことを父親だと思っていました。祖父は1898年（明治31）生まれ、1963年（昭和38）に病気で亡くなりました。生家の屋号は〈前西銘^{メーニシミ}〉です。小さい頃、祖父が網でエビを獲っていた記憶がかすかに残っています。
- ・父は私が9歳くらいのころ（1962年頃）に八重山から引き揚げてきました。その頃には、八重山方面のカツオ漁も下火になってきていて、そのために父は島に戻ったようです。
- ・島に戻った父は、すぐサバニを入手して、おもに島の周辺で素潜り漁をしていました。獲物はイラブチャー（ブダイの一種）、アカジンミーバイ（ハタの一種）、タコ、クブシミ（コブシメ、コウイカの一種）などです。
- ・素潜り漁のほかに、父は夏場の6月～8月はトビイカ漁をすることが多かったです。天気の良い、凧の日の夜に本島の灯りがかるうじて見えるくらいの沖までサバニを出して、灯油ランプの灯りでイカをおびき寄せ、集まってきたところをカギで引っ掛けて獲ります。そのため、父の服やサバニは墨だらけでした。
- ・父は素潜り漁で獲った魚やタコ、クブシミ等を島内で売っていましたが、イカだけは知念まで売りに行きました。字知念の浜まで一緒にサバニに乗って行ったことがあります。
- ・父がトビイカ漁から帰ってくると、いつも母が迎えて片付けを手伝っていました。しかし、私

が中学2年生の夏、私の弟（四男）が入院したので、母はその付き添いで不在になりました。そのため私が2週間くらい父の漁の迎えと片付けをすることになりました。イカの墨だらけになった船内を洗うのですが、父は元々気性が荒く、厳しい口調で指示するので、あまりいい思い出はありません。

母方の祖父・内間多千

- ・母方の祖父、^{うちまたせん}内間多千は1896年（明治29）生まれで、屋号は〈^{メーウプラト}前大里〉です。多千は久高尋常高等小学校を卒業後、八重山にカツオ漁に行きました。宮崎県の「ハツタ¹」という漁業会社が八重山でもカツオ漁船を操業していたようで、多千はその船に乗り組んでいました。
- ・小浜島にはカツオ漁の基地があったようで、私の母ムメ（多千の長女）は幼少期に小浜島で過ごした時期があったそうです。母は晩年、テレビに映る小浜島を観て懐かしんでいました。²
- ・多千は後に独立し、石垣島の^{あらかわ}新川に移り住み、カツオ漁船とカツオ節工場「高津」の経営を始めました。
- ・次第に多千の漁業経営は軌道に乗り、ついには八重山で納税額が2位までになったそうです。私の母ムメは八重山時代、裕福な幼少期を過ごしたようです。
- ・その後、久高島系統の「^{フクヂ}福治」、「^{アンブク}安福」というカツオ漁会社が出来て、多くの久高島の人々が八重山に渡りました。父の順昌は婿でありながら、多千の「高津」の船には乗らず、^{いとこ}従兄弟の船に乗りこんでいたそうです。
- ・私の母ムメは多千の最初の子もで、下に妹、弟がいました。ただ、多千と私の祖母マカ（ムメの母）は離婚したため、ムメを含む子ども3人と祖母は久高島に帰ってきました。
- ・その後多千は再婚し、5人の子どもが生まれました。しかし昭和30年代に入ると、八重山のカツオ漁は下火になり、多千は家族とともに昭和30年代末には八重山から引き揚げて、那覇市松川に亡くなるまで住んでいました。

高校進学、県外での仕事を経て、漁師へ

- ・1969年（昭和44）、私は久高中学校卒業後、久高島を出て県立知念高校（与那原町）に進学しました。当時、私と同世代の久高島の多くの男性は、漁師になる意識はなかったと思います。
- ・1年後くらいから高校の数が一挙に増えて、一浪してもほとんどが本島の高校へ進学するようになりました。

¹ 与那国島を拠点にした、宮崎県出身の発田貞彦の会社のことと思われる。与那国町史によると、「発田は久部良に製氷施設を具備する近代的な鰹節工場を設立し、最盛期の1935年（昭和10）には漁船23隻（うち専属13隻）漁民150人、工場従業員50人を擁し、年産額は20万円に達していた」という。（与那国町史編纂委員会編『与那国町史 別巻I 記録写真集』与那国町役場 1997 320頁）

² 小浜島は太平洋側、東シナ海側へ行き来するのに立地条件が良く、周辺の海ではカツオ漁の餌として必要なジャコが捕れた。大正期の末ごろからカツオ節工場やカツオ会社が複数建ち、そこを本拠地としてカツオ漁が盛んにおこなわれ、沖縄本島の漁民が集まって集落を形成するまでになった。（竹富町史編集委員会編『竹富町史 第三巻 小浜島』竹富町役場 2011 158頁参考）

- ・知念高校在学時は那覇市首里儀保町の長屋に住んでいました。儀保町からは東陽バスで知念高校まで通っていました。儀保町では、私の祖母（順昌の母）、6歳年上の兄（長男）、2歳年上の姉（次女）と一緒に生活しました。兄は琉球大学の夜間部に通いながら沖縄電力³に勤めていました。とても勉強家で国家資格も持っていたようです。
- ・高校は2年生のときに中退しました(1971年頃)。経済的な理由ではなく、学校生活に行き詰まっていたからです。
- ・私は子どものころから手先が器用で、モノづくりが大変好きでした。建築家になりたいという夢があったので、建築家のある工業高校に進みたかったのですが、長兄と中学校の先生に普通科への進学を勧められました。そこで、知念高校の普通科に進学したのですが、私自身の目標とのズレから勉強に身が入らず、成績は落ち込んでしまい、ついには退学しました。
- ・その後、東京に行き様々な仕事をしましたが、器用さが災いし、一生の仕事を見つけることが出来ませんでした。そして、身内にも自分の居所さえ知らせないこともありました。
- ・そんな折、たまたま東京に遊びに来ていた、漁船乗りをしている久高島出身の先輩に出会いました。その先輩は私が海を大好きであることをよく知っており、船に乗るよう誘われました。そこから、一年間遠洋漁業の漁船、大王丸に乗りました。
- ・大王丸は西銘順治⁴の弟が経営する企業の船でした。静岡県やいづの焼津港を拠点に、遠洋のカツオ漁を行う漁船で、船は360トンもあり、南洋群島⁵まで航海できる規模でした。
- ・7年間、焼津の船に乗った後、御前岬市の船にも1年間乗りました。そして同じ静岡県しみずの清水港で、カツオ船やマグロ船を乗り換えながら、数年間を過ごしました。乗った船が海洋調査船として水産庁に雇用され、私は一等機関士としていい給料を貰っていた時もありました。
- ・清水時代には、辛く悲しい思い出もあります。それは旧知の方が乗船した海洋調査船「へりおす」が、北海道まで



西銘さんが乗船していた漁船のカツオ漁の様子
(西銘一彦さん提供)

³ 沖縄電力（株）は1972年5月15日、沖縄の日本復帰に伴い、沖縄振興開発特別措置法に基づく特殊法人として前身の琉球電力公社の資産を引き継ぎ設立された（沖縄電力五十年史編纂事務局編『沖縄電力五十年史』沖縄電力株式会社 2023 68頁）。西銘さんの兄が入社したのは復帰前ごろであったため、入社時は琉球電力公社だった可能性もあるとのこと。

⁴ 西銘順治（1921-2001）は政治家。与那国村（現・与那国町）生まれ。那覇市長2期（1962-1968）、衆議院議員当選4回、沖縄県知事3期（1978-1990）。順治の父・西銘順石は久高島出身で、与那国島やパラオでカツオ漁船を操業した。

⁵ 太平洋西部の赤道以北にある諸島群で、マリアナ・パラオ・カロリン・マーシャル諸島をさす。第一次世界大戦後に日本の委任統治領となり、第二次世界大戦後はアメリカの信託統治領となった。

の処女航海の途中、福島県の相馬沖で沈没した事でした〔この海難事故では船長、機関長他乗組員2人調査員5人の9人全員が亡くなっている〕。「へりおす」は出港前、清水港で私が乗る船と並んで停泊していました。そのとき「へりおす」の機関長だった佐々木豊蔵さん（通称「豊さん」）から「へりおす」の乗船を誘われたのですが、私は乗っていた「第五十二海王丸」が水産庁に海洋調査船として徴用されたばかりで、すぐ下船する訳にもいかず、次の航海から一緒に乗る約束をしたところでした。

- ・ところが私が先に出航した1週間後の船上で、共同通信のファクシミリで「へりおす」の海難事故を知り、大きなショックを受けました。事故で亡くなった豊さんは、私が利用していた焼津市の喫茶店のママさんのご主人で遠洋マグロ船上がりでした。私は航海を終えて、お見舞いのため豊さん宅を訪れたところ、逆にママさんから「西銘さんも死なせるところだった」と謝られ、悲しかったことを覚えています。
- ・海洋調査船「第五十二海王丸」では小笠原諸島あたりや、太平洋の赤道周辺、パラオやポナペ（ポンペイ）、ハワイ等にも航海しました。パラオでは日本語が通じたことに驚きました。ポナペでは沖縄出身の女性がエージェントをしていました。ハワイでは、現地の沖縄系の人に「あなた沖縄の人でしょ」と声をかけられたこともありました。私の顔を見て沖縄出身に違いないと、すぐに分かったそうです。

久高島に帰る

- ・静岡で漁船に乗っていた34歳の頃（1987年頃）、久高島と佐敷町の馬天港ぼてん間に新しく高速旅客船が就航するから、その機関士をやらないかと声がかかりました。私は20代後半に「乙種一等機関士」の免許を取得していました。
- ・機関士免許だけでなく、船舶操縦免許も必要になったので、高速船を建造していた広島県のおのまち尾道市で艤装⁶中、「一級小型船舶操縦士」免許取得の合宿があったので受講し、免許を取得しました。
- ・久高島に帰り、内間新三うちましんぞうさんが代表社員を務める久高海運の高速船に乗りました。
- ・それまで、久高～馬天港間の定期船は、日に一便だけでしたが、高速船は日に三便運航し、島の人々に大変喜ばれました。
- ・ただ、高速船にはレーダーすらなく、遠洋漁業で経験を積んできた私には驚きでした。
- ・当時、馬天港のチケット売り場から船乗り場までかなりの距離がありました。そのため、定期船の出向間際に乗る乗客はチケットが買えず、現金で乗船する客もいました。
- ・後で、乗客数とチケット、現金を照合すると合わず、不正があることに気が付きました。直ちに、沖縄離島海運振興株式会社にその旨を報告し、港内の船乗り場に近い場所にチケット売り場を設けると同時に、現金での乗船も辞めさせました。
- ・高速船の運航の合間には、素潜り漁をしていました。子どもどころ、よく島の周辺を潜ってい

⁶ 船体に各種設備を装備することを艤装という。

ましたが、その頃の感覚もよみがえり、また漁に出たくなりました。

- ・高速船には2年近く乗りました。それから2年ほど素潜り漁をやって知念村漁業協同組合に加入し、漁船を購入することにしました。最初に建造した船が1993年（平成5）に出来た5トンの^{かいけいまる}海恵丸でした。最初の船から4隻の船を乗り換えながら、引退するまでの約30年間、おもにマグロ漁、イカ漁をしてきました。



西銘さんの漁船「海恵丸」。
写真は1998年12月に撮影された。（西銘一彦さん提供）

結婚、子どもの成長と漁場の展開

- ・久高島に帰ってから、久高小中学校の先生たちと懇親会がありました。そこで、当時学校に勤めていた現在の妻と知り合いました。
- ・私が38歳のとき、妻と結婚しました。子どもは3人の男の子に恵まれました。長男だけは久高島に住んでいるときに生まれましたが、一年後には佐敷町に引っ越しました。
- ・久高島を拠点に漁をしていましたが、燃料補給や漁具の整備等の仕事がしにくく、効率の悪さを感じました。そこで、^{さしき}佐敷町の^{つはこ}津波古に引っ越し、船は漁協のある知念村の^{うみの}海野漁港に置きました。
- ・5トンの船で漁を続けていましたが、漁獲物の保冷設備は水氷で、船の規模もセイイカ（ソデイカ）漁をするには、航海日数、積載量に問題がありました。そこで私は、息子たちの将来のためにも、もっと漁業収入を得る必要があると考え、規模の大きい船に乗り換えることにしました。
- ・二代目の船、第五海恵丸は14トンもあり、冷凍設備も充実した船になりました。遠洋漁船時代、機関士をしていてイカ類の鮮度保持に慣れていたこともあり、新しい船を探す際は補助機関が付いている船を求め、動力で冷凍機が運転出来るようにしました。
- ・夏は集魚灯を利用したマグロ漁、冬はセイイカ漁というサイクルで漁をしてきましたが、船の規模を大きくしてから、セイイカ漁の実入りはよくなりました。
- ・セイイカ漁が始まって間もなくは、沿岸で獲るのが主流だと思われていましたが、私はセイイカが沖合でも獲れることを知っており、漁場を沿岸から沖合へと展開していきました。約30年の間に、だいぶ沖まで広がったと思います。大東島沖100海里の海域まで行きましたが、他船と漁場が被ることはあまりありませんでした。
- ・セイイカは「旗流し」という漁法で獲ります。旗竿の下、500メートルの深海に潜むイカを、スッテを使って釣り上げる漁法です。たまに旗竿を消失したり、冬場の漁なので海が^{しげ}時化て辛いと

きもありました。

- ・セーイカ漁に比べるとマグロの漁場は、ほとんど変わっていません。
- ・漁に出ると、数日間海上で寝泊まりしながら漁をします。夜に家を出ることもあるのですが、ある日いつものように出港準備をして家を出ようとする時、不意に幼い息子が私の服の裾を掴んできました。それが切なくて、子どもたちに早く会うために頑張って漁をして、できるだけ短い日数で帰るようにしていました。

知念村漁業協同組合

- ・久高島から海野漁港に拠点を移して仕事はしやすくなったのですが、ひとつ不利になったこともありました。それは知念村に住所がないのでいくら水揚げしようと、漁業協同組合の定款上、正組合員になれないことでした。知念村外に住む者は、全て準組合員となり、総会等では議決権がありませんでした。
- ・知念村漁業協同組合は1971年（昭和46）に設立されました。おかげで、いろんな体制、仕組みや設備が整って、販路もできました。それまでは、久高島で魚を獲っても販路が狭く、思い切り漁業ができなかったように思います。
- ・漁獲物を漁協のセリにかけると、その代金が翌日には漁協から漁業者に支払われ、漁協はセリ落とした小売業者や加工業者など（買受人）から代金を回収します。
- ・漁協ができてからは燃料タンクや製氷などの設備が整い、漁獲物の販路ができて、漁業をするには最適の環境になり、島の後輩たちも漁業を志すようになったと思っています。
- ・私は知念漁協の組合長を1期、理事を2期、監事を1期務めました。本業はおろそかになった気がしています。
- ・久高島では、戦前から昭和40年代の初め頃まで、漁業協同組合がありました。漁協の看板が掛けられていたことを少し覚えています。漁業活動をしている様子もなく、おそらく長期間休眠状態にあったと思われます。組合長をしているときに、そのことが気になり、調べたところ戦前の役員名簿もあり、スーパーまで経営していたことも判明しています。後に、久高島の漁協が自然消滅となり、知念漁協が立ち上げられたと聞きました。

引退、今後の漁業について

- ・遠洋漁業をしていた頃の無理がたたったのか腰を痛めて、3年前くらいから徐々に漁業を辞めることを考えるようになりました。
- ・2023年からは漁に出なくなり、最終的に2024年（令和6）には船（4隻目）を売却して完全に引退しました。
- ・日本では漁業資源が減ってしまったと感じます。日本は漁業技術が高く、効率よく獲るのですが、稚魚、幼魚まで獲りすぎてしまったのではないのでしょうか。温暖化も影響しているのでしょうか。
- ・セーイカ漁は沿岸から沖合へと漁場を拡げていきましたが、この30年間、漁に携わってきたが、

その海洋資源が減っていることを実感してきました。漁業者の皆さんは、もっと危機感を持たなければならないと思います。

- ・ 漁業の担い手や志す者も、なかなかいなくなりました。私の子どもたちに漁業を勧めることはできませんでした。漁獲物の販売価格は上がらず、燃料費は高騰、海洋資源は減少の一途で、このままでは漁業の将来はないと考えていました。
- ・ 沖縄の漁業は新しい魚種や漁法が、これから生まれる可能性は少なく、獲るだけの漁法から更なる制限をする必要があると思います。海洋資源の保護をしなければならないことは明白であり、同時に、養殖技術ももっと発達させる必要もあります。

(2025年 事務局による聞き取り)

2025年度 沖縄国際大学経済学部経済学科 専門演習 ～南城市の戦後産業調査～

小濱 武 沖縄国際大学経済学部 准教授
(「戦後史 産業」専門部会長)

沖縄国際大学経済学部経済学科・沖縄経済史ゼミ（担当：小濱武）では、2024年度から南城市教育委員会と連携しながら、南城市の戦後産業調査を実施しています。今年度は、旧知念村を対象とし、地域の基幹産業を担ってきた企業の歴史をとおして地域の経済の歩みを考えることをテーマに、フィールドワークを計画しました。学生たちは、それぞれの関心に応じた企業に依頼して、創業の経緯や事業の変遷、今後の展望などについて聞き取りを実施しました。

それぞれの企業の歴史を辿る中で、学生たちは、創業者が抱いた「人々の健康に役立ちたい」、「本物の島豆腐を届けたい」、「地域の資源を活かしたい」といった強い使命感や、そこから生まれる卓越した行動力を学ぶことができました。また、時代の流れや環境の変化（温暖化、物価高騰、観光客の激減など）に対し、「決まったことをやるんじゃなくて、今現状どういったのが良いのかを考えながら、それに対応していく」、「お客様の声を常に聞きそれを落とし込んで形に変えていく」という、柔軟で挑戦的な経営姿勢が、南城市の産業を支えてきたことを実感しました。特に、沖縄の伝統的な食文化を守ることの難しさや、地域に根差した企業として人材不足やインフラ整備といった課題に直面しつつも、地域との連携や新しい試み（セグウェイの活用、ノニ豚の活用など）を通して未来を切り開こうとする企業努力に、多くの刺激を受けました。

ここに、この取り組みの中で学生たちが学んだ南城市の戦後産業史に関するレポートをご紹介します。これらの調査を通じて、学生たちはフィールドワークの基本を習得するとともに、沖縄の伝統と未来を担うことの意義と課題について深く考える貴重な機会を得ることができました。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、ご多忙にもかかわらず快く聞き取り調査にご協力いただきました各企業の皆さま、および多大なるご支援を賜りました南城市教育委員会の皆さまに、心より感謝申し上げます。

南城市レポート【株式会社 仲善】

チーム A（川満凌也、島袋史野、外間大智、森根凜）

1. はじめに

琉球王国時代の沖縄では、今の中国から伝わったものも含め、健康にいい食材や食品が数多くありました。しかし残念なことに、琉球王国の廃止や西洋医学の普及等に加え、時代の流れと現代の伝統食離れにより、今日ではそれらの食材や食品を知っている人・実際に食べている人が少なくなっています。

私たちは、沖縄の素材（クミスクチン、ウコン、グァバなど）を活用した健康食品を50年以上にわたり作り続けてきた農業生産法人（株）仲善さんに注目しました。同社を訪れ、営業統括部長の宮城直樹さんにお話を伺いました。

2. 株式会社仲善の歴史

―事業概要

株式会社仲善は、1968年に沖縄の健康素材を加工して販売する会社として設立されました。創業者の「皆さまの健康に少しでもお役に立ちたい」という思いのもと、今日に至るまで活動してきました。創業当初のクミスクチンの販売から始まり、その後、ウコンやグァバなどの健康素材を活用した商品の開発、販売へと事業拡大しました。現在では150種類以上の自社商品を開発、販売しています。

―創業の経緯

仲善創業のきっかけは、創業者である仲本勝男さんの闘病経験でした。仲本さんは、高校を卒業後、自動車メーカーで営業の仕事をするかたわら、労働組合の委員長も務めていました。20代後半の頃は大変な時期で、過労とストレス、10代の頃に痛めた古傷が重なり、腎臓の病を思い、つらい入院生活を送っていたそうです。入退院を繰り返していた頃、腎臓にいいとされるクミスクチンという薬草を配合したお茶を飲んだところ、じわじわと腎臓に効いてくる経験をしました。その経験をもとに、この感動を同じ悩みをもった人たちに伝えたいと思い、創業に至りました。クミスクチンはシソ科のお茶で、利尿作用があり、腎臓関係に効果があります。仲本さんは仲善を立ち上げてクミスクチンの販売を始め、後にはウコンや、グァバへと取扱いを拡大していきました。

―ウコン市場を開拓

健康素材のうち最も代表的であるものの一つがウコンで、今日では全国のコンビニやドラッグストアなどで販売されており、ウコンドリンク一つとっても市場規模は50億円を超えると見られます。このウコンに最初に着目し商品化したのが、仲善でした。ウコンは日本でも平安時代中期には、染料や生薬として知られていました。琉球王国時代の沖縄では、重要な交易品であった

ことから、専売制が敷かれていました。当時ウコンを栽培していた場所が現在の南城市、その当時は知念間切、佐敷間切と呼ばれていたところでした。現在、知念城跡の近くに「鬱金（ウッチン）発祥之地」と彫られた石碑が立っています。

仲善は、そのようなウコンを「うっちん」（沖縄方言でウコン）として商標登録し、56年前から販売しています。しかし、当初は、本土ではウコン自体の知名度が低かったこと、商品名が方言のため全然通じなかったこと、沖縄の素材の情報が全国に知られていなかったことなどで、販売は苦戦したそうです。

当初はウコンを生の状態のウコンで販売していましたが、なかなか観光客の目に留まりませんでした。そこで、次はスライスにして、次は乾燥させてスライスして、粉末にして、固めて錠剤にして…と、消費者のニーズに合わせて販売方法を変えていきました。宮城さんが入社した20年ほど前には、お土産として空港などでウコンのお茶として販売していました。

ーコロナ禍の影響

2020年からのコロナ禍によって、仲善の事業は大きく変化しました。特に影響が大きかったのは、仲善が経営していたアジアン・ハーブレストラン「カフェくるくま」（現在は閉店）です。

「カフェくるくま」には、コロナ前まで年間12万人くらい来店がありました。2001年にオープンした当初は本土からの観光客が7割を占め、残りは主に県民でしたが、コロナ禍前には、外国からの観光客が来店客の7割を占めるようになっていました。特に、台湾や韓国からのインバウンドで訪れる方が多く、コロナ禍前にそれらの地域・国との間の飛行機の便数が増えて飛行機代も安くなったことが関係していたと思われます。

ところが、コロナ禍による緊急事態宣言や外出自粛、飛行機の減便などによって、観光客が激減し、「カフェくるくま」も売上が低迷しました。今でも回復せず、コロナ前の半分程度の年間6万人の来客にとどまっています。

ー今後の展望

仲善では、今後の事業展望について、これまで中心的な販売商品であったウコンを自社栽培にして、生産・加工・販売まで手掛けていくことを考えています。ウコンだけでなく野菜も含めて農薬などを使わず栽培し、「カフェくるくま」で使用したり営業先のファーマーズマーケットや道の駅でも販売したり、また、インターネットでの通信販売も検討しています。

また、地域の農産物や魚介類などを販売する道の駅のような施設で温泉やキャンプ場も併設しているところが岐阜県にあり、仲善はそこをモデルにしています。例えばノニ茶を作る際に出るノニの種や皮などの副産物を利用して豚の飼育に活用し、さらにその豚肉を「カフェくるくま」のカレーで用いています。また、ノニ豚を使ったしゃぶしゃぶセットやソーセージ、チャーシューも販売しています。ソーセージに入っている島唐辛子も仲善が作ったものです。マンゴーやスイカなど栽培している他の農家とも連携して、販売できないようなものをスムージーにして、さらに仲善のウコンやグァバの葉、薬草などを入れた製品なども作れないか考えています。

そのほかにも、ライチの栽培や県産茶葉の生産にも意欲があります。

3. おわりに

今回、私たちは仲善の歴史や創業までの経緯・仕事を行う上での企業理念などについて詳しく伺いました。仲善には、創業者の仲本勝男氏の肝臓を患い「クミスクチン」と出会い治った経験から色々な人に健康食材を届けたいという気持ちがあります。このような背景がある仲善は「健康食品や自社の施設を活かした事業を通して、健康と人々の笑顔あふれる社会づくりに貢献する」「社員と社会に健康と笑顔を提供する企業」といった企業理念を掲げ自分たちの事業で多くの人に幸せに笑顔にすることを一番に考えてこれまで色々な商品開発や事業拡大に取り組んできたとわかりました。実際に話を伺った宮城さんが「お客様の声を常に聞きそれを落とし込んで形に変えていくことは大事にしている」とおっしゃっていたようにお客様のことを一番に考えている素敵な会社でした。

これからの仲善は今使っている素材を自社栽培に切り替えていきたいと話をしてくれました。実際にノニを使った後の種や皮を使い豚の飼料にする取り組みをしてその飼料で育った豚も商品として扱っています。仲善の会社のスペースを使い規模は大きくないものの沖縄で育てられそうな素材を自分たちで実際に育てていました。沖縄の温暖な気候や気温を活かし色々な素材を育て沖縄県内外にその魅力を広く伝えたいという気持ちがとても強く伝わって来ました。沖縄県内外に沖縄の素材を使った健康食材や商品を伝えてきた仲善は多くの人々を笑顔にし、これからの健康で元気な社会を作っていくための大きな意味を持つ会社であると感じました。

最後になりますが、本調査に関わってくれた農業生産法人（株）仲善・取材に応じてくれた宮城さんにはとても貴重なお話・お時間を使ってくくださったことをこの場を借りて厚くお礼申し上げます。



宮城直樹さん（株式会社 仲善）への聞き取り調査風景（2025年撮影）

南城市レポート【株式会社 なかむら食品】

チーム B（神田一世、喜納愛子、城間健太郎、仲村好生）

1. はじめに

豊かな自然や海に囲まれている南城市には、多くの食品業が存在します。その中でも今回私たちは、南城市だけではなく沖縄の食文化を支えている株式会社なかむら食品に注目しました。なかむら食品は創業 41 年で、沖縄豆腐（島豆腐）の「うちなーとうふ」「うちなーのゆしどうふ」の製造販売を手掛けています。初代から家族経営でやっていることも特徴です。私たちは、同社・広報担当で、創業者の仲村正雄さんの娘である金城あやのさんに話を伺いました。

2. 株式会社なかむら食品の歴史

—創業の経緯

正雄さんはもともとトヨタの営業をしていましたが、結婚後退職しました。その後、牛乳配達等をしながら生計を立てていましたが、病気になり退職。父親を戦争で亡くした正雄さんにとって、戦後の沖縄で安定した仕事を見つけることは容易ではありませんでした。そこで、子供 5 人を抱えて食べていくための手段として、豆腐を作ることにしました。沖縄の料理に欠かせない食品ということで、くるま麩と豆腐のどちらかで迷いましたが、豆腐作りの伝統が崩れ、途絶えていくことにとても不安があり、「だったら僕がやってみよう」と使命感を感じていたそうです。

当時は、豆腐を作って生計を立てていた人も少なくありませんでした。正雄さんのおばさんもかつて豆腐屋をやっており、その道具や場所もそのまま残っていました。正雄さんはそれを利用して、母親とともに豆腐づくりを始めました。冠婚葬祭など生活のあらゆる場面で豆腐が使われるため、需要は大きく、「持って行ったら即完売」という状況でした。南風原町から南城市まで毎日通いながら、夜中の 2 時や 3 時から豆腐を作るという厳しい日々が続きました。

—こだわりの豆腐作り

当時の作業場は狭く地窯で製造していた為、非常に暑い工場でした。もちろんクーラーもありませんでした。昔の沖縄はにがりになかったので、代わりに海水を使っていました。「海がきれいだから満潮になる時間に海水をとってきて、沸騰した豆乳が入った鍋にやさしく入れます。海水には塩もにがりも入っているから本当の自然の恵みで豆腐をつくることができましたよ」とあやのさんが教えてくれました。それをゆっくり固めていくことで、とても柔らかい豆腐ができるそうです。

正雄さんは、豆腐の生絞りにこだわっていました。日本本土では炊き絞りといって、一度大豆を炊いたものを挽いて、おからと豆乳にわけます。一方で沖縄の生絞りでは、生大豆を数時間水に漬け、すり潰して生のおからと豆乳に分けます。その豆乳を窯で炊き上げた後、鍋の中に移してにがりと塩を入れています。豆腐の濃度では炊き絞りの方が濃いですが、栄養価は生絞りの方が高いそうです。また、生絞りでは使用するにがりも全然違っており、正雄さんは「絶対に塩

とにがりを入れないと沖縄の島豆腐は作れない」と言っていたそうです。

大量生産の為の豆腐製造の機械をどのようにするかという事も、創業からの課題でした。正雄さんは営業が得意で、いろいろな人とのつながりがあり、その縁でパン屋さんの方が協力してくれました。工場まで来て地窯の温度を測り、何時間ごとにどういう温度変化なのか、にがりと塩を入れるときの温度はどうかなどを調べて、「この温度を目安に機械を探しに行きなさい」とアドバイスをしてくれました。当時、いったいどこに行けば機械を手に入れられるのかもわからない状況のなかで、正雄さんはいきなり東京に行きました。作業着のまま、ビックサイトという今でもいろいろな展覧会などが開催される会場に行き、機械を見て回ったそうです。そのとき正雄さんが考えていたのは、短時間で集中して炊ける圧力鍋のような機械で、それに近いような機械を見つけました。正雄さんは試しに、そこの会社に訪問し豆腐を作らせてもらいました。当時は日本本土では沖縄の豆腐は知られていなく、向こうの方からすると、こんな作り方で本当に豆腐になるのかというような作り方だったといいます。実際に豆乳が出てきて、それを正雄さんが見て「これならいける」と言い、借金して機械を購入しました。その後も改良を重ねて、いまの炊き窯として完成しました。このようにして完成させた自動製造ラインが認められ、正雄さんは1999年に、職域における創意工夫功労者として「科学技術庁長官賞」を受賞しました。

いまの沖縄の豆腐屋さんの多くは、日本本土で使われている製造機器をそのまま利用して製造しているそうです。「それは沖縄の豆腐みただけ豆腐ではない。本当の沖縄の豆腐というのは、生絞りでにがりと塩を使っていないと本当の沖縄の豆腐になりませんよってずっと言い続けているんです」と、あやのさんは言います。なかむら食品で使用している窯には、作り方一つ一つにこだわってその伝統を伝えていきたいという思いが込められています。

正雄さんの豆腐の味を決めるときには、同じ知念出身で帝国ホテルの元料理長でその後沖縄都ホテルの料理長も務めた、親川幸男さんの協力も得ました。南城市内の小さな商店を回って豆腐を売り歩くなかで、地元スーパーの榊丸大と交渉し、豆腐を置かせてもらうようになりました。最初は1丁とか5丁からスタートしましたが、バイヤーさんも驚くほどの売れ行きで、瞬く間に売り場を拡大させてもらいました。沖縄の人は豆腐にこだわっている方が多く、変なものをつくったら今でもすぐ電話が来るとあやのさんは言います。皆に見られているので手抜きは絶対にできませんが、その分こだわって作っているのが購入者に伝わると嬉しいそうです。コロナ禍でスーパーに豆腐を卸せなくなってしまったとき、首里のおばあちゃんから電話があり、「あんたたちの豆腐しか食べないんだよ」「実は私もお豆腐屋でね、ほかの豆腐は食べれない」と言ってもらえたことが一番だったとあやのさんは喜んでいました。

—今後の展望

2021年6月から、衛生管理が強化され、スーパーでの「アチコーコー」の島豆腐の販売が制限されました。スーパーでは、「アチコーコー」で店頭で置くなら2時間で撤去しなければならないところもあり、多くの豆腐屋では、「アチコーコー」での販売をあきらめました。なかむら食品でも、2時間しか置けない豆腐を作り続けることは経営上のリスクが大きいといいます。そ

れでも、「じゃあそれで無くしていいのか。先代の思いからくると、私たちはそういうわけにはいかないな」という思いで、「アチコーコー」での販売を継続しているそうです。

豆腐業界でも高齢化が進んでいて、あやのさん達が最も若い世代になっているそうです。そのなかで島豆腐という理念を崩さずに売り続けていき、これまでのようにスーパーで各家庭に買ってもらうという形だけでなく、観光客にも買ってもらえるような商品を作るよう展開していきたいと、あやのさんは語っていました。

3. おわりに

今回の聞き取り調査で「なかむら食品」の島豆腐に対する熱い思いをたくさん伺うことができました。お客様から「他のところの島豆腐では満足できない」と実際に言わせるほどの技術と思いが詰まっているなあと実感することができました。実際にいただいた島豆腐は、今まで食べたどのお豆腐より、良い塩加減でしっかりとした食べ応えがありとても美味しかったです。

私たちは、「なかむら食品」を通して沖縄の産業の実体や伝統を守らなければいけない大切さ・難しさをたくさん学ぶことができました。創業者である仲村正雄さんの「本物の島豆腐をお客様に届けたい」という思いから、それを追い求めて普段の作業着のまま東京に乗り込むという行動力から始まり、その熱意は次代にも引き継がれコロナ禍や激しい台風に襲われた時も、お客様に求められ続けて様々な窮地を乗り越えていき、モノづくり日本大賞優秀賞を受賞するまでに至りました。創業当時から常に島豆腐とそれを欲してくれるお客様のことを考え続ける「なかむら食品」の方々からモノを売ることの大変さを今回の調査で学ぶことができました。それに、実際に南城市の産業に関わっている方のお話を聞いている中で、人材不足やインフラの整備の課題がまだたくさん残っていることに気が付きました。これらの課題は南城市だけでなく沖縄全体で取り組んでいかないといけないと思います。内地企業が沖縄に次々に進出してきている現在、沖縄の伝統は薄れつつあります。次代の沖縄を担っていく私たちが伝統を守っていこうというプライドと、知恵を持って戦っていかなければなりません。沖縄をより発展させていくためにも、今回の「なかむら食品」の聞き取り調査を教訓にして、私たちのこれからを考えていきたいと思います。

最後になりましたが、本調査にあたり、インタビューを快くお引き受けいただいた「なかむら食品」の広報の金城あやの様に、厚く御礼申し上げます。



金城あやのさん(株式会社 なかむら食品広報担当。
写真右から2人目) 2025年撮影

南城市レポート【有限会社 板馬養殖センター】

チームC（伊野波柚希、玉城日奈、仲嶺慎人、仲本せり）

1. はじめに

南城市は沖縄本島南部に位置し、豊かな自然と海に囲まれた地域です。古くから農業や漁業が盛んであり、地域の資源を活かした産業が発展してきました。私たちは、そのなかでも養殖業に注目しました。今日の日本の水産業が高齢化や後継者不足、環境変化など、さまざまな課題に直面しているなかで、養殖業は、地域の特性を活かしながら持続可能な水産業を支える取り組みの一つとして期待されています。そこで、私たちは、南城市知念にある有限会社 板馬養殖センターを訪れ、代表の照喜名朗さんにお話を伺いました。

2. 「有限会社 板馬養殖センター」の歴史

ー創業に至る経緯

照喜名さんは、昭和54年（1979年）ごろから三重県にある志摩半島で真珠養殖を行っていた友人のところで働いたことがきっかけで、水産業に関わりはじめました。志摩半島の入り江はリアス海岸となっており、真珠養殖の他に海女さんによるアワビや伊勢エビなど海産物の採取も行われています。また、他に山の幸にも恵まれており、照喜名さんは、志摩半島の食べ物や居住にも魅力を感じていたといいます。

しばらくして沖縄に戻り、(有)板馬養殖センターに入社したのが昭和58年（1983年）のことでした。「1～2年くらいで三重県に戻ろうと思ったんだけど、結局戻りきれないで何十年もここにいてしまった」と照喜名さんは笑います。

養殖場は国の補助を受けて作られました。当時の沖縄は日本に復帰して10年ほどで、県外に比べて養殖業が全然発展していませんでした。いまの上皇さまが皇太子の頃に、当時の県漁連会長兼知念漁業組合長であった照喜名朝進と会話され、沖縄で困っていることはないかというときに養殖場の話が出たことによって、沖縄県内での養殖業の養成を進める流れになったそうです。その後照喜名朝進によって設立されたのが現在の板馬養殖センターです。

照喜名さんは2代目として会社を受け継ぎ、40年余りクルマエビなどの養殖を手掛けてきました。特別に実際の生簀を見せてもらいました。「プランクトンの中の状況を見ながら、海水の入れ換えをしている。餌であるプランクトンは決まっているわけではなく、プランクトンの種類によって、エビの飼育数によって入れ換えをしている」と、熱心に教えてくれました。また、養殖池には、2つの岩（三角岩「倉石岩」大小の岩）が見えます。岩は、養殖場を作る前からあり、地元の人たちのどうしてもこれだけは残してほしいという思いを受けて、現在もそのままにしているそうです。

ークルマエビについて

クルマエビは生き物なので、かなり環境に左右されます。特に最近は温暖化によって水温が上

がっているほか、もともと沖縄にいないような海藻や魚などが出てきて、クルマエビの飼育に悪影響を与えることもあるそうです。飼育が1年サイクルのため、何かあった場合にり返せるのは1年後にしか来ないという点でリスクが大きい商品だとも感じています。

板馬養殖センターでは、贈答用にクルマエビを生きたままお客様のところに届けるというやり方で好評を得ていました。ところが近年では、共働きなどで荷物を受け取れなかったり、貰ってもすぐに調理の時間を取れなかったりする状況がでてきました。さらに、宅急便の業者と何十年も連携して配送方法を築き上げてきたのに、ネットショップの台頭などによって宅急便の業者の業務が激増したことで、それまでのやり方が難しくなってしまったそうです。そこで一昨年からは、生きているエビを急速冷凍して真空パックに詰めたものをお歳暮用・贈答用として販売し始めています。クルマエビの自動販売機も始め、ユーザーやマスコミなどに取り上げられました。

—海ぶどうについて

板馬養殖センターでは、クルマエビと並行して海ぶどうも手掛けています。クルマエビは養殖を始めてから商品として並ぶまで半年もかかり、その間は収入のないまま、餌の代金や施設管理費などの億単位の経費を賄わなければなりません。以前はエビの価格が高かったため、そのようなやり方でも経営が成り立ちましたが、この40年ほどの間に物価高騰等の影響を受け、そういうわけにはいなくなりました。そこで、クルマエビの出荷がない夏場に収入を得ることの出来る海ぶどうも手がけることにしました。

海ぶどうを始めたのは一昨年でしたが、台風の影響によって成果を上げることができず、本格的に取り組むのは今年からといます。ほかにも、ヤギを飼って来客者が触れ合えるようにしたり、セグウェイに乗れる場を作ったりというチャレンジもしています。セグウェイは、従業員が養殖場内を移動する際にも使っているそうです。照喜名さんは、「決まったことをやるんじゃなくて、今現状どういったのが良いのかを考えながら、それに対応していく」と語っていました。

海ぶどうの消費先は、だいたい県内が8割、県外が2割ぐらいといます。県外では、琉球料理の店で使われるほか、全国のコストコなどのスーパーでも流通しているそうです。

—働き方について

板馬養殖センターでは、働き方にも工夫をしています。生き物が相手なので、土日休みというわけにはいきません。ただし、一般の会社のように朝8時から夕方5時まで勤務という形ではなく、自分たちで働ける時間帯を選択してもらっています。「用事とかそういったのはわからないから、そういった休みとかも自分でスケジュールに入れ込んで休みを取る。必ずしも土曜日曜が休みじゃなくてその本人が、孫を迎えに行くとか遊びに行かないといけないとか、何か休みを入れられないといけないときとかそれは任せている」というやり方によって、結果的に十分な数の働き手に来てもらっています。

—やりがい、今後の目標

仕事のやりがいについて照喜名さんは、「生き物というのは面白くて、やった結果が出てくるから何でもチャレンジする。もちろん、失敗することが多いんだけど、でも思ったらやる。それを心がけて頑張っていって、もたらすことのできた結果がやりがいにつながってる」と語ります。その上で目指すのが、儲かる会社を作ることです。儲かることで、若い人に集まってほしいといいます。クルマエビの作業では、池に潜ったり、餌をやったり、朝から収穫しなければならなかったりと大変なところもありますが、BBQをやったり、海ぶどうの摘み取りをしてここで食べたりなどの魅力を伝えることが今後の課題だと考えています。

3. まとめ

今回の企業史聞き取り調査にて板馬養殖センターの歴史だけでなく、照喜名さんの考え方や南城市との繋がりなどについても教えて頂くことができました。板馬養殖センターは、社員の働き方が自由で柔軟なのはとても現代的で、働き手の生活に配慮しているのだと感じました。セグウェイを活用して高齢者も効率よく働ける工夫は面白く、まさに「現場に合わせた働き方改革」だと思います。海ぶどう養殖やクルマエビ自販機、ヤギの飼育などのエピソードからも、時代に合わせた柔軟な経営や工夫が感じられ、照喜名さん自身が固定観念に囚われず挑戦し続ける姿勢が印象的でした。「もっとみんながいろんな知恵を出し合えばもっと素晴らしい南城市にできる」という思いからは、地域のなかに企業があるという側面を見た気がしました。

最後になりましたが、本調査にあたり、インタビューを快くお引き受けいただいた「有限会社板馬養殖センター」代表の照喜名朗様に厚く御礼申し上げます。



照喜名朗さん（有限会社 板馬養殖センター）への聞き取り調査風景（2025年撮影）

03. 普及・繼承事業



令和7年度 平和教育担当者連絡会

日時：2025年4月30日（水）15時30分～16時45分

場所：南城市役所 1階 保健センター

目的：

- ①学校現場における平和学習の課題に対し、文化課がこれまで蓄積してきた資料や取り組み事例等を紹介・周知し、改善の一助とする。
- ②学校現場における「平和学習の困りごと」について参加者間で共有する。

参加：19名（市内小・中学校教員、コーディネーター）

ファシリテーター：山口剛史氏（琉球大学教育学部教授）

内容：沖縄戦を学ぶための各種資料等紹介、平和教育に関する窓口紹介、グループディスカッション

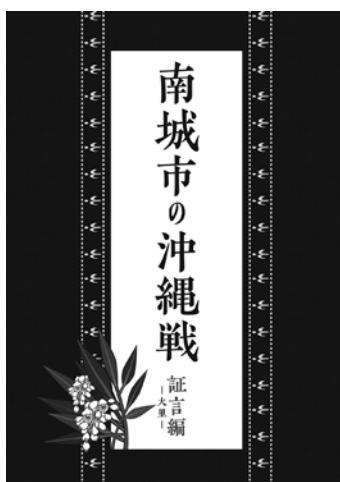
第1部 課題・背景と「連絡会」の趣旨（文化課）

1. 学校現場における平和学習の課題

- ①戦争体験者が減少し、「体験者の講話による学習」の継続が困難になっている。
- ②外部講師の人材が限られている。
- ③これまでとは異なる学習方法の模索が必要となり、教員の困り感が増している。

2. 文化課が主催する意義

- ①旧町村時代から沖縄戦調査を行い、調査成果・資料を蓄積している。
- ②学校の平和学習において、旧町村史や『南城市の沖縄戦 資料編』、『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』等の活用を推進したい。



左：『南城市の沖縄戦 資料編』
(2020年刊行)

右：『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』
(2021年刊行)

3. 連絡会の趣旨

- ①文化課の資料蓄積を学校現場へ接続し、平和学習の改善を支援する。
- ②旧町村時代から蓄積してきた資料の存在を周知する。
- ③取り組み事例や製作コンテンツを紹介し、活用方法の具体化につなげる。
- ④学校における「平和学習の困りごと」について参加者間で共有する。



文化課職員による解説

4. 刊行物と活用のポイント / デジタルアーカイブ

(1) 旧町村史

旧町村時代に刊行された沖縄戦に関する書籍について、各書籍の特徴や活用ポイントを解説した。※大里村は沖縄戦に関する本格的な調査を実施していない。

(2) 南城市史

南城市合併後に刊行された沖縄戦に関する書籍について、特徴や活用ポイントを共有した。

(3) なんじょうデジタルアーカイブの紹介

市教育委員会が運営するウェブサイト「なんじょうデジタルアーカイブ」について紹介し、旧町村史・南城市史の無料ダウンロード（一括PDF）が可能であること、ダウンロードページまでの順路を説明した。

5. 資料を活用した取り組み事例（3件）

(1) 沖縄戦体験証言を用いた教材開発ワークショップ

旧町村史や市史に掲載された戦争体験証言を活用し、授業で使える教材開発のノウハウ共有を目的に開催。参加者が作成したワークシート等は「なんじょうデジタルアーカイブ」で閲覧・ダウンロードが可能。

(2) 地域史を活用した平和教育実践の支援

通常授業（社会科）の中で「地域の沖縄戦」を学ぶ授業を実践。実践者はワークショップ参

加教員（当時馬天小学校6年生担任・玉城翔教諭）。授業構成の助言は山口氏、資料提供は文化課が担った。

(3) 南城市の沖縄戦に関する動画コンテンツ

「なんじょうデジタルアーカイブ」で視聴できる沖縄戦関連動画を紹介。学徒隊、学童疎開等のトピック解説、学校での平和学習の記録映像、戦争体験証言の朗読映像等がある。

6. 活用できる Web サイト

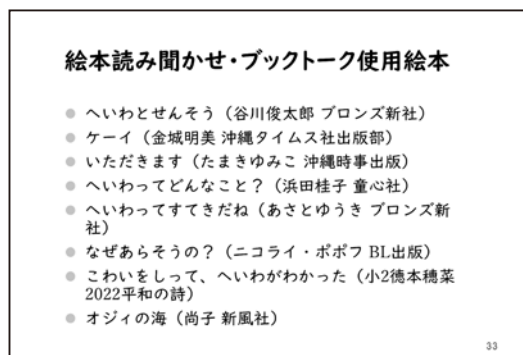
公共施設や民間が運営する、沖縄戦学習に役立つウェブサイトの一例を紹介した。

7. コーディネーター連絡

南城市教育委員会のコーディネーターより、地域人材活用や絵本読み聞かせ等の事例を紹介した。



コーディネーターによる解説



絵本読み聞かせの事例スライド

第2部 ファシリテーターのコメント、グループディスカッション、質疑応答

1. ファシリテーター（山口氏）コメント

(1) デジタルアーカイブの評価

- ・平和学習の活用事例や実際に使用した資料データがデータベース化されている点が評価できる。
- ・南城市出身者の体験を基に作成した45分授業対応のワークシートがあり、ダウンロードして活用・改良も可能。

(2) 「典型的な沖縄戦」を学ぶ難しさと地域性

- ・南城市には南城市特有の沖縄戦体験があり、旧町村の4地域でも状況が異なる。
- ・授業例（船越小学校）
 - ①体験者の証言を生徒と一緒に読む
 - ②体験者の当時の自宅場所を教える（教室から見える）

③証言から当時の状況を知る

④「自分だったらどうするか」を考える

・「地域の状況」「地域の人の体験」に焦点化して証言を用いることが教材化につながる。

(3) 平和学習の現状

・45分授業を体験者に委ねることは難しくなっている。

・現在でも体験を話せる体験者はいる。しかし、校区に合わせた話でなければ生徒には理解が難しい。

・体験者は話すことについてプロではない。事前に話の構成を検討することが重要（インタビュー形式等）。

2. グループディスカッション「今年度の平和教育での困りごと」

地域または学校ごとに教員とコーディネーターでグループを組み、困りごとを共有。ファシリテーター・文化課職員が巡回しコメントした。



グループディスカッションの様子

3. 質疑応答

Q. 全体集会の実施について

A. 山口

・小学校で1～6年一斉は推奨しにくく、低・中・高学年等の分割が現実的。実施する場合はプログラム構成や「雰囲気を作る場（合唱等）」の設計が重要。

・学年別の考え方として、低学年は怖がらせないこと。

1年生：文字化にこだわらず絵等も活用。

2年生：子ども視点の絵本。

3,4年生：地域学習。

5,6年生：総合学習での探究と接続。「平和」をテーマ設定している学校が多いと考えられる。そこで「ひめゆり学徒隊」、「白梅学徒隊」などを探求。その過程で平和特設授業を設けることが自然。

Q. 県平和祈念資料館の貸出資料の活用について

A. 山口

- ・「艦砲の破片」等の実物に触れる学習は、怖い映像より具体的実感につながる。
- ・疑問を持って行かないと見学だけでは学べない。案として①職員の解説 ②遺物に触れる
③展示見学

Q. 南城市の遺物について

A. 新垣

- ・大里南小学校建替時に発掘された旧日本軍遺物（仲志原壕に関するもの）がある。

令和7年度 南城市の沖縄戦学習教材開発ワークショップ

日時：2025年8月1日（金）13時～17時

場所：南城市役所 1階 大会議室

目的：当教育委員会が発刊した市史および旧町村史に掲載されている資料（証言など）を用いた教材開発

参加：17名（市内小・中学校教員等）

講師：山口剛史氏（琉球大学教育学部教授）、山城彰子氏（北中城村教育委員会）

内容：講師の解説、グループディスカッション、グループ制作

第1部 今年度の実践事例報告とワーク

1. はじめに（山口氏）

山口氏より、南城市で刊行されている『南城市の沖縄戦 資料編』（以下、『資料編』）、『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』（以下、『証言編』）のほか、未発表だった過去の聞き取り調査の内容をまとめた『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』（以下、『年報』）、南城市の沖縄戦にかんする資料等が閲覧・ダウンロードできる「なんじょうデジタルアーカイブ」（以下、「なんデジ」）を紹介。しかし、「せっかく刊行されても、うまく授業に活用できていない現状がある」とし、学校現場でなかなか地域史が活用されにくいことを述べた。

そこで、「南城市には南城市の沖縄戦がある。子どもたちの住んでいる地域のリアリティにそくした授業をつくってもらいたい。また、今日は教材のモデルを持ち帰ってもらい、改良してぜひ2学期に実施してみしてほしい」として、今回のワークショップの趣旨・目的を説明した。

2. 南城市内で実施した事例報告（解説：山口氏）

続けて、今年度に山口氏が南城市内（大里南小学校、船越小学校、佐敷小学校）で実施した平和授業の内容の一部を、以下の通り紹介した。

(1) 大里南小学校

実施日：2025年6月

学年：5年生

実施方法：5年5組に山口氏が入り、そこからリモートで全クラスに繋げて授業を実施。

内容：「平和の礎」データとワークシート

- ①南城市大里の「平和の礎」名簿を見ながら、字ごとの特徴を探す。各クラスに名簿を貼り出し、かつICTも活用した。なお、「平和の礎」名簿には、小字^{こあざ}、名前、性別、生年月日、死没地、死没年月日が掲載されている。
- ②戦没者数が多い時期、場所など、わかったことを発表（各クラス）。
- ③アメリカ軍はいつ大里村に入って来たかをワークシートに載せた地図で確認。

山口氏は、『資料編』に掲載されている米軍資料から、「どの部隊が、どの道を通って、いつに大里に入ったかを確認してもらうため、ワークシートに掲載した」と述べた。その理由について「『平和の礎』で確認した戦没地や戦没者数とどう関連しているかを発見させる。その後、住民体験記録を読むとイメージが変わる。また、その人の証言がこの地域の典型的なのかイレギュラーなのか意識することができる」とした。また、「本物の資料を使いながら地元の沖縄戦の実相に迫っていく。このように子どもたちに配れる資料を蓄積していくことができる」と述べ、他の地域にも転用することが可能だと話した。

南城市には文化課独自のデータがある。大里の場合、小字まで分かれている。

(2) 船越小学校

実施日：2025年6月

学年：3年生

実施方法：3年1組に学年全員が集まって授業を実施。

内容：ワークシートと「カンポウ」の実物をさわる。

- ①ワークシートに『玉城村史 六 戦時記録編』から調べた字ごとの戦没者数（一般住民のみ）のグラフを掲載。生徒に「一番多く亡くなっている字」を調べてもらう。
- ②亡くなった原因の1つとして「物体 X」（艦砲の破片）を紹介。生徒に実際に触ってもらい正体が何か考えてもらう。
- ③沖縄戦体験者の言葉「鉄の暴風」、「カンポウ ヌ クェーヌクサー（艦砲の食べ残し）」について解説。
- ④沖縄戦体験者はどのように生き残ったのか、その方法を考えワークシートに記載。

山口氏は、子どもたちが「なぜ？」と思えるようなデータがあると教材として活かしやすいと述べ、「船越の人がどうやって、逃げる・逃げないの判断をしたのか、そのために証言を読んでみよう」ということで授業を行った。紹介した証言は船越出身で、沖縄戦当時も船越に留まって生き残った。「その地域の特徴を捉える上で、証言は非常に有効である」と語った。

また、「戦後80年という契機に、市町村史や「平和の礎」データを活用して、子どもたちに地域の姿を見せるきっかけにしてもらいたい。南城市の文化課は「平和の礎」名簿データを持っている。ぜひ文化課に問い合わせ活用してほしい」と述べた。

3. ワーク：「平和の礎」データから市内地域ごとの特徴を探る

次に、配布資料から南城市の各地域の特徴を探るグループワークを行い、発見した特徴等について発表した。



各グループの発表内容

玉城グループ（太田）

- ・糸満で亡くなっている人数が多いところは4地域のうち大里地域。
- ・佐敷地域は糸満市より地域内で亡くなっている人数が多い。
- ・名護で亡くなっているのはなぜなのか。
- ・戦没者数が多い月は5月と6月だが、知念だけ4月が多い。
- ・以上の点を学習課題として子どもたちに見せられるのではないかな。

佐敷グループ（玉城）

- ・佐敷・知念地域は、大里・玉城地域に比べて糸満市で亡くなった人数が少ない。これは地域に留まった人が多かったのではないかな。
- ・佐敷地域は那覇で亡くなった人が多い。これは兵隊として動員された住民が那覇に行き、戦死した人が多かったのではないかな。調べてみると、4月終わりごろに那覇に動員されている。5月に一気に佐敷の死者数が増えていることと関連しているのではないかな。
- ・地図と絡めてみると子どもたちにもわかりやすいと思った。

大里グループ（宮城）

- ・なぜ名護で亡くなっている人がいるのかな。
- ・なぜ糸満に逃げたのかな。これは日本軍が糸満に逃げたから住民も糸満に行ったのではないかなと思った。
- ・日本軍の動きを調べてみるのもいいかもしれないと思った。

知念グループ（國吉）

- ・知念村は久原、知名が亡くなった人数が多い。これは日本軍がいて、兵隊として那覇まで連れて行かれた人も多かったと考えられる。そのため那覇で亡くなった人も多い。
- ・知念地域内で亡くなっている人も多い。山があり、避難場所を自分で造りやすかったことから地域内で亡くなった人が多かったと考えられる。
- ・玉城、具志頭、糸満で亡くなった人も少なからずいるので、南部に逃げた人もいることがわかった。

4. 南城市の沖縄戦の特徴について（解説：山城氏）

参加者の発表や疑問を受け、はじめに山城氏は、「戦没者グラフには様々な要素が数字に反映されている」と述べた。アメリカ軍の進行ルート、日本軍が配備されていた場所、一般住民の避難ルートと、戦没者グラフとどのように関連しているのかについて触れつつ、南城市の沖縄戦の特徴について解説した。

1945年（昭和20）3月～4月

- ・南城市地域に艦砲射撃と空襲があったのは3月23日から24日。
- ・自宅近くの防空壕に生活拠点が移る。食糧確保と家畜の世話のため自宅と防空壕を行き来する。
- ・艦砲射撃で知念、佐敷地域の人々が亡くなる。
- ・戦闘は中城や宜野湾等で行われており、南城市地域はまだ静か。

1945年（昭和20）5月

- ・アメリカ軍が運玉森（与那原と首里の間にある山）、雨乞森（与那原にある山）を5月22日に突破。南城市地域に米軍が侵攻（与那原は当時、大里村）。
- ・5月22日頃から南城市の人々は避難を開始。命の危険を感じるギリギリになるまで家を捨てない。
- ・大里地域の人々は玉城地域を通過して糸満に避難。
- ・佐敷地域は知念地域方面に避難する人が多い。山に自然壕があるためそこを目指す人が多いが艦砲射撃で亡くなる人も多い。
- ・米軍は知念半島に収容所を設置。家屋等は壊さず使用。捕虜は糸満、具志頭方面から連れてくる。
- ・玉城地域は日米の戦いのなかを逃げまどう。大里地域は日米が組織的戦闘をしている。知念半島に逃げた人は生存率が高まったと考えられるが、どの道を通ったかが重要。

1945年（昭和20）6月

- ・佐敷地域、知念地域を中心に収容所を設置。一般人、兵隊が収容される。
- ・集落の建物をそのまま使用したので生活インフラ（屋根のある家屋、井戸など）は整っている。
- ・米軍の計画が7月に変更。1945年7月には組織的戦闘は終わっているが、日米ともに戦争を終わらせるつもりはなく本土決戦に備えていた。アメリカ軍は本土上陸前に爆撃を行って

いる。「この世界の片隅に」という映画のなかで空襲のシーンがあるが、この飛行機は沖縄から飛んでいる。

- ・5月、6月に米軍は日本軍の飛行場（嘉手納、読谷など）をリフォームして使用している。

1945年（昭和20）7月～8月

- ・米軍は大規模飛行場だけでなく、小規模飛行場を複数建設することを考えた。佐敷あたりに飛行場建設を計画する。そのため佐敷地域の収容所にいた人々をヤンバル（現在の名護市、当時の久志村）に強制移動させた。
- ・久志村は人口が少ない地域。そこに大人数が移送されたため、食べ物（配給）がなく、生活インフラも整っておらず、多くの人が病気（マラリア、赤痢）に罹り亡くなった。マラリアは八重山マラリアよりは毒性が低いが、収容所にいた人々は健康状態が悪化していたため亡くなる人が多かった。

戦後

- ・アメリカ軍は馬天あたりの港を利用するために基地を建設していた。
- ・沖縄戦体験者は基地で働いた経験を持つ人が多い（特に佐敷地域）。

南城市の沖縄戦の特徴

- ①大里、玉城地域は日本軍と一緒にいたほうが安全と考え、一緒に本島南部へ行き、亡くなる人が多い。
- ②佐敷、知念地域は村内に留まっている人が多く、比較的被害は少ない。ただ、収容所の強制移動により、ヤンバルで亡くなる人が多い。



第2部 4地域それぞれの証言を読み、ワークシート作成

1. 戦争証言を使ったワークシートの作成について（解説：山口氏）

はじめに、山口氏より配布した証言の紹介とワークシートの作成方法について解説した。第1部で確認した戦没者グラフの資料と併せて、「実際の人の動きや心情、判断から学べる教材作りをする」とし、「証言のどこを読ませるか、子どもたちにどのような問いをするか、それらをどのように組み合わせるかをグループワークして、ワークシートを作成してほしい」と述べた。

2. ワークシート作成 (各グループ)

山口氏の解説後、各グループに割り当てられた4地域ごとの証言を読み、これらの証言を用いたワークシートを作成した。



3. 各グループの発表

作成後、各グループの代表者が発表を行った。ワークシートに用いた証言の特徴や取り上げた箇所、問いかけのポイントやねらいについて説明した。これに対し、講師の山口氏と山城氏がコメントした。各ワークシートのまとめは次のとおり。

①佐敷グループ 証言：知念芳子さん（新里）

タイトル：どうして芳子さんは、戦争体験を語るのを「恥ずかしい」と思っているのか！？

- ・証言の最後に「(ほかの戦争体験者の苦労を考えると、戦争体験を語るのは) 恥ずかしい。」という言葉が印象に残った。
- ・授業構成：事前に戦争のイメージを出し、戦没者グラフを読み取る。その後、証言を読む。

【問1】芳子さんはどうして生き延びることができたのか？

①食糧があった。②戦争の情報がいい意味でなかった。③湧水が近くにあった。④遺体を見たのは2体のみで激しい戦闘がなかったため心に余裕があったと想定。⑤日本兵、アメリカ兵を見ていない。

- ・収容所に収容された後の証言内容について、戦没者グラフと関連させて読ませたい。

【問2】 芳子さんの「恥ずかしい」とは、どういう意味だろうか？

- ・この発問はどのようにしたらいいか非常に迷った。子どもたちが考える「恥ずかしい」とは違うはず。芳子さんは「恥ずかしい」と語っているが楽ではなかったはず。
- ・芳子さんも戦闘に巻き込まれていた可能性があり、生死を分ける究極の選択もあったと考えられる。子どもたちには証言を読んで危険なところはどこか探させたい。

用いた証言：『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報 令和6年度』34頁～39頁 掲載

②大里グループ 証言：呉屋春子さん（福原）

タイトル：「人間としての感覚が麻痺する」～考えてみよう～

- ・戦争が二度と起こらないようにするために考えるための第1次としてワークシートを作成した。第2次（戦争が起きた歴史的背景を調べる）、第3次と続けていくことを想定。

【問1】「人間としての感覚が麻痺する」ってどんなこと？感覚が麻痺したと思うところに線をひこう！

- ・「人間としての感覚が麻痺する」情景が多く証言に出てくる。そこに注目して、なぜ「人間として感覚が麻痺する」のか、子どもたちに注目させたいと考えた。

【問2】なぜ感覚が麻痺するようなことが起きたのか、自分の考えを書いてみよう！

- ・「感覚が麻痺する出来事」とは何かを出してもらおう。おそらく子どもたちは自身の知識から出すと想定。それに対し「アメリカ軍が悪いのか、日本軍が悪いのか」と発問を広めていく。最後は「戦争がよくないこと」に繋げて終わりたい。

【質問】 山口氏

Q.「証言に出てくる「感覚が麻痺する」とは、どのような場面があるか？」

A. 沖縄戦が始まる前、沖縄に来た日本兵が「体が悪い日本兵に対して、立てなくなるまで殴る・蹴るの暴行があった」とあり、戦争が始まる前からそういったことがあった。また、戦争中には「死体を避け、あるいは踏んで逃げ回った」という場面が出てくる。そういった場面を読み取らせたい。

用いた証言：『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』330頁～334頁 掲載

③玉城グループ 証言：湧上洋さん（船越）

タイトル：人生は選択の連続！！

- ・生徒自身に場面ごとで想定してもらいたいと考え、証言を隠した。
- ・証言の始めに「昭和20年6月4日、私が捕虜になった日である。」とあるが、わざと捕虜になったという結果を提示しない。なぜこの証言があるのかを生徒に考えてもらいたい。

【場面①】証言者の家族構成、3月時点の行動を見せる。そのうえで、生徒自身が同様の場面にいる場合、どのような行動をとるかを自由に考えさせる。

【場面②】5月時点の状況、証言者の様子が描かれている。証言者は壕に隠れているが艦砲射撃を受けたという場面がある。壕に隠れているもののまだ前線ではなかったと想定。ここで「別の場所に逃げる」、「船越に留まる」、「別の選択をする」を生徒に考えてもらう。

【場面③】証言者は祖父、弟と壕に隠れているのだが、周りの避難民が徐々に糸満に逃げていく様子を見る。証言者は自分の家族と周りとの違いに不安になり糸満に逃げたほうがいいのではないかと祖父に話す。しかし、祖父は息子（証言者の父）の「壕から逃げるな」という言葉に従い、船越に留まる選択をする。そういった中、自分だったらどうするか選択肢を選ばせる。

【場面④】6月、周囲は次々と南部に避難する。証言に「自分の家族だけが残された」とあり、その不安な様子を想像しながら、自分だったらどうするか選択肢を選ばせる。

【場面⑤】合流した父が英語を話せたこともあり、米兵と話した結果、捕虜になって助かった。その後「戦没者グラフ」を見て気づいたことを書きだしてもらう。ここで生徒には「船越に留まったから助かったわけではない」、「様々な場面で色々な選択があった」ということを読み取らせたい。

用いた証言：『玉城村史 第六巻 戦時記録編』772頁～776頁 掲載

④知念グループ 証言：仲村徳広さん（知名）

タイトル：「徳広さんから見た沖縄戦」

【問1】担任の先生が兵隊になったり、避難壕を掘るように言われたりした時、あなたは どう思う？また、徳広さんはどう思った？

・証言者は当時小学校低学年。担任の先生が徴兵されたり、避難壕を造るよう指示を受けているが、自分だったらどう思うかを考えさせたい。

【問2】あなたなら壕から出る？

証言者は家族と知念地域内をあちこち避難している。避難壕にいるとき、逃げまどう馬、牛が地雷を踏んで死に、その馬、牛を取ろうとした避難民が銃撃を受けて亡くなる場面を見ている。また、壕から家に宿泊しようと戻って焼死した家族もいる。そのような状況の中、自分だったら壕から出るか、出ないかを考えさせたい。

【問3】日本兵と住民の関係 戦前、戦時中と どちらがう？

証言の最初に日本兵との関わりが描かれている。戦前と戦時中で日本兵との関りにどのような変化があるか、戦争を起してしまったがゆえに日本兵の心情に変化があったのではないかと想定して発問した。ただ、問い方が難しく悩んだため、発問の仕方は要検討。

用いた証言：『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報 令和6年度』52頁～54頁 掲載

●アンケート結果

Q1. 今回のワークショップの内容について

とても良かった・・・7人 良かった・・・4人

■主な回答理由

「語り部が減っていく現在において、教員同士で平和学習の進め方について意見交換できたのは、とても良かった。」

「自分の地域のことだけでなく、他の地域のこと、亡くなった場所や避難の仕方、アメリカ軍がどのように攻めてきたのかなど、多くのことを知ることができた。平和担当の先生だけでなく、6年生の先生も参加していたので、教えてもらいながら進めることができたのでよかった。」

「昨年度から継続して参加している。昨年度の内容+新しい資料もあり、学びの多い研修となった。昨年度の資料をもとに、特設授業（社会）を実施した。今回の新たな資料をもとに、次年度の教材づくりに活かさないか担当と相談している。」

「豊富な資料で南城市の平和学習について考えることができた。授業作りの時間なのか、発表の準備なのかがよくわからなかったので、来年度からは授業計画やどのように実施するかなどまで考えることができれば、実際の授業にも使いやすくなるのではないか。」

Q2. 今後、南城市の沖縄戦に関する資料（証言など）を活用した授業を実践したいと思うか

実践したい・・・8人 実践したいが自力では難しい・・・3人

■主な回答理由

「平和についての授業を取り組む際、どうしても沖縄戦全体的なことを進みがちになってしまう。自分たちが住んでいる場所を調べることで、沖縄戦の見方が広がると感じた。」

「低学年の担当が長く、平和教育に携わってこなかったことで、沖縄戦についての知識が少ない。どのようにしたら子ども達に伝わるのか、自分事として考えさせることができるのかなど、私には課題が多いと感じた。」

「昨年度、社会の授業で実践したので、引き続き行いたい。地域資料を使うと学習する内容と子ども達との距離が近くなり、より身近なものとして学習できるのが良いところだなと思う。また、南城市役所から佐敷町史などをもらったので、ぜひ活用したい。」

「学校の全体の意識を向けるためにも、講師をお呼びして授業の組み立て方法などを教えてもらいたい。」

令和7年度 親子向け歴史講座「南城市の戦争遺跡」

日時：2026年1月31日（土）13時～16時30分

場所：南城市役所2階会議室215（座学）、市内戦争遺跡（現地）

目的：南城市教育委員会が刊行した『南城市の沖縄戦 資料編』、『南城市の沖縄戦 証言編-大里-』を活用して座学とフィールドワークを実施し、「南城市地域の沖縄戦」について学ぶことを目的とする。

参加：8名

講師：なかほどかつや仲程勝哉氏（沖縄県立平和祈念資料館）

内容：沖縄戦全体及び南城市地域における沖縄戦の概要（座学）、市内戦争遺跡2カ所にてフィールドワークを実施した。

※当日は天候不良のため予定を変更し、講師による解説は移動中のマイクロバス内にて行った。

第1部 座学（文化課）

はじめに、沖縄戦の基本的知識についてクイズ形式で確認した後、沖縄戦の時系列と「根こそぎ戦場動員」について解説した。

続けて、南城市の沖縄戦について、当時は4つの村であったことを踏まえ、戦前・戦中における日本軍との関わりや、戦後の収容所生活、アメリカ軍による強制立ち退きについて解説した。また、村ごとに住民の戦没場所や戦没時期に特徴があることを説明した。



座学の様子

第2部 フィールドワーク（講師）

(1) 沖縄戦前の戦争遺跡（車内にて座学）

はじめに、講師より戦争遺跡の定義について「琉球処分以降の近現代の戦争にかかわる遺跡」であること、南城市内にも沖縄戦前の戦争遺跡があることを解説した。

ここでは市内で一番古い戦争遺跡である「海軍給水タンク（水溜）跡」（佐敷、1895年建設）のほか、「旧佐敷村忠魂碑」（旧佐敷村役場敷地内、1912年建立）、「旧大里村忠魂碑」（大里、1940年頃建立）、「中城湾臨時要塞」（与那原、1941年／知念半島、1942年）を紹介した。



講師による座学の様子

(2) ウローカー砲台跡（知念・久手堅／斎場御嶽内）

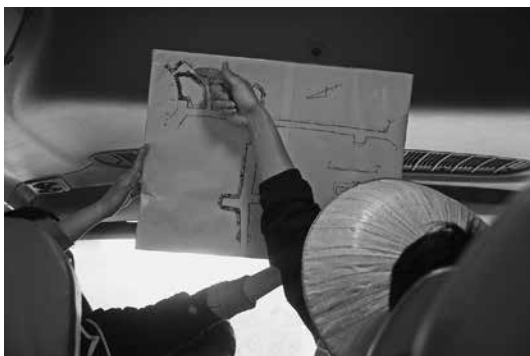
1942年（昭和17）に伊計島から移動してきた中城湾臨時要塞第二中隊（通称：吉岡隊）が構築したとされる。砲台2基と通路状の遺構、部屋状の遺構などについて講師より解説した。なお、「ウローカー」とは、斎場御嶽に参拝する前に身を清める泉のことで、この近辺に砲台跡がある。



ウローカー砲台跡の解説

(3) ウフグスク陣地壕（知念・久手堅／南城市地域物産館近く）

現在の南城市地域物産館に隣接するウフグスク内に構築された日本軍陣地壕。地元住民の証言によると、ウローカー砲台跡と同じく、吉岡隊が構築したとされる。当日はバス車内から壕口のみ見学と、壕内の概略図を用いて解説した。



講師による壕内概略図の解説



ウフグスク陣地壕の壕口

(4) 前川民間防空壕群（玉城・前川）

前川の住民たちが1944年10月10日の十・十空襲後に、雄樋川沿いに構築した防空壕群で、1つの壕を2,3世帯で協力して造った。当時の防空法や防空法施行令では、空襲時の火災に対する応急消火活動は国民の義務とされた。そのため、防空壕は集落の消火活動に行ける距離の場所に構築された。壕内は天井が低く、しゃがまないと移動できない。入口が何カ所もあり、沖縄県による調査（2014年）では59カ所の壕口が確認されている。内部が繋がっている壕や、お墓を拡張して造った壕もある。また、一部では集団自決の犠牲者が出ている。

当日は前川樋川へ続く階段沿いに構築されている壕口を見学した。2カ所の壕口には戦後の食糧不足のために養殖されていたアフリカマイマイの残骸が多く残されている。また、前川民間防空壕群と似た構造の防空壕として「安座真民間防空壕群」（知念・安座真）、「喜久村家の防空壕群跡」（久米島）などを紹介した。



前川民間防空壕の解説



前川民間防空壕の壕口

編集後記

南城市教育委員会文化課として、3冊目の『年報』を発刊することができ、一安心しています。

この編集後記をまとめている前週に、親子向け歴史講座「南城市の戦争遺跡」を開催しました。合併前の旧町村史を含む刊行書籍に「戦争遺跡」の項目はありましたが、一般向けにフィールドワークを実施したのは今回が初めてです。当日はあいにくの雨でしたが、無事にフィールドワークを行なうことができました。戦跡を実際に見た参加者が一様に目を丸くして、しげしげと見ている様子が印象的でした。

「沖縄戦は直接知っている人がいる記憶の時代から、記録の時代へ移り変わっています。戦争遺跡を学ぶことは、戦争の実相を後世に継承するために重要です」という講師の言葉に、沖縄戦体験の証言だけでなく、戦争遺跡の保存の重要性も感じた1日となりました。

(事務局)



ウローカー砲台跡にて。写真ではわかりにくいですが、大粒の大雨が降っています。急きよ木の下で講師に解説してもらいました。



前川民間防空壕群にて。壕口の見学後、説明版を見ながら講師に解説してもらいましたが、ここでも段々と雨が強くなり……。あまりのタイミングの良さに笑いつつ急いでバスに戻りました。

□執筆者一覧

小濱 武 沖縄国際大学経済学部 准教授（「戦後史 産業」専門部会長）

山内 優希 北中城村教育委員会生涯学習課

沖縄国際大学経済学部 小濱武ゼミ [川満凌也／島袋史野／外間大智／森根凜／神田一世／喜納愛子／城間健太郎／仲村好生／伊野波柚希／玉城日奈／仲嶺慎人／仲本せり／小橋川優里／島袋剛実／宮平耀太／山内琉矢]

新垣瑛士／亘保はるな／宮城ひなた

□協力者・協力機関（敬称略）

いのうえちず／北上田源／古賀徳子／山口剛史／山城彰子／川満彰／若梅会／ひめゆり平和祈念資料館／竹富町教育委員会社会文化課

□編集事務局

南城市教育委員会文化課市史編さん係 [課長 山里昌次／主幹兼係長 勢理客智也／主査 新垣瑛士／市史編さん係 亘保はるな、宮城ひなた、砂川優美、大島綾、村上智]

令和7年度（2025）なんじょう歴史文化保存継承事業 年報

2026年（令和8）2月27日発行

編集・発行 南城市教育委員会文化課
〒901-1495 沖縄県南城市佐敷字新里 1870 番地
電 話：098-917-5374
メール：bunka@city.nanjo.lg.jp

印刷・製本 大里印刷有限会社
〒901-1207 沖縄県南城市大里字古堅 962 番地 2
電 話：098-945-0557
メール：ohzato@poppy.ocn.ne.jp

本書は沖縄振興特別推進交付金を受けて刊行された。



なんじょうデジタルアーカイブ
Nanjo Digital Archives



